白岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

山遺跡（第5・11・18地点）

市内遺跡群発掘調査報告書 XXXI

2024

白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書第33集　山遺跡（第5・11・18地点）　市内遺跡群発掘調査報告書 XXXI　白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

山遺跡（第5・11・18地点）

市内遺跡群発掘調査報告書 XXXI

2024

白岡市教育委員会

序

このたび白岡市教育委員会では、『山遺跡（第5・11・18地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。目覚ましい人口増加を背景に、平成24年10月には単独で市制を施行いたしましたが、目を転じますと郊外には、まだまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

今回報告します山遺跡の調査は、これまで19次にわたる発掘調査を実施し、大きな成果をあげて参りました。特に、今から約4000年前の縄文時代中期の大集落として注目を集め、その豊富な出土資料から白岡市を代表する縄文時代の集落遺跡であることがわかってきました。今回の調査では縄文時代中期の住居跡の発見はもちろん、明治時代の瓦窯跡を発見するなど、近代における当地の産業を考える上で重要な成果を得ることができました。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

白岡市教育委員会
教育長　**横松伸二**

例　言

1　本書は、埼玉県白岡市内に所在する山遺跡（第5・11・18地点）の発掘調査報告書である。

2　調査地点所在地は、以下のとおりである。

山遺跡（第5地点）：白岡市白岡790-3、-10、791-1

山遺跡（第11地点）：白岡市白岡819-1

山遺跡（第18地点）：白岡市白岡746-2、-8

3　発掘調査は、白岡市教育委員会が主体となって実施した。調査費用及び整理作業費用は白岡市教育委員会が負担した。

4　調査期間は、以下のとおりである。

山遺跡（第5地点）：平成11年4月5日から平成11年5月31日まで

山遺跡（第11地点）：平成25年8月5日から平成25年8月9日まで（国庫補助事業）

山遺跡（第18地点）：令和4年9月1日から令和4年10月25日まで（国庫補助事業）

5　指示通知番号は、以下のとおりである。

山遺跡（第5地点）：平成11年3月31日付け教文第3-856・-857・-858号（指示）

平成11年3月25日付け教委第1672・1673・1674号（通知）

山遺跡（第11地点）：平成25年9月18日付け教生文第5-724号（指示）

平成25年7月25日付け生学第186号（通知）

山遺跡（第18地点）：令和4年8月25日付け教文資第5-1089号（指示）

令和4年8月25日付け学び第146号（通知）

6　発掘調査は、第5地点を奥野 麦生と松崎 慶喜が、第11地点を杉山 和徳が、第18地点を杉山と爲國 翠子が担当した。

整理作業及び報告書作成作業は、奥野と杉山が担当した。

7　遺物の実測は、奥野と杉山が担当し、田中 優起、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。

8　本書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ：杉山

Ⅲ：奥野、田中

9　発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である佐藤 良則様、高橋 公丸様、中村 恵美子様、浅川 幸作様、細井 秀弥様、株式会社ハウスプラザ 代表取締役 堀込 善道様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。

板垣 時夫、鬼塚 知典、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、関 絵美、守谷 健吾、油布 憲昭。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会文化資源課、

白岡市文化財保護審議会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

10　発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。

青木 美代子、池田 ひろ枝、石井 匠、石津 薫、江原 ウメ子、大久保 つね子、大野 美沙子、

折原 奈美子、桂 都、金子 悦子、川島 みつ、興野 明夫、黒田 雅之、坂田 玲子、下田 富士子、

末次 雄一郎、菅原 春男、髙橋 安代、竹内 玖仁代、田中 玉緒、丹下 幸男、寺岡 百合子、鳥海 恵子、中尾 亜子、長倉 知以子、中山 敏夫、藤巻 良雄、細井 まさ子、堀田 勤一郎、槙島 武二、増田 香織、水澤 和子、森本 美代子、蓬田 富江、山田 登、渡邉 宏士朗、渡辺 トシ子、渡辺 英子（50音順、敬称略）。

11　調査組織は以下のとおりである。

調査組織（令和5年度）

調査主体者	白岡市教育委員会	
事　務　局	教　　育　　長	横松 伸二
	教　育　部　長	阿部 千鶴子
	生 涯 学 習 課 長	大久保 秀樹
	文化財保護担当主査	杉山 和徳（調査担当）
	同主任専門員	奥野 麦生（調査担当）
	同会計年度任用職員	田中 優起（調査担当）

凡　　例

1　本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海抜を表す。

2　使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。

X＝977.071m、Y＝－15,468.809m（5A コウ107）

X＝1,057.000m、Y＝－15,465.000m（遺跡原点）

巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。

3　本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構：1/60　遺物：土器実測図・拓影図・石器実測図1/3

4　挿図と表中の略号は以下のとおりである。

H：住居跡　SB：掘立柱建物跡　SK：土坑　FP：炉穴　SD：溝跡　SX：不明遺構　P：ピット

5　遺構の計測表・遺物の観察表において残存値には（　）を付して表記した。

6　磁着度はリング状フェライト磁石（30×17×5㎜）を用いて、資料の磁着反応を1から順に数字で評価したもので、数値が大きいほど着磁性が強いことを意味する。磁石を用い、35㎝の高さから木綿糸で吊り下げた状態で使用する。資料を順次接近させることにより磁石が動き始める距離単位（6㎜を1単位とする）を評価台紙上で読み取り、数値化された遺物の評価をする方法である。磁着度0は非磁着を表す。

目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査の概要…… 1
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　調査の経過…… 1

Ⅱ　位置と環境…… 3
　1　遺跡の立地と地理的環境…… 3
　2　歴史的環境…… 3

Ⅲ　調査の成果…… 7
　1　遺跡の概要と調査地点の様相…… 7
　2　第5地点の遺構と遺物…… 9
　(1) 住居跡…… 9
　(2) 掘立柱建物跡…… 23
　(3) 土坑…… 26
　(4) 炉穴…… 62
　(5) 溝跡…… 65
　(6) 瓦窯跡…… 73
　(7) グリッド出土遺物…… 78
　3　第11地点の遺構と遺物…… 90
　(1) 住居跡…… 90
　(2) 土坑…… 99
　(3) 調査区出土遺物…… 99
　4　第18地点の遺構と遺物…… 103
　(1) 住居跡…… 103
　(2) 土坑…… 110
　(3) 不明遺構…… 112
　(4) 調査区出土遺物…… 113

Ⅳ　考　　察…… 116
　1　瓦窯跡の操業年代と瓦生産…… 116

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図　山遺跡と周辺の遺跡分布図…… 5
第2図　山遺跡の位置と発掘調査区…… 6
第3図　第5地点全測図…… 8
第4図　第1号住居跡…… 9
第5図　第1号住居跡出土遺物…… 10
第6図　第2号住居跡…… 12
第7図　第2号住居跡出土遺物（1）…… 13
第8図　第2号住居跡出土遺物（2）…… 14
第9図　第3号住居跡…… 16
第10図　第3号住居跡出土遺物（1）…… 17
第11図　第3号住居跡出土遺物（2）…… 18
第12図　第4号住居跡…… 19
第13図　第4号住居跡出土遺物…… 20
第14図　第5号住居跡…… 21
第15図　第5号住居跡出土遺物…… 22
第16図　第1号掘立柱建物跡…… 24
第17図　第2号掘立柱建物跡…… 25
第18図　第3号掘立柱建物跡…… 26
第19図　第4号掘立柱建物跡（1）…… 27
第20図　第4号掘立柱建物跡（2）…… 28
第21図　第5号掘立柱建物跡…… 29
第22図　第1～12号土坑…… 31
第23図　土坑出土遺物（1）…… 32
第24図　第13～25号土坑…… 34

第25図　土坑出土遺物（2）…… 35
第26図　第26～38号土坑…… 39
第27図　土坑出土遺物（3）…… 40
第28図　第39～52号土坑…… 43
第29図　土坑出土遺物（4）…… 44
第30図　第53～59号土坑…… 47
第31図　第60～68号土坑…… 50
第32図　土坑出土遺物（5）…… 51
第33図　第69～81号土坑…… 54
第34図　第82～93号土坑…… 57
第35図　土坑出土遺物（6）…… 58
第36図　第94～100号土坑…… 61
第37図　第1～4号炉穴…… 63
第38図　炉穴出土遺物…… 64
第39図　第1～6号溝跡…… 66
第40図　第1～4号溝跡…… 67
第41図　第5・6号溝跡…… 68
第42図　溝跡出土遺物（1）…… 69
第43図　溝跡出土遺物（2）…… 70
第44図　溝跡出土遺物（3）…… 72
第45図　第1号瓦窯跡（1）…… 74
第46図　第1号瓦窯跡（2）…… 75
第47図　第1号瓦窯跡（3）…… 76
第48図　第1号瓦窯跡出土遺物…… 77
第49図　第1号瓦窯跡関連土製品…… 78
第50図　グリッド出土遺物（1）…… 79
第51図　グリッド出土遺物（2）…… 80
第52図　グリッド出土遺物（3）…… 82
第53図　グリッド出土遺物（4）…… 83
第54図　グリッド出土遺物（5）…… 84
第55図　グリッド出土遺物（6）…… 85
第56図　グリッド出土遺物（7）…… 86
第57図　グリッド出土遺物（8）…… 87
第58図　第5地点出土金属製品…… 88
第59図　第11地点全測図…… 90
第60図　第6号住居跡（1）…… 91
第61図　第6号住居跡（2）…… 92
第62図　第6号住居跡出土遺物（1）…… 93
第63図　第6号住居跡出土遺物（2）…… 94
第64図　第6号住居跡出土遺物（3）…… 95
第65図　第6号住居跡出土遺物（4）…… 97
第66図　第6号住居跡出土遺物（5）…… 98
第67図　第101号土坑…… 100
第68図　土坑・調査区出土遺物…… 100
第69図　第18地点全測図…… 102
第70図　第7号住居跡（1）…… 103
第71図　第7号住居跡（2）…… 104
第72図　第7号住居跡出土遺物…… 105
第73図　第8号住居跡…… 106
第74図　第8号住居跡出土遺物（1）…… 107
第75図　第8号住居跡出土遺物（2）…… 108
第76図　第8号住居跡出土遺物（3）…… 109
第77図　第102～104号土坑…… 111
第78図　第1号不明遺構…… 111
第79図　土坑・不明遺構出土遺物…… 112
第80図　調査区出土遺物（1）…… 114
第81図　調査区出土遺物（2）…… 115

表　目　次

第1表　周辺遺跡地名表…… 4
第2表　第1号住居跡出土石器計測表…… 11
第3表　第2号住居跡出土石器計測表…… 15
第4表　第3号住居跡出土石器計測表…… 17
第5表　第4号住居跡出土石器計測表…… 20
第6表　第5号住居跡出土石器計測表…… 23
第7表　掘立柱建物跡ピット計測表…… 30
第8表　土坑・炉穴出土石器計測表…… 65
第9表　溝跡出土石器計測表…… 73
第10表　グリッド出土石器計測表…… 89

第11表　第11号地点出土石器計測表……101
第12表　第7号住居跡出土石器計測表……105
第13表　第8号住居跡出土石器計測表……110
第14表　第1号不明遺構出土石器計測表……113
第15表　調査区出土石器計測表……115

写真図版目次

図版1　掘削作業状況（1）
掘削作業状況（2）
実測作業状況（1）
実測作業状況（2）
図版2　第5地点調査区北半部全景
第5地点調査区南半部全景
図版3　第1号住居跡
第2号住居跡
第3号住居跡
図版4　第4号住居跡
第5号住居跡
第1号掘立柱建物跡
図版5　第1号土坑
第3号土坑
第7号土坑
第8号土坑
第9号土坑
第16号土坑
図版6　第21号土坑
第22号土坑
第26号土坑
第27号土坑
第30号土坑
第46号土坑
図版7　第51号土坑
第56号土坑
第61・62号土坑
第71号土坑
第76号土坑
第79号土坑
図版8　第81号土坑
第82号土坑
第87号土坑
第90号土坑
第2号炉穴
第3号炉穴
図版9　第3号溝跡
第4号溝跡
第5号溝跡
第6号溝跡
図版10　第1号瓦窯跡遺物出土状況
第1号瓦窯跡A窯体瓦出土状況
第1号瓦窯跡B窯体瓦出土状況
第1号瓦窯跡A窯体土層断面
第1号瓦窯跡底面検出状況
第1号瓦窯跡完掘状況
図版11　第1号住居跡出土遺物
第2号住居跡出土遺物（1）
第2号住居跡出土遺物（2）
図版12　第3号住居跡出土遺物（1）
第3号住居跡出土遺物（2）
第4号住居跡出土遺物
第5号住居跡出土遺物
図版13　土坑出土遺物（1）
土坑出土遺物（2）
土坑出土遺物（3）
土坑出土遺物（4）
図版14　土坑出土遺物（5）
土坑出土遺物（6）
炉穴出土遺物
溝跡出土遺物（1）
溝跡出土遺物（2）

図版15　溝跡出土遺物（3）
第1号瓦窯跡出土遺物
第1号瓦窯跡関連土製品
グリッド出土遺物（1）
グリッド出土遺物（2）
図版16　グリッド出土遺物（3）
グリッド出土遺物（4）
グリッド出土遺物（5）
グリッド出土遺物（6）
図版17　グリッド出土遺物（7）
グリッド出土遺物（8）
第5地点出土金属製品
図版18　第11地点調査区全景
第6号住居跡
図版19　第6号住居跡遺物出土状況（1）
第6号住居跡遺物出土状況（2）
第101号土坑
図版20　第6号住居跡出土遺物（1）
第6号住居跡出土遺物（2）
第6号住居跡出土遺物（3）
図版21　第6号住居跡出土遺物（4）
図版22　第6号住居跡出土遺物（5）
土坑・調査区出土遺物
図版23　第18地点調査区東半部全景
第18地点調査区西半部全景
図版24　第7号住居跡
第7号住居跡炉体土器
第8号住居跡
図版25　第102・103号土坑
第104号土坑
第1号不明遺構
図版26　第7号住居跡出土遺物
第8号住居跡出土遺物（1）
第8号住居跡出土遺物（2）
図版27　第8号住居跡出土遺物（3）
土坑・不明遺構出土遺物
調査区出土遺物（1）
調査区出土遺物（2）

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92㎢の市で、東西約10㎞、南北約6㎞と東西方向に長い。市域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と日勝村及び大山村の一部の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40㎞圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅の増加が目立ち、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する山遺跡（第5・11・18地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2　調査の経過

山遺跡（第5地点）は、個人住宅建設計画に伴い平成11年3月30日・31日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の西寄りに位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成11年4月5日	調査区北半部表土除去、周辺環境整備、基準杭設定
4月8日～30日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
5月10日	排土反転、調査区南半部表土除去、周辺環境整備、基準杭設定
5月12日～28日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
5月31日	埋め戻し作業、調査終了

山遺跡（第11地点）は、個人住宅建設計画に伴い平成25年7月18日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の北寄りに位置し、標高は約15mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成25年8月5日	表土除去
8月6日	周辺環境整備
8月7日・8日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業

8月9日　　埋め戻し作業、調査終了

山遺跡（第18地点）は、個人住宅建設計画に伴い令和4年7月14日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の南寄りに位置し、標高は約16mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

令和4年 9月1日　　調査区東半部表土除去
9月6日　　周辺環境整備、基準杭設定
9月9日～28日　　包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
10月5日・6日　　排土反転、調査区西半部表土除去
10月12日～19日　　包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
10月25日　　埋め戻し作業、調査終了

Ⅱ　位置と環境

1　遺跡の立地と地理的環境

山遺跡の位置する地域は、近世村名をとって白岡地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台上にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9㎞にわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋（にっかわすじ）」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。

また、支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するのに対し、東縁は沖積低地との差が不明瞭となるという特徴をもつ。

2　歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、山遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山遺跡やタタラ山遺跡、篠津地区の中妻遺跡や小久喜地区の鬼窪尾張繁政館跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。縄文時代早期初頭の撚糸文期の資料は、篠津の中妻遺跡やタタラ山遺跡などで検出されるが、遺構の確認事例はない。条痕文期の事例では、野島式期から茅山上層式期まで比較的検出量も多く、多数の炉穴や住居跡の検出事例もあり、白岡支台に本格的に人々の暮らしの痕跡が残され始める時期だと見ることができる。

縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山遺跡で70軒に及ぶ住居跡などが検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形豊かな石製装飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなろう。前期後半以降では、元荒川左岸最奥貝塚として知られる正福院貝塚を擁し、昭和62年の正福院本堂の発掘調査では、黒浜式期の住居跡2軒が検出されている。また、諸磯ｂ式期に茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利Ｅ式期からで、山遺跡をはじめ、沖山西遺跡やタタラ山遺跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。

縄文時代後期から晩期になると、遺跡数は限定されるものの、一遺跡において膨大な量の遺物を伴うようになる。昭和26年に國學院大學考古学会が発掘調査を行ったことで著名な入耕地遺跡は、正福院貝塚との間に入る小支谷の谷頭を囲むように環状盛土遺構を形成しており、堀之内式期から安行3a ～3d 式期の遺物が確認される。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で住

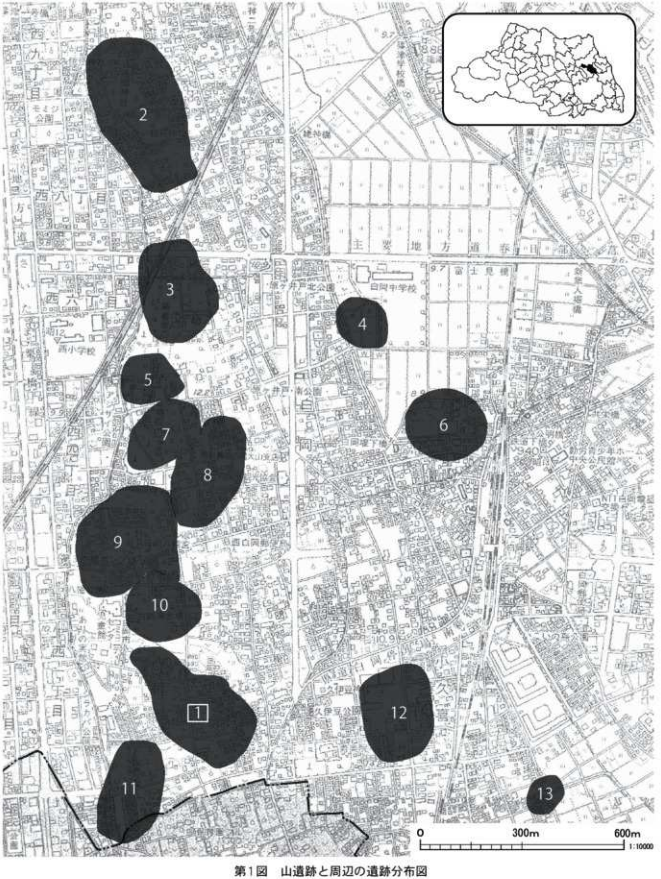
居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。一方、古墳時代中・後期は中妻遺跡や神山興善寺遺跡で住居跡が数軒検出される程度である。

奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。中妻遺跡では精錬作業を含む鍛冶操業を行っていた8世紀代の鍛冶工房跡が検出された。山遺跡や鬼窪尾張繁政館跡においても同時期の木炭窯跡が検出されており、鍛冶関連遺構への炭の供給が想定される。

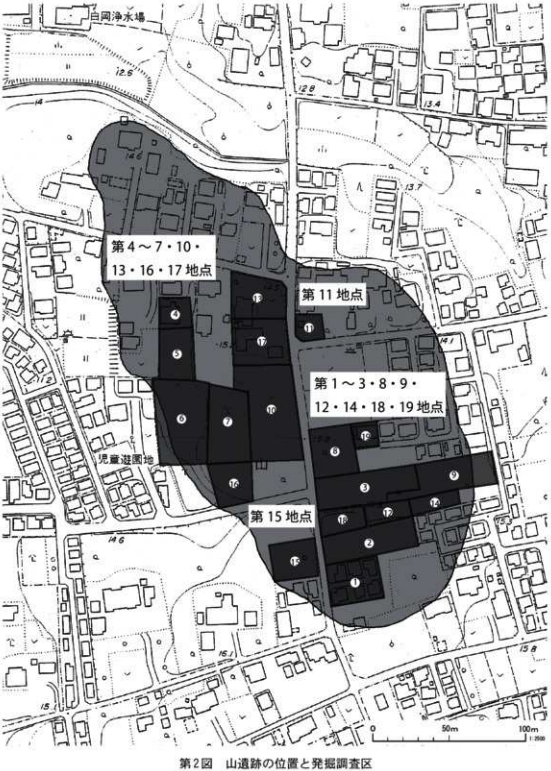
中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の埼西郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡近辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが伝承されている。

第1表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所　在　地	時　代	発掘調査(年度)
1	**山遺跡**	**白岡字山**	**旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世**	**昭和62・平成2・9・11・12・18・21・23・25・27・令和元・2・3・4・5**
2	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27・28・29・令和元・2・3・4
3	神山興善寺遺跡	篠津字神山・白岡字東	縄文前・中、古墳中・後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26・29・令和元
4	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
5	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
6	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
7	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
8	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25・28・30・令和2・3
9	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18・令3
10	新屋敷遺跡	白岡字茶屋	縄文早～後、平安、近世	平成6・令和元
11	タタラ山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和59・平成4・6・11・12・13・25・29・令和2・3
12	鬼窪尾張繁政館跡	小久喜字中村	旧石器、縄文中～晩、奈良・平安、中世、近世	平成7・9・18・19
13	小久喜神辺遺跡	小久喜字神辺	縄文中、近世	



第1図　山遺跡と周辺の遺跡分布図



第2図　山遺跡の位置と発掘調査区

Ⅲ　調査の成果

1　遺跡の概要と調査地点の様相

山遺跡は大宮台地白岡支台の中央部に位置する。一帯は小字名「山」にふさわしく、かつては山林景観が良好に保たれていて、地元では「白岡の軽井沢」などと形容する声も聞かれたものの、近年は宅地化が急速に進行し、かつての景観は見る影もない。同支台の西側は元荒川の沖積地と接して明瞭な崖線を形成する。崖線縁辺は若干の小支谷が入り込み、それを取り囲むように遺跡が連綿と形成される。山遺跡は北側を「八幡磯」と呼ばれる支谷に、南側を天神磯と呼ばれる支谷に挟まれた舌状台地上に発達した集落遺跡で、さらに「天神磯」の谷頭部を囲むように展開する。おそらく、天神磯の谷の南側、本遺跡の西側に隣接するタタラ山遺跡と接する、あるいは一部重複するように広がる可能性が高いものとみられ、これを裏付けるように、タタラ山遺跡からは少数ながら縄文時代中期の住居跡も確認されている。

当遺跡はこれまでに本報告地点を含む計19地点で発掘調査を実施しており、縄文時代中期を中心とした大規模集落の様相が明らかになるとともに、平安時代の木炭窯跡や中世の建物跡も発見され、長期間にわたり人々の生活の舞台であることがわかっている。

縄文時代中期後半の加曾利Ｅ式後半期の集落遺跡としては、合計20軒を上回る住居跡、土坑などが検出されている。特に第18地点の南側に位置する第1・2地点では、加曾利ＥⅢ式期の竪穴住居跡群が検出されており、窓枠状モチーフの連なる口縁部文様帯を伴わない、いわゆる吉井城山類型や隆帯による渦巻文を構成するいわゆる梶山類型に該当する良好な土器群を伴う事例として注目される。

第18地点に隣接する第3・12地点とその東側に位置する第9地点の3地点で1基の木炭窯跡は、奈良・平安時代の所産で、当地域の古代の生業を考える上で、興味深い遺構である。木炭窯は鍛冶のみならず製鉄を含む鉄生産に資するものであることが想定され、隣接するタタラ山遺跡の名前のもととなった周辺の小名である「タタラ山」から、周辺におけるタタラ製鉄に伴う製鉄炉の痕跡が残されている可能性が高いものと考えられる。燃料炭の焼成を行っていた木炭窯の確認は、地域の言い伝えの信憑性を高めるものであろう。

視野を広げると、篠津の中妻遺跡で精錬炉を持つ工房跡の検出や小久喜の鬼窪尾張繁政館跡、沖山西遺跡の木炭窯の検出事例などは、古代末期から中世におけるこの地域での鉄生産のあり方やその後の中世期の様相を理解する上で、極めて重要な視点を投げかけているものといえる。既述の鬼窪尾張繁政館跡や中妻遺跡のほか、山遺跡が面する八幡磯の北方に展開する入耕地遺跡においても、中世豪族の鬼窪氏の居館跡が検出されている。また、広く関連文化財群として捉えようとしたとき、地名、縄文遺跡、古代遺跡、中世豪族などを結び付けるストーリーの構成なども想定でき、地域資料を扱う上からも山遺跡の持つ意義は小さくない。

本報告の第5地点は遺跡の西寄りに位置し、標高は約15m、第11地点は遺跡の中央やや北東寄りに位置し、標高は約15m、第18地点は遺跡の南寄りに位置し、標高は約16mである。

本報告地点においては、縄文時代中期後半の住居跡が第5地点において5軒、第11地点において1軒、第18地点において2軒の計8軒が検出されるとともに、第5地点では近代の瓦窯跡も確認されている。

B
C
D
E
F
3
4
5
6
7
SK11
SK12
SK15
SK34
SK35
SK38
SK19
SK10
SK21
SK17
SK26
SK41
SK22
SK8
SK9
1H
SK18
SK24
SK23
SK1
SK47
SK48
SK16
SK39
第1号
瓦窯跡
SK25
SK28
SK43
SK46
SK66
SK7
SD1
SD2
FP3
FP4
SK59
FP2
SK31
SK37
SB1
SB2
3H
SK57
SK52
SD3
SK68
SK53
SK75
SK83
SB5
SB4
SK86
SK69
SK70
SK80
SK81
SD4
SD6
5H
SK100
SK76
SK73
SK71
SK79
SK64
SK91
SK89
SK85
SK84
SK99
SK96
SK78
4H
撹乱
SK95
SK58
SK97
SK40
SK74
SK72
SK39
SK94
SK63
SK92
FP1
SK62
SK61
SK66
SD5
0
4m
1:160

第3図　第5地点全測図

2　第5地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

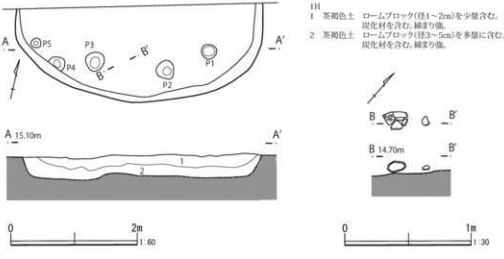
●第1号住居跡（第4図）

B1・C1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第54号土坑を切る。検出部分のみで長径約3.9m、短径約1.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.4mであった。住居跡に伴うピットは5基検出した。

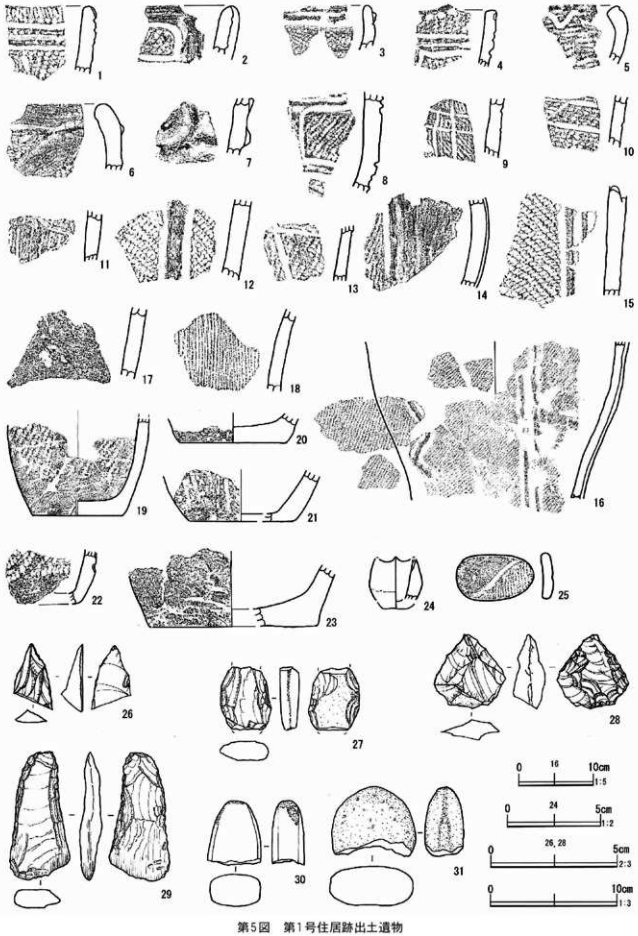
住居跡南寄りで縄文土器の大破片が出土した。

出土遺物（第5図）

土器　第5図1～6は本址出土の口縁部資料である。1は口縁部に縦位の刻みを密に施し、3条の横走沈線で画した口縁部文様帯を持ち以下に単節縄文を施すもの、2は窓枠状区画を持つキャリバー形深鉢の口縁部で、縦位の隆帯が観察される。3は口縁外縁に横走隆帯を付し、以下を単節RL縄文とするものである。おそらく横長の窓枠状区画を構成するものと思われる。4は山形の突起を持つと思われる口縁部資料で、口縁外縁に円形竹管を用いた刺突列が観察される。斜位回転の単節縄文が施された口縁部は内皮を明瞭に残す半裁竹管による平行沈線で下端を画し、以下は丸棒状施文具を用いた「II」状の沈線区画が施されるようである。5は内湾する口縁部資料で、単節縄文RL縄文を斜位回転させ、口縁外面に鋸歯文を描出するもの、6は内湾する大振りの深鉢で、微隆帯で画した「∩」状磨消文帯が施されるいわゆる岩坪類型に属する資料である。7～18は胴部資料である。7は隆帯で渦巻を描出するロ縁部付近のもの、8～10・13は縄文地文上に縦横の沈線でモチーフを描くもの、11は条縄文の地文上に縦位の蛇行沈線が看取されるもの、12・15は縄文地文上に沈線で縁どられた磨消文帯が垂下するもの、14は縄文帯と磨消文帯との区画を隆帯で行うものである。17は無文、18は縦位の密な条縄文を地文とするものである。16は残存部最大径35cm、残存高22cmほどの胴部資料で、単節RL縄文を縦位施文し、蛇行隆帯と2条1組の隆帯が垂下する資料である。19～23は本址出土の底部資料である。19は底径9cmほどの平底資料で単節RL縄文が縦位からやや斜位に回転施文される。21は底径8cmほどと推定される平底の資料で、垂下する縦位の沈線が観察される。22は、多裁竹管を用いたいわゆるキャタピラ文の施された底部資料である。



第4図　第1号住居跡



第5図　第1号住居跡出土遺物

土製品　第5図24はミニチュア土器の口縁部から胴部にかけての資料である。4単位の波状縁を呈するものと思われる。肉厚で内面は底部付近からわずかに外反しながら直線的に立ち上がるが、外面では胴部中位に最大径を持ち口縁部にかけて内傾するようにすぼまるものである。最大径4.2cm、推定高4cmほどを測る。25は楕円形の土製円盤である。単沈線で縄文帯と磨消文帯を画す胴部破片を素材とし周囲を丁寧に研磨整形している。

石器　第5図26は2次加工剥片である。正面図下方からの加撃による縦長の剥片を素材とし、右側縁に細かな押圧剥離による調整加工が施されている。27は打製石斧の残欠である。裏面に素材礫の表皮を残す、正面中央は主剥離である。両側縁を中心に荒い成形剥離を施したのち敲打成形している。基部刃部とも欠損する。28はチャート製の2次加工剥片である。正面下端に素材礫の表皮を残す。裏面中央は上部からの加撃による主剥離面である。正面には上部及び右側縁方向からのランダムな加撃による成形加工が施され、裏面では両側縁を中心に押圧剥離による調整加工が施される。厚みを残すが石鏃ブランクであろう。29は撥型の打製石斧である。緻密で軟質なホルンフェルスの剥片を素材とし両側縁及び基部に粗い成形加工を加える。器体中央から刃部は使用により摩滅しあたかも研磨したかのような様相を呈する。30は緑色岩を素材とした磨製石斧である。器体下半を欠く。基端部には敲打が加えられている。31は安山岩製の磨石である。両側縁を面取りし石鹸状に整形している。

第2表　第1号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
8	26	2次加工剥片	チャート	2.6	1.5	0.9	1.8	
8	27	打製石斧残欠	砂岩	(5.0)	3.8	1.5	(45.8)	
8	28	2次加工剥片	チャート	2.9	2.8	1.2	7.3	
8	29	撥形打製石斧	ホルンフェルス	10.2	3.8	1.4	90.7	
8	30	磨製石斧	緑色岩	(5.0)	4.1	2.5	(98.3)	
8	31	磨石	安山岩	(5.4)	6.7	3.1	(105.6)	

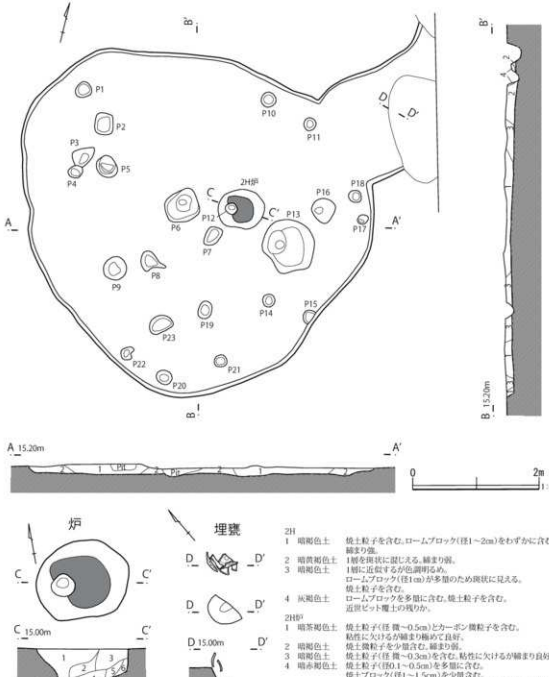
●第2号住居跡（第6図）

D1・2・E1・2グリッドに位置し、第3号掘立柱建物跡と第13・14・15・19・21・26・38号土坑に切られる。長径約5.1m、短径約5.8mを測り、平面形は不整円形で東側に張り出し部をもつ形状を呈す。張り出し部は長さ約1.9m、最大幅約1.7mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットは23基検出した。

炉跡は住居跡の中央やや東寄りで検出した。炉の平面形は長径約0.8m、短径約0.6mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。張り出し部に埋甕が認められた。埋設地点は第19・38号土坑に切られているものの、残存長約0.2mの土坑内から縄文土器の大破片が出土した。

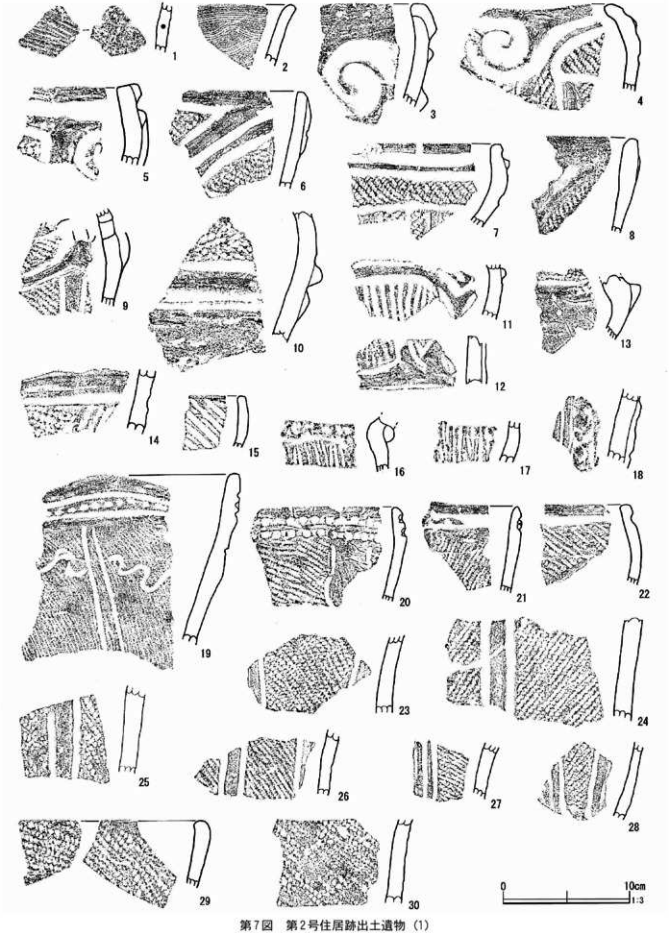
出土遺物（第7・8図）

土器　第7図1は縄文早期末葉に位置付けられる条痕文系土器群の胴部資料である。2は外反する口縁部に櫛状施文具で波状文の施される平縁深鉢で、諸磯a式に該当する。3～14は口縁部に隆帯による渦巻文を配すタイプの深鉢形土器で、加曾利EⅡ式からEⅢ式に比定される一群である。3は大型の渦巻文が、4・5は渦巻文とその両脇に展開する窓枠状の区画文が観察される。6・8・9・12では渦巻文から派生する斜行する隆帯が観察される。7・10では口縁部に展開する窓枠状区画が看取され区画内には単節縄文が充填されることがわかる。11は窓枠状の区画内に縦位の集合沈線が充填されるもの、13は窓枠状区画下端の隆

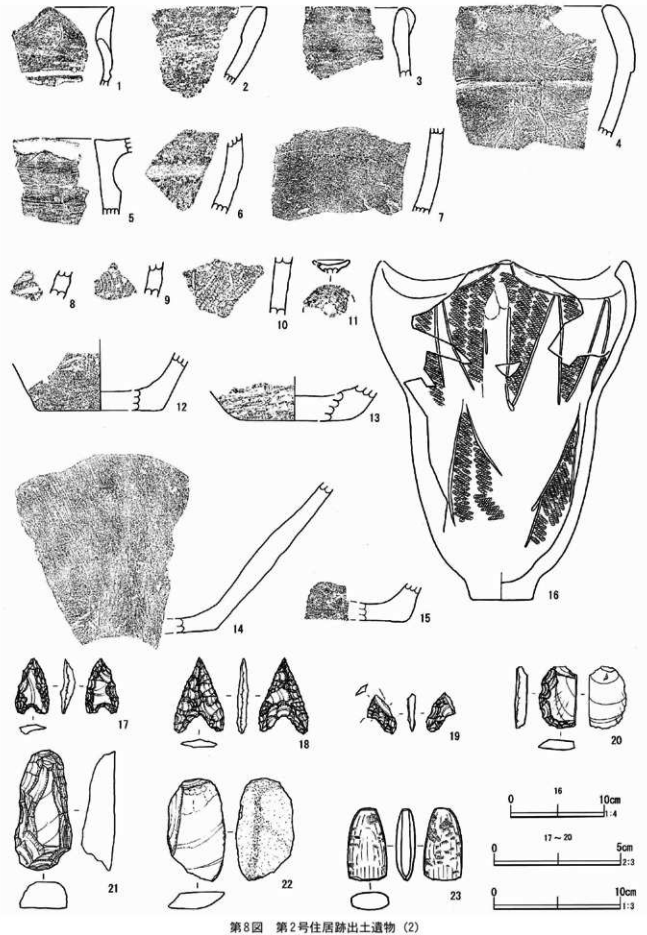


第6図　第2号住居跡

帯が鍔状にせり出すものである。14は口縁部文様帯の下部に形成された頸部無文帯から胴部にかけての資料で、節の大きな単節縄文を観察できる。15～18は前述の土器群に並行する曽利式に比定される一群である。15は右下がりに斜行する集合沈線が見られる口縁部資料、16～18は集合沈線を地文とする胴部資料であり、16では頸部に18では胴部に垂下する鎖状隆帯を観察できる。19は本址の炉から出土した資



第7図　第2号住居跡出土遺物（1）



第8図　第2号住居跡出土遺物（2）

料である。緩波状または、緩い山形突起を持つ深鉢形土器で、口縁部に2条の沈線で区画した刺突文帯を持つ。以下には条線地文上に垂下する2条の沈線とその左右に展開する蛇行沈線とが看取される。20はわずかに内湾する平縁深鉢で口縁部に横位2列の円形竹管刺突列が施され、以下に棒状施文具で引かれた沈線で区画される磨消文帯と縄文帯とが交互に展開する。地文は単節 RL 縄文縦位施文である。21は口縁部に沿う相互刺突文列を持つ平縁深鉢、22は内湾傾向を示す平縁深鉢である。23～28は加曾利ＥⅡ式からⅢ式期の胴部資料を一括したもので、単節縄文地文上に垂下する磨消文帯が見られる。29・30は縄文のみが施文された資料である。

第8図1～7は無文の資料を一括した。1は山形の突起を持つもので、下端を画す横走沈線が窺える。2～4は器形は異なるものの、口縁部を肥厚させる無文の資料である。5は口唇部が大きく外側へ張り出す大型の橋状把手を持つと思われる資料である。6・7は胴部資料で、前者では横走沈線が見られる。8～10は後述する埋甕とともに出土した資料で、8は斜行する隆帯の見られるもの、9は条線による渦巻文の見られるもの、10は単節縄文の施された資料である。11は波状縁の頂部についたと思われる装飾突起である。12～15は本址出土の底部資料である。14は外反しながら立ち上がる浅鉢形土器の底部である。16は推定口径28㎝、器高36㎝を測る4単位波状縁の深鉢形土器である。胴中央部に括れを持ち、その上下に棒状施文具によって区画された鋸歯状の縄文帯が形成されるものである。縄文は単節 LR 縄文を縦位に回転施文させたものである。胴下半の鋸歯状文と同上半の鋸歯状文とは組み合わない。口縁部には微隆帯で区画された無文帯を持つ。区画微隆帯は波頂部を避けるように巻き込んで口唇部で終わる。

石器　17～19は石鏃である。いずれも凹基無茎石鏃で、17は表裏両面の中央に素材剥片の主剥離を大きく残し、両側縁と基部に押圧剥離を加えたものである。そり具合から裏面上部にバルブが形成されていたものと思われるが、これを上手に除去している。18は長さ3.0㎝を測る大振りで整った石鏃である。表裏とも両側縁から足の長い成形剥離を加え、形状を整えるとともに器厚を薄く仕上げている。仕上げに押圧剥離による丁寧で規則的な調整剥離を加えている。19は石鏃脚部残欠である。正面右側縁ははじけており、さらに角度の鋭いものであった可能性がある。基部の抉りの深い大ぶりな資料と推定される。20は削器である。縦長の剥片を素材とし、裏面からの不規則な剥離によってＬ字型の刃部を形成している。裏面は素材のバルブとバルバースカーが残される。21はホルンフェルス製の打製石斧である。正面中央に素材剥片の主剥離を、裏面に素材の礫表皮を残す。厚みがある大型剥片が素材であるものと推定される。22は黒色緻密安山岩の剥片で、右側縁に使用痕と見られる微細な剥離が観察される。裏面は礫表皮である。23は緑色岩製の磨製石斧である。長さ5.7㎝、幅3.0㎝と小型の資料である。前面によく研磨され、主に縦位の研磨痕が捉えられる。

第3表　第2号住居跡出土石器計測表

図	№	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
9	17	石鏃未成品	チャート	2.2	1.4	0.7	1.3	
9	18	石鏃	チャート	3.0	2.0	0.4	1.6	
9	19	石鏃脚部	赤黒曜石	(1.4)	(1.0)	0.3	(0.3)	
9	20	削器	チャート	2.5	1.5	0.5	2.3	
9	21	撥形打製石斧	ホルンフェルス	9.7	3.8	2.1	123.9	
9	22	使用痕剥片	黒色緻密安山岩	8.2	4.6	0.9	58.9	
9	23	磨製石斧	緑色岩	5.7	3.0	1.4	45.1	

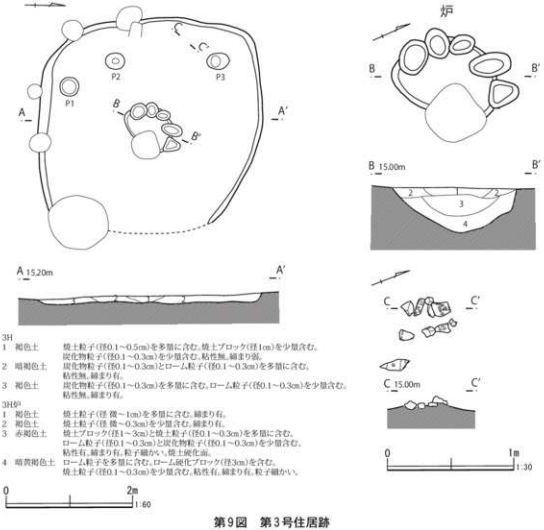
●第３号住居跡（第９図）

E3・F3グリッドに位置し、第51・52号土坑、第1・2号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約3.5m、短径約3.4mで不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡に伴うピットは3基検出した。

炉跡は住居跡の中央で検出した。炉の平面形は長径約0.8m、短径約0.6mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。住居跡北西寄りで石皿兼凹石の大破片が集中して出土した箇所が認められた。

出土遺物（第10・11図）

土器　第10図1は表裏に条痕文の観察される胴部資料で、縄文早期末葉に位置付けられる。2は口縁部に2条の横走沈線が引かれた平縁深鉢である。3は大振幅の波状縁となる資料で、波頂部外面に隆帯による渦巻文が付される。4は薄手無文の口縁部資料、5は縦位の撚糸文の施された胴部資料である。6は口縁部文様帯下端を丈の低い隆帯で画す資料と思われ、隆帯上下はよく撫でられる。地文は単節 RL 縄文である。7～9は縄文の施された胴部資料で、7・8では単沈線で画された磨消文帯が垂下する。9では蛇行沈線が垂下する。10は条線文の施された胴部資料である。12は縄文地文に沈線で縁どられた磨消文帯が垂下する胴下半部の資料である。残存部最大径21㎝、残存高18㎝を測る。



3H
1　褐色土　　焼土粒子(径0.1～0.5cm)を多量に含む,焼土ブロック(径1cm)を少量含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む,粘性無,締まり弱。
2　暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)とローム粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。
　　粘性無,締まり有。
3　褐色土　　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む,ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。
　　粘性無,締まり有。

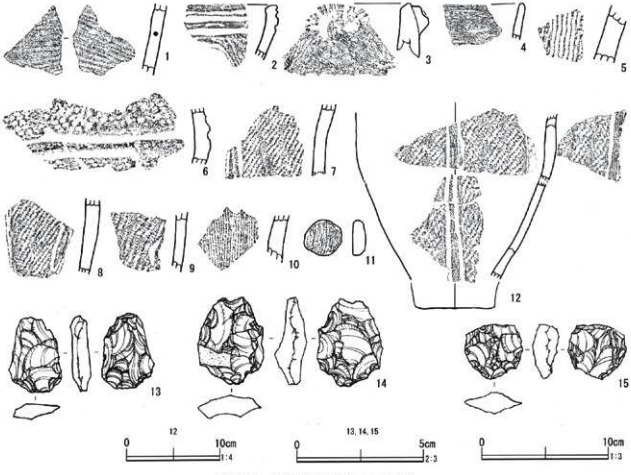
3H炉
1　褐色土　　焼土粒子(径 微～1cm)を多量に含む,締まり有。
2　褐色土　　焼土粒子(径 微～0.3cm)を少量含む,締まり有。
3　赤褐色土　焼土ブロック(径1～3cm)と焼土粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。
　　ローム粒子(径0.1～0.3cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。
　　粘性有,締まり有,粒子細かい,焼土炭化油。
4　暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む,ローム炭化ブロック(径3cm)を含む。
　　焼土粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む,粘性有,締まり有,粒子細かい。

第９図　第３号住居跡

土製品　11は土製円盤である。条線文の施された胴部破片を素材とし周縁を打ち欠いて整形している。

石器　3者はいずれも2次加工剥片としたが、いわゆる石鏃ブランクであろう。13はチャートの剥片を素材とし、周縁部からの階段状剥離で成形するものである。調整加工は行われていない。14は正面左下に素材の表皮を残す、表裏両面からの成形加工を行っているが、調整加工は加えられていない。15は円形に近い形状を呈するもので、あるいは上部を事故欠損したものである可能性もある。加工は周縁部からの成形加工のみで細かな調整加工は施されていない。

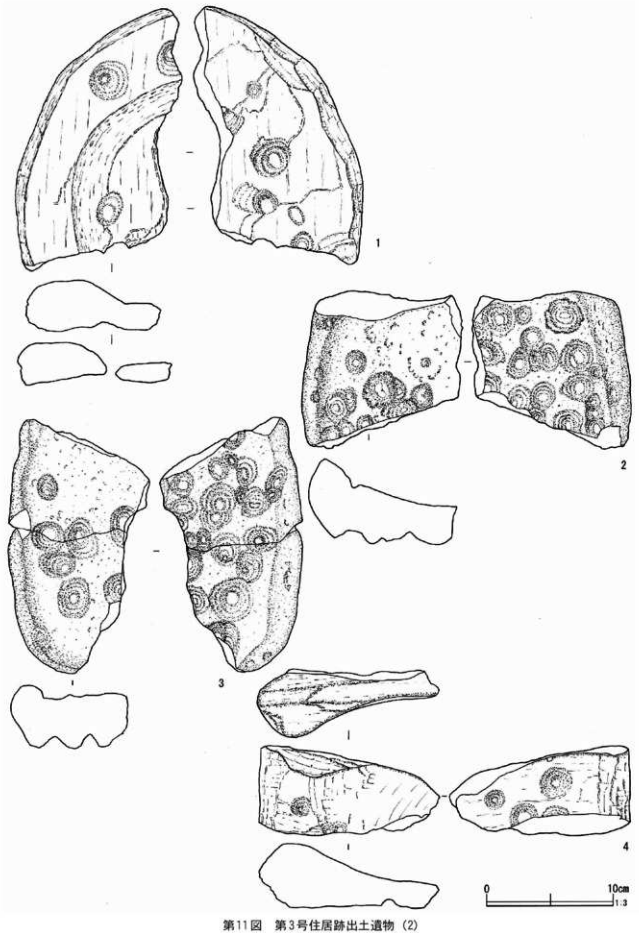
第11図1～4はいずれも石皿兼凹石である。本址の西側壁寄りから集中して出土したものである。本址の炉周辺には小孔が多く残されることから石囲炉が存在し、廃絶時に炉材の抜き取りを行い、残材を廃棄したものである可能性がある。



第10図　第3号住居跡出土遺物（1）

第4表　第3号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
10	13	2次加工剥片	チャート	3.0	2.1	0.7	5.1	
10	14	2次加工剥片	頁岩	3.5	2.5	1.3	9.5	石鏃ブランク
10	15	2次加工剥片	赤チャート	2.2	2.3	1.0	4.6	
11	1	石皿兼凹石	緑泥片岩	(20.5)	(10.7)	3.9	(986.0)	
11	2	石皿兼凹石	安山岩	(10.7)	(11.8)	4.1	(812.0)	
11	3	石皿兼凹石	安山岩	(18.7)	(9.2)	4.2	(1,070.0)	
11	4	石皿兼凹石	緑泥片岩	(6.6)	(14.3)	5.0	(578.0)	



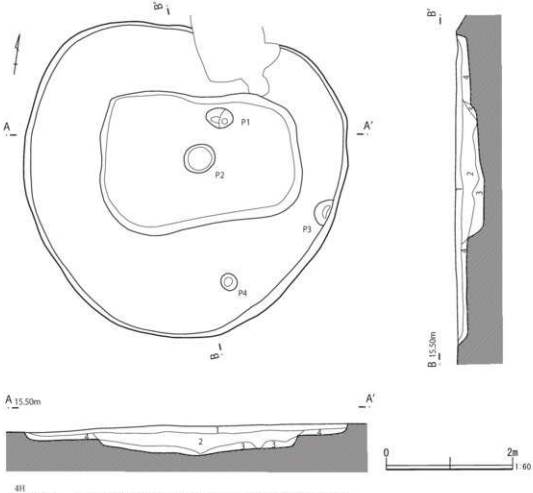
第11図　第3号住居跡出土遺物（2）

●第4号住居跡（第12図）

B5・C5グリッドに位置し、第71・81号土坑に切られる。残存部で長径約5.2m、短径約5.0mを測る。確認面から床面までの深さは約0.5mであった。住居跡に伴うピットは4基検出したが、炉の痕跡は確認できなかった。

出土遺物（第13図）

土器　第13図1～6は早期後半の条痕文期の資料である。1・2は外面に円形刺突を施し微隆帯や沈線を施す文様帯を持つ一群である。3では条痕文地文上に斜行する浅い沈線が看取されるもの、4～6は表裏に縄文の施された胴部資料である。7は細かい単節RL縄文を斜位回転させた胴部資料である。8は幅の広い多裁竹管を用いた押し引き刺突が看取されるもの、9は変形爪形文の施された胴部資料である。10は撚糸地文の口縁部資料で、角頭状の口縁部直下に1条の横走沈線が引かれるものである。11は口縁部に隆帯とこれに沿う沈線とで画した横長の窓枠状区画を持つ資料である。12は微隆帯で口縁部無文帯と縄文帯を画す緩波状縁深鉢である。波頂下に「∩」状の磨消文帯が配されるものと思われる。13は縄文地文上に斜行する沈線の末端が観察される資料、14は縄文地文に垂下する磨消文帯が施されるもの、15は無文の

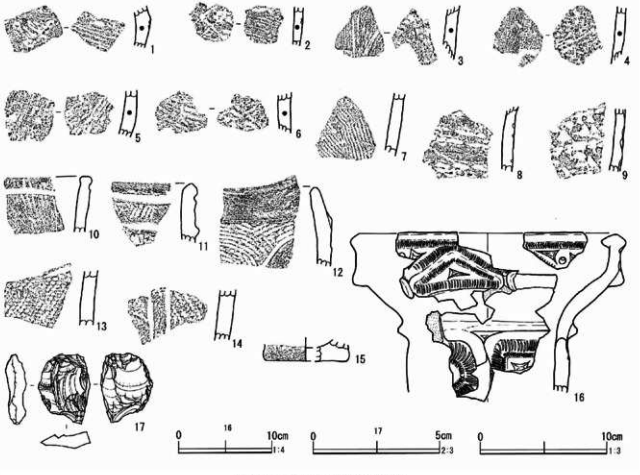


4H
1　暗褐色土　　褐色土ブロック(径2～3cm)とローム粒子(径 微～1.5cm)を少量含む。締まり良好。
2　暗褐色土　　褐色土ブロック(径2～3cm)と焼土微粒子を含む。締まり極めて良好。
3　褐色土　　暗褐色土ブロック(径2cm)とローム粒子(径 微～2cm)を含む。締まり良好。
4　暗褐褐色土　ローム粒子(径0.2cm)とカーボン粒子を含む。締まり良好。

第12図　第4号住居跡

底部資料である。16は推定口径29cmほどと思われる深鉢形土器である。口縁部は内側へ大きく張り出すほか、外面にも隆帯を貼りこれを圧着するようにいわゆるキャタピラ文を密に施す。口縁部文様帯には隆帯で形成する三角形区画を上向き下向きに組み合わせた区画文が配され、区画内には玉抱きの三叉文が陰刻される。頸部には無文帯を配し、胴部には隆帯で隅丸方形のパネル状の文様が配される。

石器　17は赤色チャート製の2次加工剥片である。不整形剥片を素材とし、正面左側縁辺に正面側からの押圧剥離による調整加工を施している。正面側の剥離は右側縁側から行われるが、裏面に残された主剥離は上部からの加撃によるものであることがわかる。



第13図　第4号住居跡出土遺物

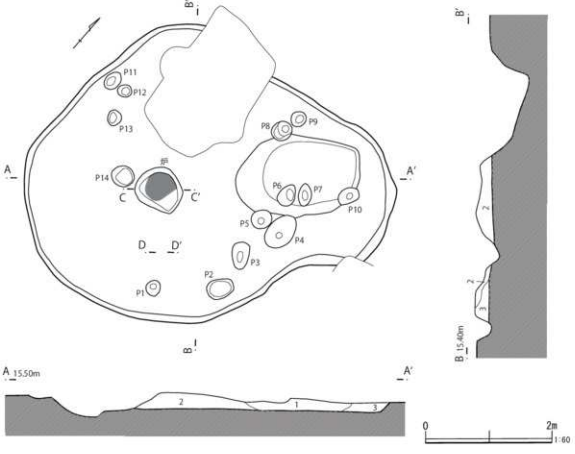
第5表　第4号住居跡出土石器計測表

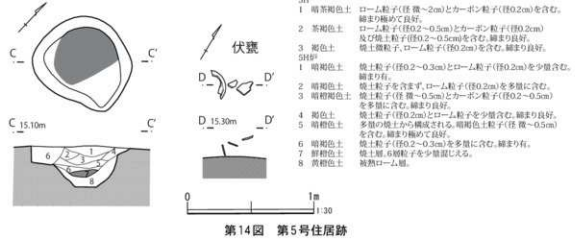
図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
13	17	2次加工剥片	赤チャート	2.7	2.1	0.8	3.8	

●第５号住居跡（第14図）

C4・5・D4・5グリッドに位置し、第53・76・77号土坑と第４号溝跡に切られる。長径約4.7m、短径約4.1mを測り、平面形は不整円形で東側に張り出し部をもつ形状を呈す。張り出し部は長さ約1.5m、最大幅約2.3mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.3mであった。住居跡に伴うピットは14基検出した。

炉跡は住居跡の中央で検出した。炉の平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。炉跡の北寄りで直径約0.4mの焼土の広がりが認められた。住居跡南寄りで伏甕が認められた。

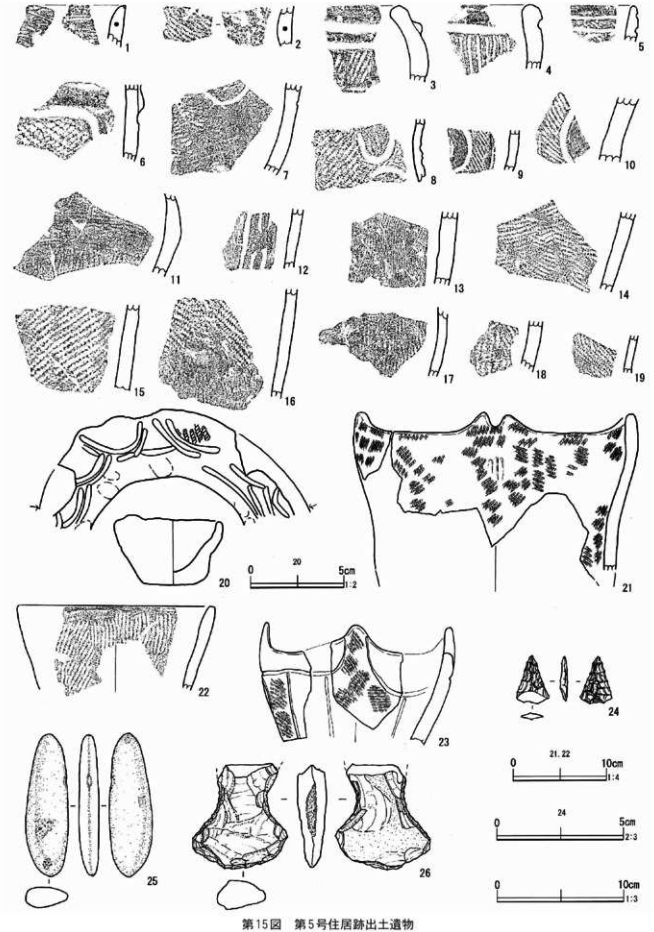




5H
1　暗茶褐色土　ローム粒子（径 微～2cm）とカーボン粒子（径0.2cm）を含む。締まり極めて良好。
2　茶褐色土　ローム粒子（径0.2～0.5cm）とカーボン粒子（径0.2cm）及び焼土粒子（径0.2～0.5cm）を含む。締まり良好。
3　褐色土　焼土微粒子、ローム粒子（径0.2cm）を含む。締まり良好。

5H炉
1　暗褐色土　焼土粒子（径0.2～0.3cm）とローム粒子（径0.2cm）を少量含む。締まり有。
2　暗褐色土　焼土粒子を含まず、ローム粒子（径0.2cm）を多量に含む。
3　暗橙褐色土　焼土粒子（径 微～0.5cm）とカーボン粒子（径0.2～0.5cm）を多量に含む。締まり良好。
4　褐色土　焼土粒子（径0.2cm）とローム粒子を少量含む。締まり良好。
5　暗橙色土　多量の焼土から構成される。暗褐色土粒子（径 微～0.5cm）を含む。締まり極めて良好。
6　暗褐色土　焼土粒子（径0.2～0.3cm）を多量に含む。締まり有。
7　鮮橙色土　焼土塊、6層粒子を少量混じえる。
8　黄橙色土　被熱ローム層。

第14図　第５号住居跡



第15図　第5号住居跡出土遺物

出土遺物（第15図）

土器　第15図1・2は表裏に条痕文の施される縄文早期後半の一群である。前者は口縁部資料で、口唇部には刻みが施される。後者は表裏条痕の胴部資料である。3は内湾傾向を示す平縁土器で、口縁部の横走隆帯を付し上下をよく撫でている。以下は縄文の充填された窓枠状の区画が配される。4は口縁部の横走沈線以下に縦位の集合沈線を施す平縁土器である。5は2本の沈線で画された縄文帯が口縁部を巡り、以下に斜行する縄文帯が配されるもののようである。6～19は本址出土の胴部資料である。6は横走する低平な隆帯の下に縦位に窓枠状の区画を持つもの、7～10は縄文地文上に沈線で区画された磨消文帯が描出される一群である。7・8は「∩」状や「U」状の沈線が観察されるものであるが、9・10はアルファベット状の縄文帯と磨消文帯とが入組むものであろうか。11は無文の資料である。器面整形痕が良く残る。12・13は条線文を地文とするもので、前者では磨消文帯が形成され内部に単沈線が施される。14～19は縄文の施された胴部資料である。21は最大径30㎝、残存高18.5㎝ほどを測る双頭の波状縁資料である。器面は全面に単節 RL 縄文が施される。焼成がやや甘く器面の風化が進行している。22は推定口径21㎝、残存高9㎝ほどの鉢形土器である。地文は単節 RL 縄文で縦位から斜位に回転させ条の走行方向が転写されるよう意図したものである。23は推定口径15㎝ほどの小型の土器である。4単位の波状縁を呈するもので、沈線で口縁部に無文帯を形成し以下には縦位の縄文帯と磨消文帯が交互に巡る。

土製品　20はミニチュア土器である。口径5.7㎝、器高3.7㎝を測る。内面は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部で直立する。外面は底部を直立させ、指頭で押さえ外傾気味に成形する。基本的に2条1組の沈線で連弧文を描出するようである。一部に縄文が観察される。

石器　24は石鏃で基部を欠く。両側縁には表裏両面からの押圧剥離による丁寧な調整加工が看取される。25は砂岩製の敲石である。正面下位に2か所の敲打痕が残されるほか、上端面にも敲打の痕跡を認める。26は分銅形打製石斧である。ホルンフェルスの厚みのある剥片を素材としおり、正面中央に主剥離を残し、裏面には素材礫の表皮を大きく残す。括れ部は両側縁からの成形加工で大きく抉られ、その後敲打調整されている。基部を欠く。

第6表　第5号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
15	24	石鏃	チャート	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.5)	
15	25	敲石	砂岩	11.2	3.4	1.6	85.7	
15	26	分銅形打製石斧	ホルンフェルス	(8.4)	3.8	2.1	(157.5)	

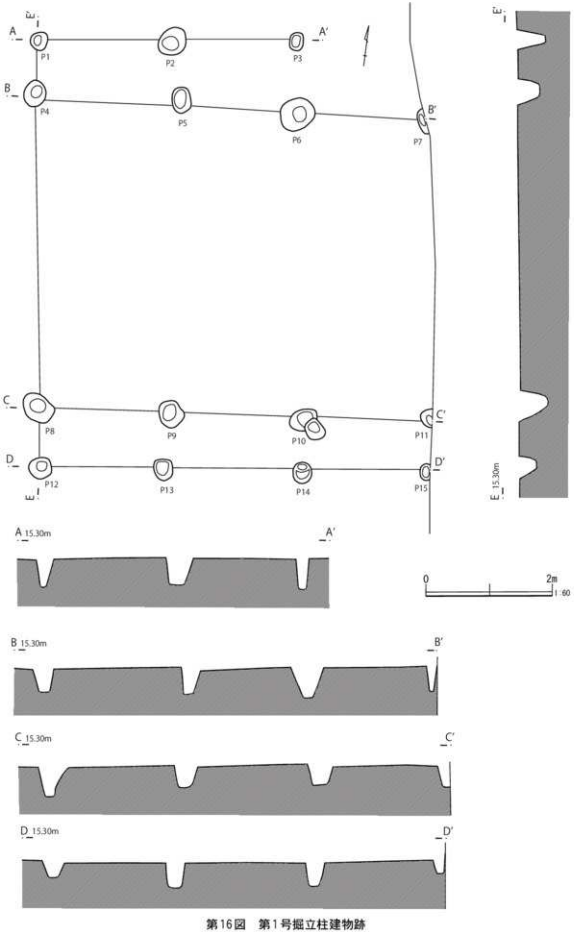
(2) 掘立柱建物跡

●第1号掘立柱建物跡（第16図）

D2・E2・3・F3グリッドに位置し、第3号住居跡と第28・29・42号土坑を切る。桁行3間、梁行1間の側柱建物跡であるが南北に庇が付く。主軸方位はN―85°―Eを指す。桁行約6.0m、梁行約5.0mを測る。庇と母屋との間は約1.0m離れる。柱穴の規模は第7表のとおりである。

●第2号掘立柱建物跡（第17図）

E2・3グリッドに位置し、第3号住居跡と第45号土坑を切る。桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、主軸方位はN―83°―Eを指す。桁行約4.0m、梁行約3.5mを測る。柱穴の規模は第7表のとおりである。



第16図　第1号掘立柱建物跡

●第3号掘立柱建物跡（第18図）

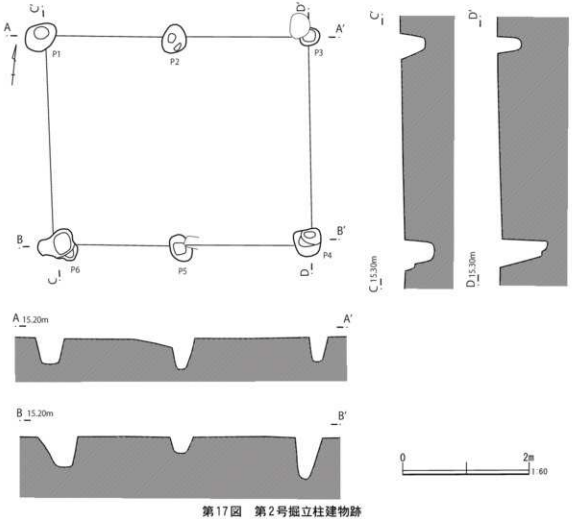
D1・2・E1・2グリッドに位置し、第2号住居跡と第13・42・49号土坑を切る。桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、主軸方位はN—79°—Eを指す。桁行約4.5m、梁行約3.5mを測る。柱穴の規模は第7表のとおりである。

●第4号掘立柱建物跡（第19・20図）

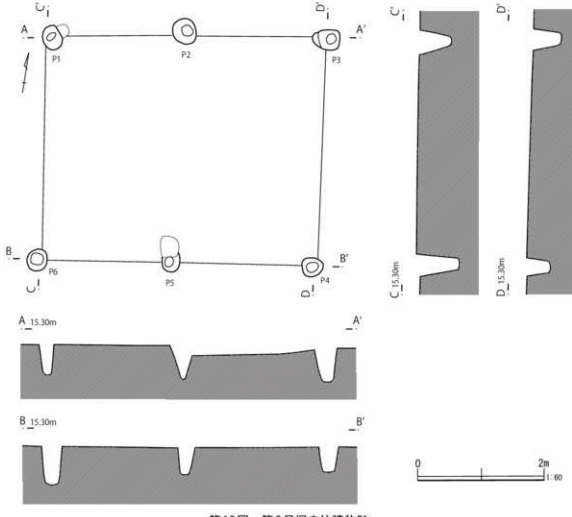
D4・5・6・E4・5・6グリッドに位置し、第58・63・64・号土坑と第1号炉穴、第4号溝跡を切る。桁行4間、梁行1間の側柱建物跡であるが西と南に庇が付く。また、付随した柱穴（P3）をもち、主軸方位はN—5°—Wを指す。桁行約9.0m、梁行約4.0mを測る。P3とP4間は約2.5mを測る。庇と母屋との間は約1.0m離れる。柱穴の規模は第7表のとおりである。

●第5号掘立柱建物跡（第21図）

D4・5・E4・5グリッドに位置し、第56・82号土坑と第4号溝跡を切る。桁行2間、梁行1間の側柱建物跡であり、付随した柱穴（P3）をもつ。主軸方位はN—8°—Wを指す。桁行約4.5m、梁行約3.5mを測る。P2とP3間は約2.0mを測る。柱穴の規模は第7表のとおりである。



第17図　第2号掘立柱建物跡



第18図　第3号掘立柱建物跡

(3) 土坑

●第1号土坑（第22図）

B1グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第23図）

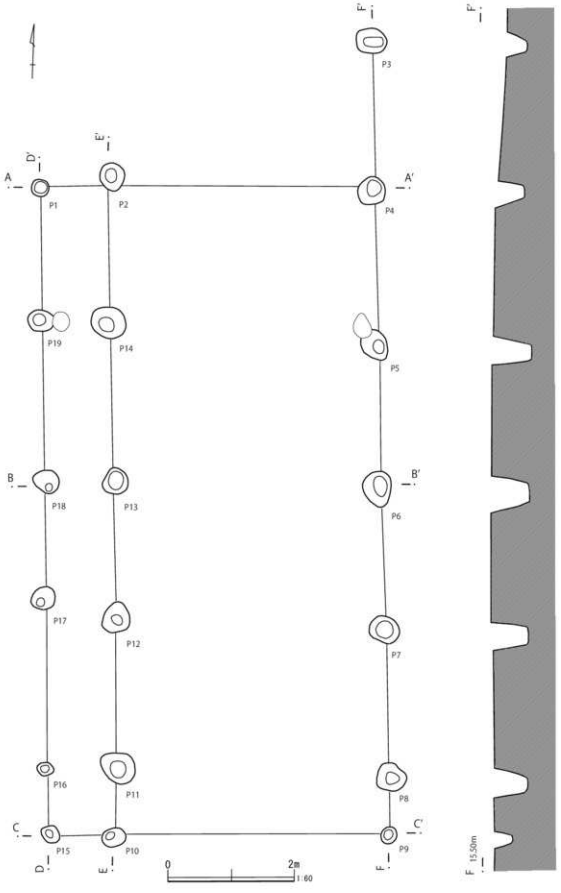
土器　第23図1は丈の低い隆帯が垂下する胴部資料、2は単節縄文を斜位回転させる胴部資料である。ともに中期加曾利E式期のものであろう。

●第2号土坑（第22図）

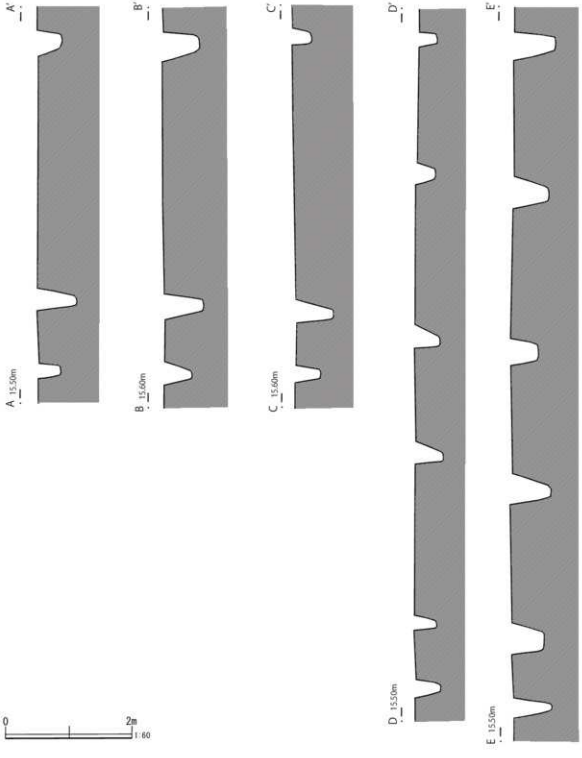
B2・3グリッドに位置する。平面形は長径約2.9m、短径約0.7mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

●第3号土坑（第22図）

B2グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。



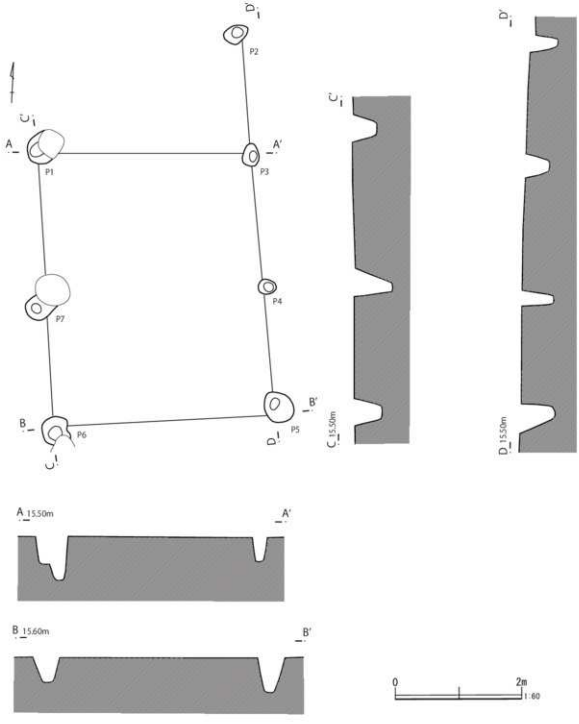
第19図　第4号掘立柱建物跡（1）



第20図　第4号掘立柱建物跡（2）

出土遺物（第23図）

土器　第23図3は無節縄文が施された破片資料である。4は「∩」状区画の中に単節縄文が充填される胴部資料である。



第21図　第5号掘立柱建物跡

●第4号土坑（第22図）

B2グリッドに位置する。平面形は長径約0.8m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第23図）

土器　第23図6は磁器製の坏である。

石器　5は砥石である。正面、側面には主に横方向の使用痕が観察される。

第7表　掘立柱建物跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ
SB1　P1	28	26	42
SB1　P2	44	44	47
SB1　P3	28	20	49
SB1　P4	42	34	35
SB1　P5	38	30	41
SB1　P6	54	54	49
SB1　P7	(30)	(14)	54
SB1　P8	52	40	46
SB1　P9	44	40	33
SB1　P10	46	32	31
SB1　P11	(22)	26	34
SB1　P12	36	32	28
SB1　P13	32	28	41
SB1　P14	34	28	37
SB1　P15	28	(16)	23
SB2　P1	46	42	41
SB2　P2	46	38	50
SB2　P3	(32)	28	40

番号	長径	短径	深さ
SB2　P4	44	44	76
SB2　P5	46	(32)	28
SB2　P6	60	36	48
SB3　P1	40	30	48
SB3　P2	42	40	54
SB3　P3	44	34	43
SB3　P4	34	30	39
SB3　P5	(28)	26	43
SB3　P6	36	32	59
SB4　P1	26	26	27
SB4　P2	48	40	67
SB4　P3	48	38	32
SB4　P4	44	42	41
SB4　P5	(44)	38	63
SB4　P6	58	44	61
SB4　P7	50	40	59
SB4　P8	48	38	52
SB4　P9	24	24	30

番号	長径	短径	深さ
SB4　P10	36	28	60
SB4　P11	58	48	53
SB4　P12	48	40	64
SB4　P13	40	40	45
SB4　P14	54	48	55
SB4　P15	30	24	25
SB4　P16	28	18	36
SB4　P17	36	36	45
SB4　P18	40	32	41
SB4　P19	40	32	31
SB5　P1	(20)	44	46
SB5　P2	40	28	44
SB5　P3	36	28	37
SB5　P4	28	22	51
SB5　P5	68	44	56
SB5　P6	(40)	36	40
SB5　P7	(40)	38	54

※単位は全てcm

●第5号土坑（第22図）

B2グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.7mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第23図）

土器　第23図7は垂下する沈線と単節縄文の施された胴部破片である。

●第6号土坑（第22図）

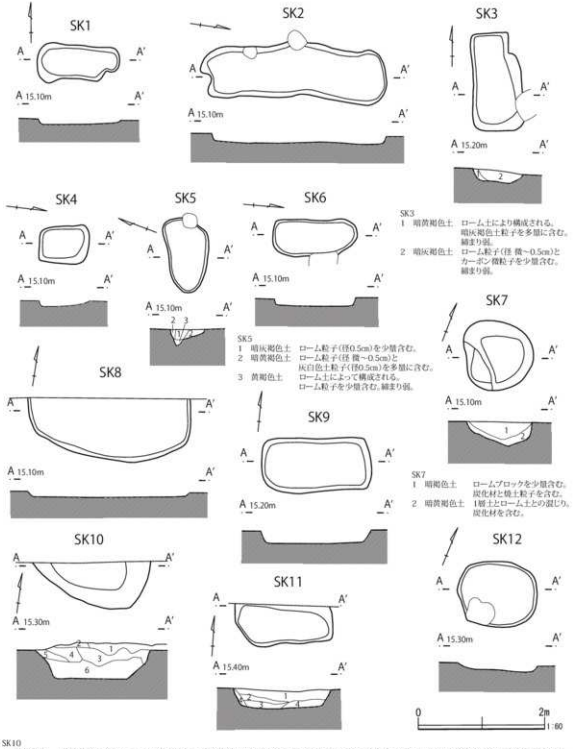
B2・3グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第7号土坑（第22図）

B3グリッドに位置し、第1号溝跡を切る。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

●第8号土坑（第22図）

C1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第41号土坑に切られる。検出部分のみで長径約2.6m、短径約1.1mを測る。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。



SK3
1 暗黄褐色土　ローム土により構成される。暗灰褐色土粒子を多量に含む。締まり弱。
2 暗灰褐色土　ローム粒子(径 微～0.5cm)とカーボン微粒子を少量含む。締まり弱。

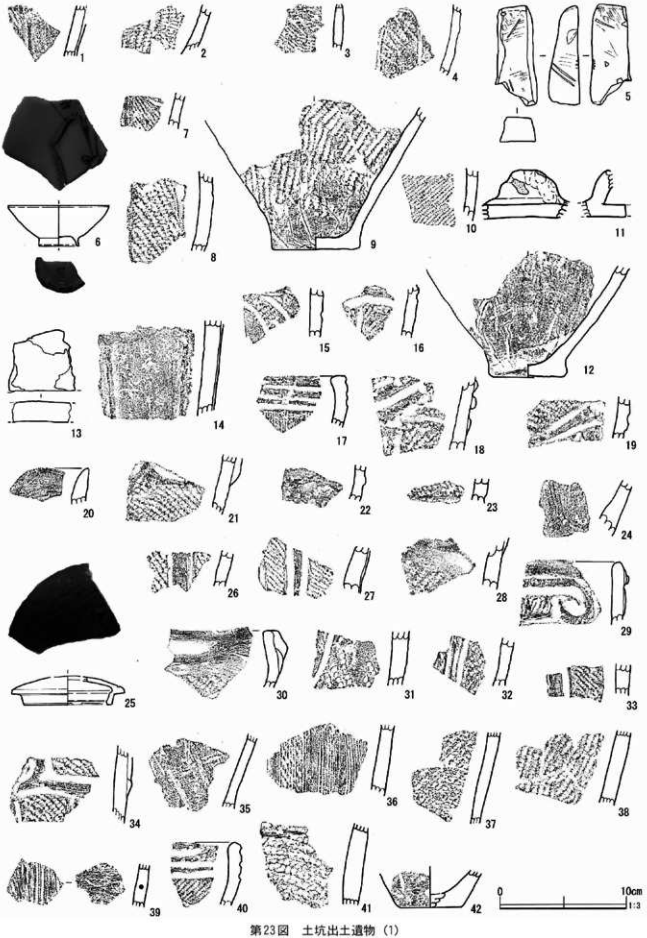
SK5
1 暗灰褐色土　ローム粒子(径0.5cm)を少量含む。
2 暗黄褐色土　ローム粒子(径 微～0.5cm)と灰白色土粒子(径0.5cm)を多量に含む。
3 黄褐色土　ローム土によって構成される。ローム粒子を少量含む。締まり弱。

SK7
1 暗褐色土　ロームブロックを少量含む。炭化材と焼土粒子を含む。
2 暗黄褐色土　1層土とローム土との混じり。炭化材を含む。

SK10
1 暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。炭化物ブロック(径0.3～0.5cm)をまばらに含む。焼土粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性無。締まり無。
2 暗褐色土　焼土ブロック(径0.5cm)と焼土粒子(径0.1～0.3cm)及び炭化物粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む。粘性無。締まり弱。
3 暗褐色土　焼土ブロック(径0.5～1cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。焼土ブロック(径5cm)を含む。灰褐色粘土ブロック(径1～2cm)を数点含む。
4 暗褐色土　突体崩落ブロック(径0.3～0.5cm)を少量含む。粘性無。締まり有(2層よりやや強い程度)。
5 明赤褐色土　焼土ブロック(径0.5cm)と焼土粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性無。締まり有(3層と同じくらいの強さ)。崩落した突体(径3～5cm)を4層より多量に含む。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性無。締まり有(上層より締まっている)。
6 暗褐色土　炭化物ブロック(径0.5～1cm)を多量に含む。焼土粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性無。締まり弱。

SK11
1 暗褐色土　ロームブロック(径1cm)とローム粒子を少量含む。
2 暗褐色土　ロームブロック(径1～3cm)とローム粒子を多量に含む。炭化物粒子、焼土粒子、灰色土粒子を含む。
3 暗褐色土　灰色土粒子を非常に多く含む。ロームブロック(径1cm)とローム粒子をわずかに含む。
4 黒褐色土　3層が帯状に混じる層位。

第22図　第1～12号土坑



第23図　土坑出土遺物（1）

出土遺物（第23図）

土器　第23図8・9ともに単節縄文の施された資料である。前者は破片右端に垂下沈線が看取される。後者は底径7cmを測る底部周辺資料である。

●第9号土坑（第22図）

C1グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約0.8mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23図）

土器　第23図10は縄文の施された胴部、11は近世のホウロクである。12は底径6.2cmを測る無文の胴下半から底部にかけての資料である。

●第10号土坑（第22図）

D1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。検出部分のみで長径約1.9m、短径約0.8mを測る。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23・49図）

土器　第23図13は平瓦の破片である。後述する1号瓦窯の製品と思われる。

土製品　第49図4はトチンである。正面上部が大きく盛り上がり、瓦の側縁に当てられたことが明瞭にわかる。

●第11号土坑（第22図）

E1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。検出部分のみで長径約1.5m、短径約0.6mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23図）

土器　第23図14は両側を垂下隆帯によって画される磨消文帯が看取される胴部資料である。

●第12号土坑（第22図）

E1グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第23図）

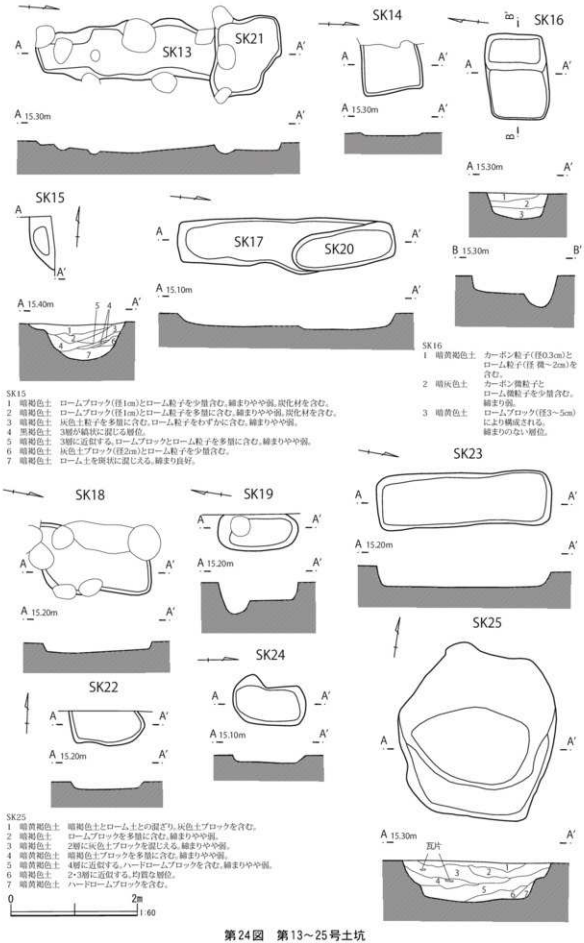
土器　第23図15は右下がりの曲線2条の間隙に単節縄文が充填される胴部資料である。

●第13号土坑（第24図）

E1グリッドに位置し、第2号住居跡と第14号土坑を切り、第3号掘立柱建物跡と第21号土坑に切られる。残存部で長径約2.9m、短径約0.9mを測る。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第23図）

土器　第23図16は口縁部下端区画の隆帯に沿わせた太い凹線が見られ、これを起点として縄文帯と磨消

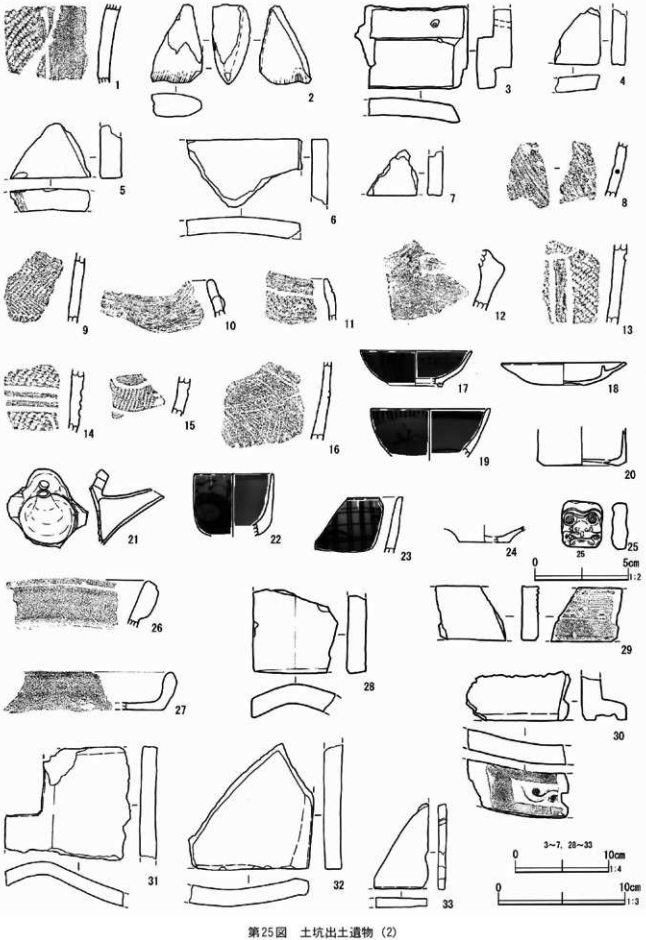


SK15
1　暗褐色土　ロームブロック(径1cm)とローム粒子を少量含む,締まりやや弱,炭化材を含む。
2　暗褐色土　ロームブロック(径1cm)とローム粒子を多量に含む,締まりやや弱,炭化材を含む。
3　暗褐色土　灰色土粒子を多量に含む,ローム粒子をわずかに含む,締まりやや弱。
4　黒褐色土　3層が鍋状に混じる層位。
5　暗褐色土　3層に近似する,ロームブロックとローム粒子を多量に含む,締まりやや弱。
6　暗褐色土　灰色土ブロック(径2cm)とローム粒子を少量含む。
7　暗褐色土　ローム土を斑状に混じえる,締まり良好。

SK16
1　暗黄褐色土　カーボン粒子(径0.3cm)とローム粒子(径 微～2cm)を含む。
2　暗灰色土　カーボン微粒子とローム微粒子を少量含む。締まり弱。
3　暗黄色土　ロームブロック(径3～5cm)により構成される。締まりのない層位。

SK25
1　暗黄褐色土　暗褐色土とローム土との混ざり,灰色土ブロックを含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む,締まりやや弱。
3　暗褐色土　2層に灰色土ブロックを混じえる,締まりやや弱。
4　暗黄褐色土　暗褐色土ブロックを多量に含む,締まりやや弱。
5　暗黄褐色土　4層に近似する,ハードロームブロックを含む,締まりやや弱。
6　暗褐色土　2・3層に近似する,均質な層位。
7　暗黄褐色土　ハードロームブロックを含む。

第24図　第13～25号土坑



第25図　土坑出土遺物（2）

文帯とが垂下するもの、17は口縁部に3条の沈線が観察される平縁土器で、地文は条線文となるもの、18は口縁部文様帯を区切る左下がりの隆帯が見られるもの、19は2条の沈線に区画された左下がりの磨消文帯が見られるものである。

●第14号土坑（第24図）

E1グリッドに位置し、第2号住居跡を切り、第13号土坑に切られる。残存部で長径約1.0m、短径約0.9mを測る。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23図）

土器　第23図20は無文の口縁部で、わずかに湾曲していることから山形の突起である可能性もある。21は口縁部文様帯を縦位に区分し、下端区画につながる隆帯とこれに沿う沈線が観察される資料、22は横走隆帯の観察される無文の資料である。

●第15号土坑（第24図）

E1グリッドに位置し、東半部は調査区外である。第2号住居跡を切る。検出部分のみで長径約0.9m、短径約0.3mを測る。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第23図）

土器　第23図23は下端を太目の沈線で画す縄文施文資料、24は縦位の撫で整形が観察される無文の底部周辺資料である。

●第16号土坑（第24図）

D2グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.0mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。西寄りに落ち込みが認められ、東寄りがテラス状に形成される。

出土遺物（第23・49図）

土器　第23図25は近世以降の磁器の蓋である。推定最大径9cmを測る。26は垂下する磨消文帯が観察される胴部資料である。

土製品　第49図5はトチンである。正面上部と左側縁が盛り上がり、瓦の角に当てられたことが明瞭にわかる。

●第17号土坑（第24図）

B1・2グリッドに位置し、第20号土坑に切られる。残存部で長径約3.0m、短径約1.7mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23図）

土器　第23図27は垂下する磨消文帯の観察される胴部資料、28は窓枠状区画の看取される口縁部付近の資料である。

●第18号土坑（第24図）

B1・2グリッドに位置する。平面形は長径約1.9m、短径約1.1mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

●第19号土坑（第24図）

E1グリッドに位置し、第2号住居跡と第38号土坑を切る。平面形は長径約1.2m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23図）

土器　第23図29～33が本址出土資料である。29・30は隆帯で口縁部文様帯の装飾を行う資料で、前者は渦巻文が観察されるものである。31～33は縄文地文の胴部に沈線で区画された磨消文帯が垂下するものである。

●第20号土坑（第24図）

B1・2グリッドに位置し、第17号土坑を切る。平面形は長径約1.6m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第21号土坑（第24図）

E1グリッドに位置し、第2号住居跡と第13・34号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第22号土坑（第24図）

C1グリッドに位置し、第41号土坑に切られる。残存部で長径約1.1m、短径約0.6mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23図）

土器　第23図34～38が本址出土資料である。34は沈線でなぞられた隆帯で口縁部を飾る資料である。35・36は縄文施文後縦位の条線が施される胴部資料である。37・38は単節縄文の施された胴部資料である。

●第23号土坑（第24図）

D1グリッドに位置し、第27号土坑に切られる。平面形は長径約2.8m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第23図）

土器　第23図39～42が本址出土資料である。39は表裏に条痕文を施す早期条痕文系土器群である。40は口縁部に3条の沈線を引く口縁部資料である。41は節の大きな単節縄文の施された胴部資料、42は推定底径5cmほどの底部資料である。

●第24号土坑（第24図）

C1・2グリッドに位置し、第48号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第25・49図）

土器　第25図1・3～7が本址出土の資料である。1は縄文帯と磨消文帯とが交互に垂下する胴部資料、3～7は瓦である。このうち3はクランク状に屈折し、小孔が穿たれるものである。

石器　2は磨製石斧の刃部残欠である。定角式で直刃をなしたものと思われる。

土製品　第49図6～10はトチンである。6は長方形で、中央にX字状の盛り上がりがある。2枚の瓦の角にあてがわれたものであることがわかる。7～10では断面がL字状に盛り上がり、瓦の側縁を押さえたものであることがわかる。

●第25号土坑（第24図）

D2・3グリッドに位置する。平面形は長径約2.8m、短径約2.6mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は中央が浅く窪む。南側がテラス状に張り出す。

第3・4層から瓦片が出土しており、北西に近接する第1号瓦窯跡の灰原あるいは物原としての役割を担った廃棄坑であった可能性が考えられる。

出土遺物（第25・49図）

土器　第25図8～33が本址出土の資料である。8は表裏条痕の早期末の条痕文系土器群の胴部資料、9は結節羽状縄文の施された胴部資料で、胎土に径1～5mm程度の石英と思われる白色の砂粒を顕著に含む資料である。縄文前期諸磯式期並行の資料であろう。10は靴先形の口縁部をなす諸磯b3式期の資料、11は無文となる口縁部下端を鋭利な篦状施文具による沈線で画す緩波状縁深鉢で、加曾利E式末葉の資料、12は口縁部に突起を持つと思われる大振幅の波状縁土器で、後期称名寺式に該当しよう。13・14は縄文地文上に縦横の磨消文帯の看取される胴部資料、15は上向きの弧状沈線によって画された縄文帯が施された胴部資料、16は斜位の器面調整痕を顕著に残す胴部資料である。17～24は磁器資料である。17は小皿、18は燈明皿、19は小碗、20は香炉、21は急須、22は湯呑みである。26・27はホウロクである。28～33は瓦である。このうち30は軒瓦で、唐草風の文様が付される。

土製品　25は鬼を象ると思われる泥面子である。

第49図11～20は本址出土のトチンである。11・12・15・16・18～20のように断面がL字形を呈するものと、13・14・17などのように扁平なものとがあることがわかる。後者は瓦の側縁や角には当たらなかったものとみられる。

●第26号土坑（第26図）

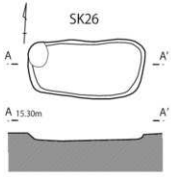
E1グリッドに位置し、第2号住居跡を切る。平面形は長径約1.9m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

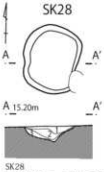
出土遺物（第27図）

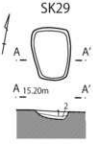
土器　第27図1～5が本址出土の資料である。1は無文の口縁部資料、2・3は縄文地文上に磨消文帯が垂下する資料、4は縦位の条線文の施されたもの、5は無文の胴部資料である。

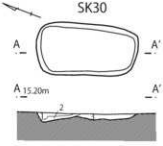
●第27号土坑（第26図）

D1グリッドに位置し、第23号土坑を切る。平面形は長径約1.8m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確





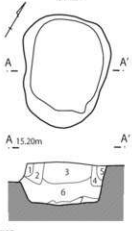


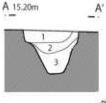


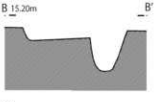
SK28
1　暗褐色土　ロームブロックと炭化材を多量に含む。
2　暗褐色土　1層よりロームブロックを多量に含む。混じり土的な層位。
3　黄褐色土　暗褐色土ブロックをわずかに混じえる。

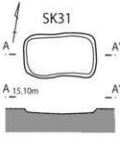
SK29
1　暗褐色土　ロームブロックと炭化材を多量に含む。SK28の1層に近似(同時期か)。
2　暗黄褐色土　暗褐色土を斑状に混じえる。

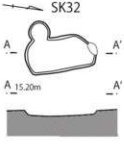
SK30
1　暗灰褐色土　ロームブロックをわずかに含む。炭化物粒子(径0.2m)を含む。粘性弱。
2　黄褐色土　暗灰褐色土を混じえる。粘性弱。
3　暗灰褐色土　ロームブロックをわずかに含む。粘性弱。炭化物粒子と粘性のある灰色粒子の集中箇所を含む。







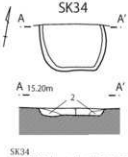


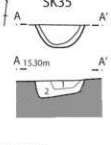


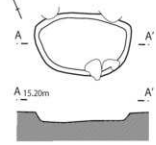
SK27
1　明褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.5cm)を多量に含む。粘性無、締まり有。
2　明褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。焼土粒子(径0.1～0.2cm)を微量に含む。粘性無、締まり有るが1層より弱い。ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。
3　暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)とローム粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。炭化物ブロック(径0.3～0.5cm)を少量含む。ロームブロック(径0.5cm)を微量に含む。粘性弱、締まり有。
4　明褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)とローム粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。粘性無。締まり有。暗褐色土を斑状に含む。
5　明褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性無、締まり有。
6　暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。炭化物ブロック(径1～2cm)を少量含む。ローム粒子(径0.1～0.3cm)を3層よりかなり多く含む。ロームブロック(径0.5～1.5cm)を少量含む。粘性弱、締まり有。
7　明褐色土　ローム粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性弱、締まり有。

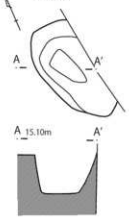
SK33
1　明褐色土　ロームブロックを多量に含む。炭化物粒子と炭化材を含む。

SK37
2　明褐色土　ロームブロックを多量に含む。締まり良。
3　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。炭化物粒子を含む。締まり良。







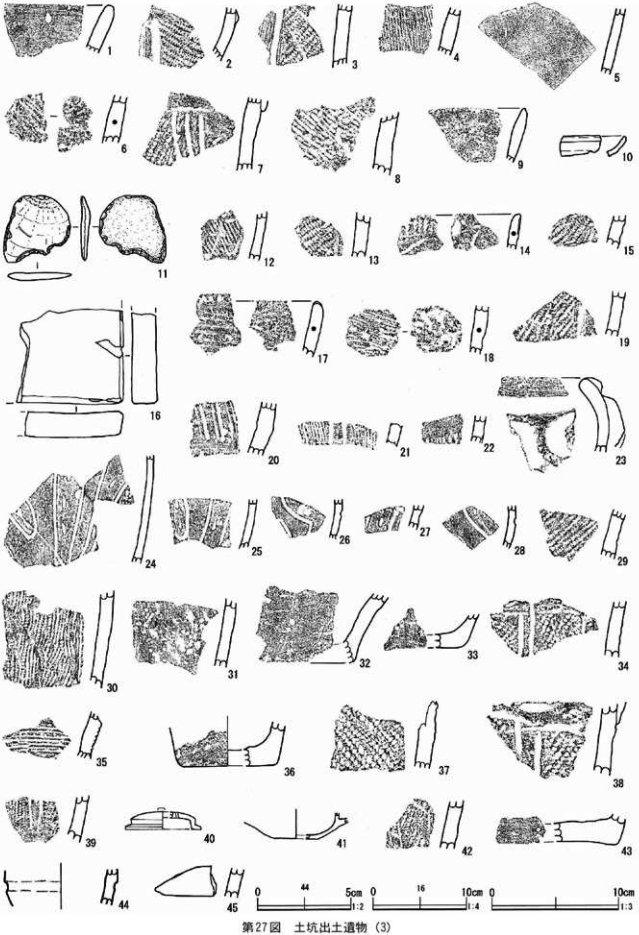


SK34
1　茶褐色土　カーボン微粒子を含む。締まり有。
2　暗黄褐色土　ローム粒子(径 微～0.5cm)を多量に含む。粘性有。締まり有。

SK35
1　茶褐色土　灰褐色土粒子(径 微～1cm)とカーボン微粒子を含む。粘性にやや欠ける。締まり有。
2　茶褐色土　SK34の2層に近似する。焼土微粒子を含む。

0　2m
1:60

第26図　第26～38号土坑



第27図　土坑出土遺物（3）

認面から床面までの深さは約0.7mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図6は条痕文系土器群、7は磨消文帯を垂下させる胴部資料、8は無節縄文の施された胴部資料である。

●第28号土坑（第26図）

E2グリッドに位置し、第1号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図9は無文の口縁部資料、10はカワラケの口縁部資料である。

●第29号土坑（第26図）

E2グリッドに位置する。平面形は長径約0.8m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

石器　第27図11は黒色緻密安山岩製の2次加工剥片である。正面中央は主剥離、裏面は礫表皮を残す。

●第30号土坑（第26図）

E3・F3グリッドに位置し、第3号溝跡を切る。平面形は長径約1.6m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図12・13は単節縄文の施された胴部資料で、後者は縦位の垂下沈線が見られる。

●第31号土坑（第26図）

D3グリッドに位置し、平面形は長径約1.2m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第27図）

土器　第27図14は口縁部に絡条体圧痕文の観察される条痕文系土器群である。

●第32号土坑（第26図）

D3グリッドに位置し、第2号溝跡を切る。平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図15は単節縄文の見られる胴部小片、16は平瓦である。

●第33号土坑（第26図）

D2グリッドに位置し、第37号土坑に切られる。残存部で長径約1.2m、短径約1.1mを測る。確認面か

ら床面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図17～28が本址出土の資料である。17・18は条痕文系土器群で、前者は刻み目の付される口縁部資料である。19は微隆帯で画された磨消文帯が垂下する胴部資料である。20～22は集合沈線文または大型のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。隆帯による渦巻あるいは円形区画と思われる文様が観察される。24～28は沈線でアルファベット状等の文様を描出する深鉢形土器である。

●第34号土坑（第26図）

E1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第21号土坑に切られる。検出部分のみで長径約1.1m、短径約0.7mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図29は縄文の施された胴部資料である。

●第35号土坑（第26図）

D1・E1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。検出部分のみで長径約0.8m、短径約0.4mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第36号土坑（第26図）

D2グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図30は単節縄文を斜位回転させ、条を縦位走行させたものである。31・32は無文の資料で、後者は底部付近のものである。

●第37号土坑（第26図）

D1・2グリッドに位置し、第33号土坑を切る。平面形は長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.7mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第27図）

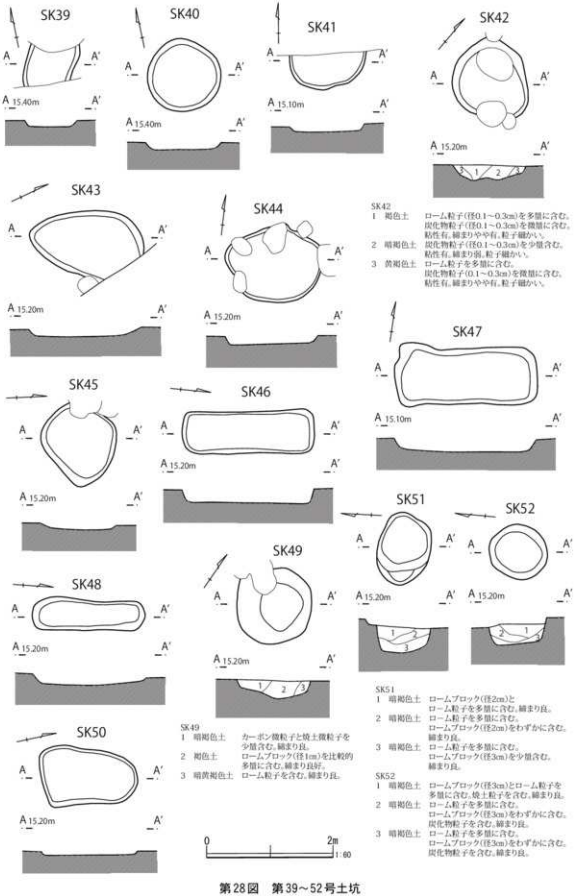
土器　第27図33は無文の底部資料である。

●第38号土坑（第26図）

E1グリッドに位置し、第2号住居跡を切り、第19号土坑に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約0.7mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

●第39号土坑（第28図）

C6グリッドに位置し、第40号土坑と第6号溝跡に切られる。残存部で長径約0.8m、短径約0.6mを測る。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。



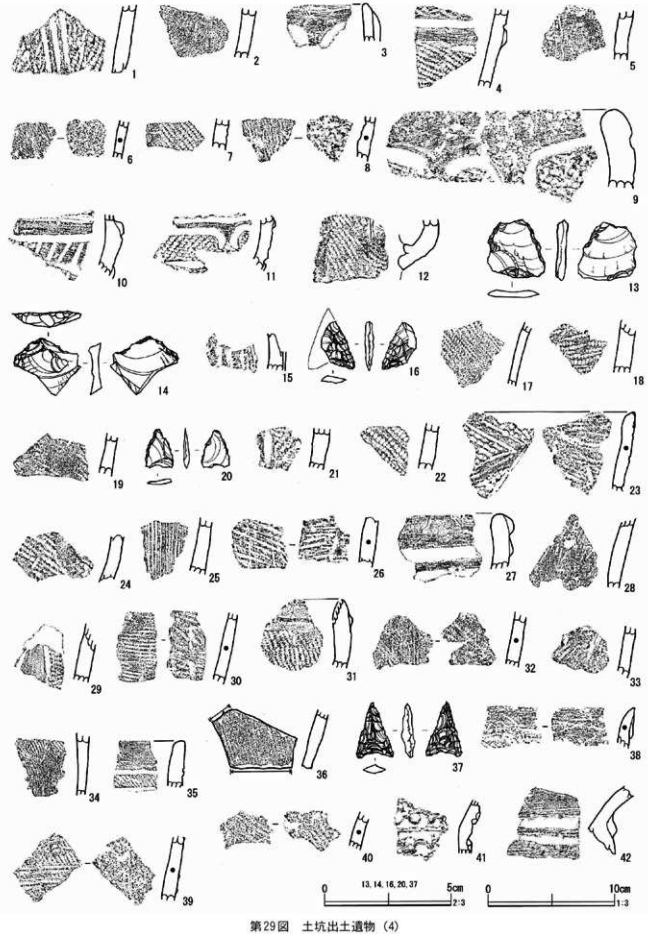
SK42
1　褐色土　ローム粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性有。締まりやや有。粒子細かい。
2　暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
3　黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。炭化物粒子(0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性有。締まりやや有。粒子細かい。

SK49
1　暗褐色土　カーボン微粒子と焼土微粒子を少量含む。締まり良。
2　褐色土　ロームブロック(径1cm)を比較的多量に含む。締まり良好。
3　暗黄褐色土　ローム粒子を含む。締まり良。

SK51
1　暗褐色土　ロームブロック(径2cm)とローム粒子を多量に含む。締まり良。
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。ロームブロック(径2cm)をわずかに含む。締まり良。
3　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。ロームブロック(径3cm)を少量含む。締まり良。

SK52
1　暗褐色土　ロームブロック(径3cm)とローム粒子を多量に含む。焼土粒子を含む。締まり良。
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。ロームブロック(径3cm)をわずかに含む。炭化物粒子を含む。締まり良。
3　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。ロームブロック(径3cm)をわずかに含む。炭化物粒子を含む。締まり良。

第28図　第39～52号土坑



第29図　土坑出土遺物（4）

●第40号土坑（第28図）

C6グリッドに位置し、第39号土坑を切る。平面形は直径約1.1mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第41号土坑（第28図）

C1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第8・22号土坑を切る。検出部分のみで長径約1.2m、短径約0.6mを測る。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第27図）

土器　第27図34は縄文地文上に沈線が垂下する胴部資料である。

●第42号土坑（第28図）

E2グリッドに位置し、第1・3号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図35は横位の集合沈線が施された資料、36は推定底径8cmを測る無文の底部資料である。

●第43号土坑（第28図）

E2・F2グリッドに位置し、東半部は調査区外である。検出部分のみで長径約1.8m、短径約1.1mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図37は単節縄文の施された胴部資料である。

●第44号土坑（第28図）

E2・3グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第27図）

土器　第27図38は口縁部文様帯下端区画の横走隆帯と垂下する磨消文帯が観察される資料、39は底部付近の資料である。

●第45号土坑（第28図）

E3グリッドに位置し、第2号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第46号土坑（第28図）

C3グリッドに位置する。平面形は長径約2.1m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第27・49図）

土器　第27図40・41は磁器の蓋と身である。蓋には貫通孔が見られる。

土製品　第49図21・22はトチンである。21は断面L字形となるもの、22は扁平なタイプのものである。

●第47号土坑（第28図）

C2グリッドに位置する。平面形は長径約2.2m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第27図）

土器　第27図42は単節縄文の施された胴部資料、43は厚みのある底部資料、45は常滑焼の甕の胴部資料である。

土製品　44はミニチュア土器の胴部資料である。残存部最大径6cmを測り、1条の横走沈線が引かれる無文の資料である。

●第48号土坑（第28図）

C1・2グリッドに位置し、第24号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は長径約1.8m、短径約0.5mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第29図）

土器　第29図1は3条の沈線が垂下するもの、2は無文の胴部資料である。

●第49号土坑（第28図）

D2グリッドに位置し、第3号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第29図）

土器　第29図3は隆帯で渦巻文を形成すると思われる口縁部資料である。4は太く丈の低い横走隆帯が施される胴部資料である。5は無文の胴部資料である。

●第50号土坑（第28図）

C3グリッドに位置し、第3号溝跡を切る。平面形は長径約1.6m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第29図）

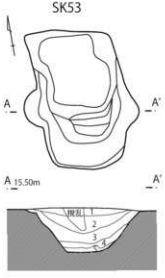
土器　第29図6は表裏に条痕文の施された胴部資料、7は単節縄文の施された胴部資料である。

●第51号土坑（第28図）

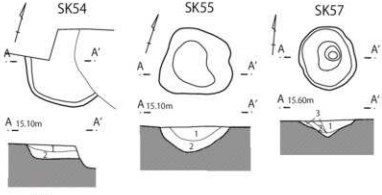
E3グリッドに位置し、第3号住居跡を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。西側がテラス状に張り出す。

出土遺物（第29図）

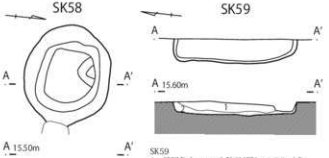
土器　第29図8～14が本址出土資料である。8は条痕文系土器群、9は大口径のキャリパー形土器の口縁部、



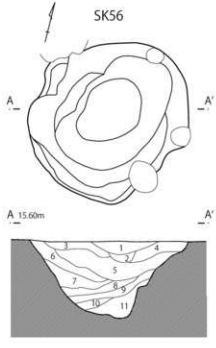
SK53
1　褐色土　　炭色粘土粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。炭化物ブロック(径0.5～1cm)と焼土粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性無。締まり有。
2　暗褐色土　炭色粘土粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。焼土粒子(径0.1～0.3cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性無。締まり有(1層よりやや弱)。
3　暗褐色土　炭色粘土ブロック(径0.3～1cm)を少量含む。炭化物ブロック(径0.5cm)をわずかに含む。焼土粒子(径0.1～0.2cm)を極わずかに含む。粘性やや有。締まり弱。
4　暗褐色土　炭化物ブロック(径1cm)と焼土粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む。褐色土ブロックが混入。粘性無。締まり無。
5　黄褐色土　ハードローム のブロック(径3～5cm)を多量に含む。炭色粘土ブロック(径5cm)を少量含む。粘性有。ハードローム混入部分以外は締まり無。



SK54
1　暗茶褐色土　ロームブロック(径2cm)が斑状に多量に混じる。ローム粒子をわずかに含む。
2　暗茶褐色土　ロームブロック(径2cm)をわずかに含む。
SK55
1　暗茶褐色土　ロームブロック(径1～2cm)をわずかに含む。焼土粒子を含む。締まり良。
2　暗茶褐色土　ロームブロック(径2～3cm)を多量に含む。締まり良。
SK57
1　暗褐色土　　ロームブロック(径1cm)を少量含む。炭色土粒子を含む。
2　暗褐色土　　1層に近似するがロームブロックが少ない。焼土粒子を含む。
3　暗黄褐色土　暗褐色土を斑状に混じえる。締まりやや弱。



SK59
1　暗褐色土　ローム粒子(径0.1～0.2cm)を少量含む。ロームブロック(径1cm)をわずかに含む。
2　暗褐色土　ロームブロック(径2～3cm)を多量に含む。炭化材を含む。



SK56
1　暗黄褐色土　ロームブロック(径2cm)主体層。
2　暗黄褐色土　ロームブロック(径3～4cm)主体層。
3　暗褐色土　　ロームブロック(径3～4cm)を多量に含む。
4　暗褐色土　　ロームブロック(径2～3cm)を少量含む。白色砂粒子を含む。
5　暗褐色土　　ロームブロック(径1cm)とローム粒子(径0.2～0.3cm)を少量含む。炭色土粒子を含む。
6　暗黄褐色土　ロームブロック(径3～4cm)主体層。暗褐色土と混じる。
7　暗褐色土　　ブロック状の土層。ロームブロック(径2～3cm)を少量含む。ポンポンの層位。
8　暗黄褐色土　ロームブロック(径5～6cm)を少量含む。
9　暗褐色土　　ロームブロック(径2～3cm)を少量含む。
10 暗黄褐色土　暗褐色土との混じり土。ややポンポンでしている。
11 暗褐色土　　ロームブロック(径2～3cm)を少量含む。ポンポンで締まり弱。
SK58
1　暗褐色土　　ロームブロック(径2cm)を少量含む。
2　黄褐色土　　暗褐色土ブロック(径1cm)をわずかに含む。締まり有。
3　暗黄褐色土　ロームブロック(径2～3cm)主体層。ポンポンの層位。
4　暗黄褐色土　粒子状の暗褐色土と黄褐色土とが混ざり合う層位。
5　暗褐色土　　3層に近似する。ロームブロック(径5cm)をわずかに含む。
6　暗褐色土　　ロームブロック(径1cm)を多量に含む。
7　暗黄褐色土　ロームブロック(径3～5cm)を多量に含む。
8　暗黄褐色土　ロームブロック(径3cm)とブラックバンド層のブロック(径5～6cm)との混じり土。土圧で締まっているがポンポンの層位。

0　2m
1:60

第30図　第53～59号土坑

10は口縁部文様帯の窓枠状区画内に縦位の沈線を充填するもの、11は窓枠状区画内に単節縄文が充填されるものである。12は単節縄文の施される橋状把手である。

石器　13・14は共にチャート製の2次加工剥片である。前者は不整形の横長剥片を素材とし上部縁辺に調整加工が施される。後者は、やや縦長の剥片を素材とし両側縁及び下端部に調整加工が施される。

●第52号土坑（第28図）

E3・F3グリッドに位置し、第3号住居跡を切る。平面形は直径約0.9mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第29図）

土器　第29図15は縦位の隆帯が垂下する胴部小片である。

石器　16はチャート製の凹基無茎石鏃である。先端部から右側縁を欠く。左側縁の調整は表裏からの押圧剥離による丁寧なものである。基部の抉りは浅い。

●第53号土坑（第30図）

C4・D4グリッドに位置し、第5号住居跡と第77号土坑、第3号溝跡を切る。平面形は長径約2.2m、短径約1.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.7mを測り、底面は平坦である。南側にテラス状に張り出す。

出土遺物（第29図）

土器　第29図17～19は共に単節縄文の施される胴部資料である。

石器　20はチャート製の無茎石鏃である。横長の不整形剥片を素材とし、縁辺に粗い調整を加えただけのものである。基部はわずかに抉り込むように見えるが、意図的な調整か否か不明である。

●第54号土坑（第30図）

B1グリッドに位置し、北半部は調査区外である。第1号住居跡に切られる。検出部分のみで長径約1.2m、短径約1.0mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第55号土坑（第30図）

B3・C3グリッドに位置し、第2号溝跡を切る。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第29図）

土器　第29図21・22は単節縄文の施された胴部資料で、前者では縦位の沈線が垂下する。

●第56号土坑（第30図）

E5グリッドに位置し、第69・88号土坑を切り、第5号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約2.8m、短径約2.4mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約1.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第29図）

土器　第29図23は条痕文の施された波状縁土器の口縁部資料である。口唇部は刺突が施され謹状を呈す

る。外面波頂下には2条1組の沈線で菱形文が形成される。菱形の要所には円形竹管による刺突が施され、菱形内部には同一と思われる竹管を斜めに寝かせた押し引き刺突が充填される。鵜が島台式に比定できる。24は単節縄文の施された胴部資料、25は条線文の施された胴部資料である。

●第57号土坑（第30図）

E5グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第58号土坑（第30図）

E6グリッドに位置し、第4号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約1.6m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約1.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第29図）

土器　第29図26は表裏に条痕文が顕著な胴部資料、27は玉縁状の口唇部を持つ平縁深鉢の口縁部資料、28は無文の胴部資料、29は2条の沈線で画された縄文帯が看取される胴部資料である。

●第59号土坑（第30図）

F5・6グリッドに位置し、東半部は調査区外である。検出部分のみで長径約1.9m、短径約0.3mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

●第60号土坑（第31図）

F6グリッドに位置し、第67号土坑を切る。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は中央が浅く窪む。西側がテラス状に張り出す。

出土遺物（第29図）

土器　第29図30は表裏に横位の条痕文が観察される胴部資料、31は口縁部外縁に横走する微隆帯で下端を画す無文帯を持つ資料である。

●第61号土坑（第31図）

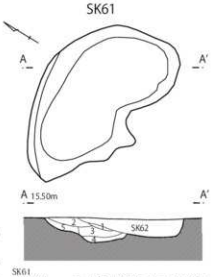
D6・E6グリッドに位置し、第62号土坑に切られ、第5号溝跡を切る。平面形は長径約2.9m、短径約1.5mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。

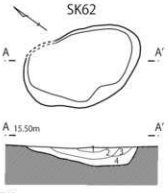
出土遺物（第29図）

土器　第29図32は表裏条痕の胴部資料、33は擦痕状の整形痕を残す無文の胴部資料、34は条線文の施された胴部資料である。

●第62号土坑（第31図）

D6・E6グリッドに位置し、第61号土坑と第5号溝跡を切る。平面形は長径約2.0m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。



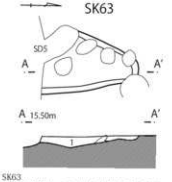


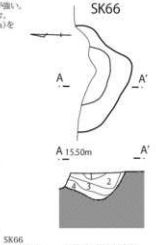
SK67
1　暗黄褐色土　ロームブロック(径1cm)を多量に含む。暗褐色土との混じり土的な層位。

SK60
2　暗茶褐色土　ロームブロック(径1cm)を多量に含む。締まり弱、ボソボソ。
3　暗黄褐色土　ロームブロック(径3cm)を多量に含む。ボソボソ。
4　暗黄褐色土　ロームブロック(径2cm)を多量に含む。ボソボソ。
5　暗褐色土　3層とブラックバンド層土(暗褐色土)との混じり土。

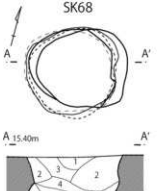
SK61
1　褐色土　ロームブロック(径1～2cm)を少量含む。粘性やや有、締まり有。
2　暗黄褐色土　ロームブロック(径0.3～0.5cm)をかなり多く含む。ロームブロック(径1～2cm)を主体的に含む。粘性やや有、締まり有。ややボソボソした感が強い。
3　褐色土　ロームブロック(径1～2cm)をやや多く含む。部分的に黒色土のローム粒子(径0.3～0.5cm)をを含む。粘性やや有、締まり有。
4　黒褐色土　ローム粒子(径0.3～0.5cm)を少量含む。粘性やや有、締まり有。
5　黒褐色土　ロームブロック(径1cm)を少量含む。粘性やや有、締まり有。

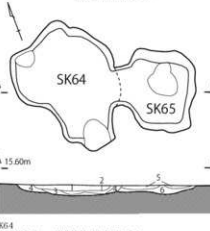
SK62
1　暗褐色土　ロームブロック(径1～2cm)とローム粒子(径0.1～0.2cm)を少量含む。粘性無、締まり無。
2　暗褐色土　ローム粒子(径0.1～0.2cm)と炭化物粒子(径 微～0.1cm)を少量含む。粘性無、締まり無。
3　暗褐色土　ロームブロック(径1～2cm)とローム粒子(径 微～0.7cm)を少量含む。粘性無、締まり無。
4　暗褐色土　ローム粒子(径 微～0.7cm)をわずかに含む。粘性無、締まり無。





SK63
1　暗灰褐色土　ローム粒子と砂粒子を含む。締まり無し、ボソボソした層位。
2　暗褐色土　ローム粒子(径0.2cm)を含む。





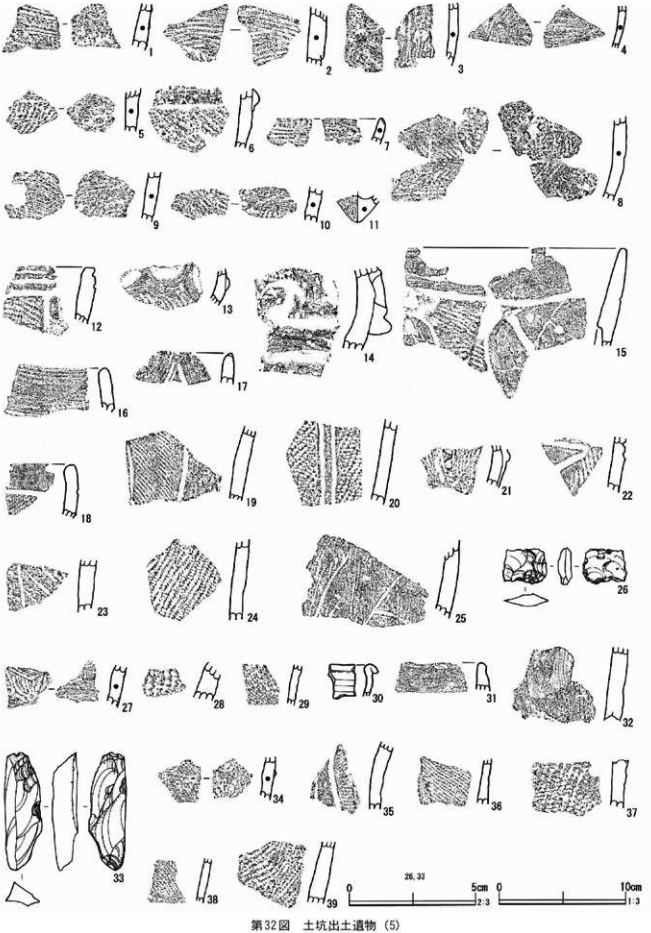
SK66
1　褐色土　粗砂粒子を少量含む。粘性弱、締まり弱。
2　暗褐色土　焼土微粒子を少量含む。締まり弱。
3　暗黄褐色土　ローム土を多量に含む。2層ブロックを少量含む。
4　茶褐色土　ローム粒子(径0.2～0.3cm)を少量含む。締まり弱。

SK64
1　暗褐色土　炭化物粒子を多量に含む。
2　暗褐色土　炭化材層。
3　暗褐色土　炭化物粒子を多量に含む。ロームブロック(径1cm)を少量含む。
4　暗黄褐色土　炭化物粒子を多量に含む。

SK65
5　暗褐色土　ロームブロック(径1cm)を多量に含む。
6　暗黄褐色土　ロームブロック(径2～3cm)を多量に含む。炭化物粒子を含む。

SK68
1　暗褐色土　ロームブロック(径5～6cm)とローム粒子(径0.1cm)を多量に含む。締まり非常に強。
2　暗褐色土　ロームブロック(径6～10cm)とローム粒子(径0.1cm)を多量に含む。焼土粒子を含む。締まり非常に強。
3　暗褐色土　ローム粒子(径0.1～0.5cm)を多量に含む。ロームブロック(径4～5cm)を少量含む。焼土粒子を含む。締まり非常に強。
4　暗褐色土　3層に近似するが色調やや暗い。締まり非常に強。
5　暗褐色土　ロームブロック(径6～10cm)とローム粒子(径0.1cm)を多量に含む。焼土ブロック(径10cm)を含む。締まり非常に強。
6　暗褐色土　ローム粒子(径0.1～0.3cm)をわずかに含む。1～5層に比べ締まりやや弱。
7　暗褐色土　ロームブロック(径2～3cm)とローム粒子(径0.1cm)をわずかに含む。締まり強。
8　暗褐色土　ローム微粒子と焼土微粒子を含む。締まり有。
9　暗茶褐色土　ロームブロック(径5～10cm)とローム粒子(径0.2～0.3cm)及び焼土微粒子を多量に含む。締まり有。湿度有。
10 暗黄褐色土　ロームブロック(径3～5cm)とローム粒子(径 微～0.5cm)を含む。
11 暗色土　ローム粒子(径0.2～0.3cm)と焼土粒子子(径0.3cm)を含む。粘性有。湿土有。
12 暗黄褐色土　ローム粒子(径0.2～0.3cm)を含む。粘性有。締まり弱。湿度有。
13 黄褐色土　ローム粒子(径0.2～1cm)とカーボン微粒子を含む。
14 灰褐色土　灰カーボン粒子(径 微～0.3cm)を多量に含む。ローム粒子(径0.2～0.3cm)を混じえる。締まり弱。湿度有。
15 黄褐色土　灰カーボン粒子(径 微～0.3cm)を少量含む。ローム土により構成される。鉄分の沈着が見られる。

第31図　第60～68号土坑



第32図　土坑出土遺物（5）

出土遺物（第29図）

土器　第29図35は無文の口縁部の下に横走する縄文帯が観察される平縁土器である。36は須恵器甕の破片であるが、左上辺と底辺が研磨されており、砥石に転用されたものと思われる。

石器　37はチャート製の凹基無茎石鏃である。やや厚みを残すものの、両側縁の調整加工は丁寧で規則的なものである。基部の抉り込みは浅い。

●第63号土坑（第31図）

D6グリッドに位置し、第4号掘立柱建物跡と第6号溝跡に切られる。残存部で長径約1.5m、短径約0.9mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第64号土坑（第31図）

D5・E5グリッドに位置し、第4号掘立柱建物跡に切られ、第65・91号土坑を切る。平面形は長径約2.0m、短径約1.7mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第29図）

土器　第29図38～42が本址出土資料である。38はやや外反する複合口縁となる平縁深鉢で、外面に単節縄文、内面には横位の擦痕状の撫で痕が残される。花積下層式土器である。39は細隆起線が確認できる条痕文土器である。内面は縦位の条痕が観察される。野島式に該当する。40も条痕文系土器である。41は相互刺突文の施される頸部付近の資料、42は括れ部外面に断面三角形の横走隆帯を付す資料である。

●第65号土坑（第31図）

E5グリッドに位置し、第64号土坑に切られ、第91号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第32図）

土器　第32図1～6が本址出土資料である。1～4は表裏に条痕文の施された胴部資料である。1では横走する細隆起線が見られる。5は外面に単節縄文、内面に条痕の残される胴部資料で、花積下層式土器である。6は断面カマボコ形の隆帯が横走する胴部資料で、中期加曾利E式に該当する。

●第66号土坑（第31図）

E6グリッドに位置し、第5号溝跡を切る。残存部で長径約1.7m、短径約0.6mを測る。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第67号土坑（第31図）

F6グリッドに位置し、第60号土坑と第5号溝跡に切られる。残存部で長径約1.9m、短径約1.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第68号土坑（第31図）

E4・F4グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面から床面ま

での深さは約2.2mを測り、底面は平坦である。第6層以下、西寄りに落ち込み、底面から確認面に向けてオーバーハング気味に立ち上がる。

出土遺物（第32図）

土器　第32図7～25が本址出土資料である。このうち7～11は条痕文系土器群で、7は外削ぎ状となる口唇部に貝殻腹縁で刺し切るような刺突を付すもの、8はやや湾曲する胴部資料、11は尖底となる底部資料である。12は口縁部に3条の沈線を引き、これを起点に垂下する沈線を複数本引くものである。13・14は隆帯で渦巻文などを形成する口縁部文様帯を持つ深鉢形土器である。15～18は加曾利E式末葉の口縁部に幅の狭い無文帯を形成する深鉢形土器の口縁部資料と思われる。15では釣針状の沈線が引かれその外側に縄文が充填されるようである。17は波状縁土器の波頂部資料である。19・20は単節縄文地文上に磨消文帯が垂下する資料である。21は鎖状隆帯が垂下する集合沈線地文の胴部資料である。22はアルファベット状の縄文帯が描出されるものであろう。23は斜行する沈線が引かれるもの、24は単節縄文の施されたもの、25は縦位の整形痕の上にランダムな沈線の看取されるものである。

石器　26は黒曜石製の2次加工剥片である。矩形に整形され、正面右側縁と下辺に調整加工が施される。

●第69号土坑（第33図）

E4・5グリッドに位置し、第56号土坑と第4号溝跡に切られる。残存部で長径約1.2m、短径約0.9mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第70号土坑（第33図）

E4グリッドに位置し、第87号土坑を切る。平面形は長径約1.0m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第32図）

土器　第32図27は表裏に条痕の残される胴部資料、28は単節縄文の小片である。

●第71号土坑（第33図）

C5グリッドに位置し、第4号住居跡を切る。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第72号土坑（第33図）

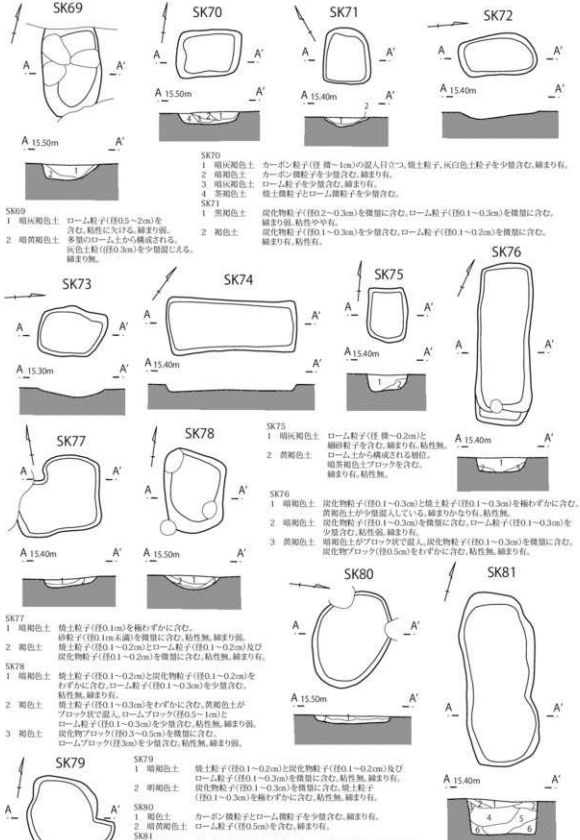
B6・C6グリッドに位置し、第97号土坑を切る。平面形は長径約1.2m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第32図）

土器　第32図29は無節と単節2種の施文が確認される胴部小片である。

●第73号土坑（第33図）

B5グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。



SK69
1 暗灰褐色土　ローム粒子(径0.5～2cm)を含む。粘性に欠ける。締まり弱。
2 暗黄褐色土　多量のローム土から構成される。灰色土粒(径0.3cm)を少量混じえる。締まり無。

SK70
1 暗灰褐色土　カーボン粒子(径 微～1cm)の混入目立つ。焼土粒子、灰白色土粒子を少量含む。締まり有。
2 暗褐色土　カーボン粒子を少量含む。締まり有。
3 暗灰褐色土　ローム粒子を少量含む。締まり有。
4 茶褐色土　焼土微粒子とローム微粒子を少量含む。

SK71
1 黒褐色土　炭化物粒子(径0.2～0.3cm)を微量に含む。ローム粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。締まり弱。粘性やや有。
2 褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。ローム粒子(径0.1～0.2cm)を微量に含む。締まり有。粘性有。

SK73
SK74
SK75
1 暗灰褐色土　ローム粒子(径 微～0.2cm)と細砂粒子を含む。締まり有。粘性無。
2 黄褐色土　ローム土から構成される層位。暗茶褐色土ブロックを含む。締まり有。粘性無。

SK76
1 暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)と焼土粒子(径0.1～0.3cm)を極わずかに含む。黄褐色土が少量混入している。締まりかなり有。粘性無。
2 暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性弱。締まり有。
3 黄褐色土　暗褐色土がブロック状で混入。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。炭化物ブロック(径0.5cm)をわずかに含む。粘性無。締まり有。

SK77
1 暗褐色土　焼土粒子(径0.1cm)を極わずかに含む。砂粒子(径0.1cm未満)を微量に含む。粘性無。締まり弱。
2 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2cm)とローム粒子(径0.1～0.2cm)及び炭化物粒子(径0.1～0.2cm)を微量に含む。粘性無。締まり有。

SK78
1 暗褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2cm)と炭化物粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む。ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性無。締まり有。
2 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3cm)をわずかに含む。黄褐色土がブロック状で混入。ロームブロック(径0.5～1cm)とローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性無。締まり弱。
3 褐色土　炭化物ブロック(径0.3～0.5cm)を微量に含む。ロームブロック(径3cm)を少量含む。粘性無。締まり弱。

SK79
1 暗褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2cm)と炭化物粒子(径0.1～0.2cm)及びローム粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性無。締まり有。
2 暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。焼土粒子(径0.1～0.3cm)を極わずかに含む。粘性無。締まり有。

SK80
1 褐色土　カーボン微粒子とローム微粒子を少量含む。締まり有。
2 暗黄褐色土　ローム粒子(径0.5cm)を含む。締まり有。

SK81
1 暗灰色土　カーボン粒子(径0.3～0.5cm)とローム粒子(径0.2～0.3cm)及び焼土粒子(径0.2cm)を含む。締まり有。
2 灰褐色土　ローム粒子(径0.2～0.3cm)とカーボン粒子(径0.2～0.3cm)を多量に含む。締まり有。
3 黄灰色土　ローム粒子(径 微～0.2cm)を多量に含む。締まり有。
4 黒褐色土　ローム粒子(径 微～1cm)と焼土粒子(径0.2cm)及びカーボン微粒子を含む。締まり有。
5 暗灰褐色土　ローム粒子(径 微～1cm)とカーボン粒子(径0.5cm)を含む。締まり有。
6 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。黒褐色土粒子(径0.5～1cm)を少量含む。締まり有。

第33図　第69～81号土坑

●第74号土坑（第33図）

C6グリッドに位置する。平面形は長径約2.1m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第32図）

土器　第32図30は折り返し口縁を持つ小型の磁器の口縁部資料である。

●第75号土坑（第33図）

C4グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第32図）

土器　第32図31は無文の平縁土器の口縁部、32は条線文の施された胴部資料である。

石器　33はチャートの不整形剥片で、正面右側縁に不規則な調整加工と使用痕が認められる。

●第76号土坑（第33図）

C5・D5グリッドに位置し、第5号住居跡を切る。平面形は長径約2.6m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。南側にテラス状に張り出す。

出土遺物（第32図）

土器　第32図34～37が本址出土資料である。34は横走する細隆起線の観察される条痕文系土器群の胴部資料、35は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料、36は破片左端に縦位沈線が見られる縄文地文の胴部資料、37は単節縄文を斜位から縦位に回転させる胴部資料である。

●第77号土坑（第33図）

D4グリッドに位置し、第53号土坑に切られ、第5号住居跡を切る。残存部で長径約1.3m、短径約1.2mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第32図）

土器　第32図38・39ともに単節縄文の施された胴部資料である。前者は諸磯a式である。

●第78号土坑（第33図）

D5グリッドに位置し、第96号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第79号土坑（第33図）

D5グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第80号土坑（第33図）

E5・F5グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から床面ま

での深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図1は表裏に縦位の条痕文が観察される胴部資料である。

●第81号土坑（第33図）

C4・5グリッドに位置し、第4号住居跡と第4号溝跡を切る。平面形は長径約2.8m、短径約1.2mの長楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約1.6mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図2～6が本址出土資料である。2・3は表裏条痕の胴部資料で、前者は小片ながら横走または斜位に交差する沈線を引き要所に円形刺突を配するものであることがわかる。4は垂下する磨消文帯を微隆帯で区画する胴部資料である。5は筒状の装飾突起である。破片左下に沈線が斜行することがわかり、口縁部文様帯につながるものと思われる。6は無文の胴部資料である。

●第82号土坑（第34図）

E4グリッドに位置し、第5号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約1.0m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第83号土坑（第34図）

E4グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第84号土坑（第34図）

F5グリッドに位置し、東半部は調査区外である。検出部分のみで長径約1.6m、短径約0.3mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図7は単節縄文の施された胴部小片である。

●第85号土坑（第34図）

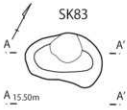
E5・F5グリッドに位置する。平面形は長径約2.4m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

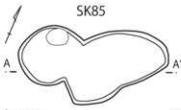
出土遺物（第35図）

土器　第35図8・9はともに表裏に条痕文の施される胴部資料である。前者は施文後やや撫でられている。後者は外面に縦位の内面に横位の条痕が観察できる。

●第86号土坑（第34図）

F4グリッドに位置し、東半部は調査区外である。第4号溝跡に切られる。検出部分のみで長径約1.0m、短径約0.9mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。



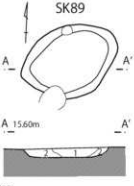


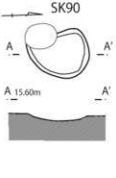
SK82
1　明褐色土　ローム粒子(径 微～0.1cm)を少量含む.炭化物粒子(径 微～0.1cm)とロームブロック(径1～1.5cm)をわずかに含む.粘性無.締まり良好.
2　褐色土　ロームブロック(径1～2cm)を多量に含む.炭化物粒子(径 微～0.1cm)をわずかに含む.粘性無.締まり良好.

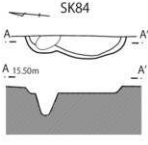
SK83
1　褐色土　ローム粒子(径 微～0.1cm)を少量含む.炭化物粒子(径 微～0.1cm)をわずかに含む.ロームブロック(径1～1.5cm)を少量斑状に含む.粘性無.締まりやや良好.
2　暗黄褐色土　ロームブロック主体で褐色土が混じる.ローム粒子(径 微～0.1cm)を微わずかに含む.粘性無.締まり良好.
3　暗褐色土　ロームブロック(径1cm)とローム粒子(径0.1～0.2cm)を少量含む.炭化物粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む.粘性無.締まり良好.
4　暗褐色土　含有物はあまり見られず均質な土層.粘性無.締まり良好.

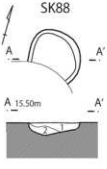
SK85
1　暗褐色土　白色砂粒子と焼土粒子をわずかに含む.締まりやや弱.
2　暗黄褐色土　ローム粒子(径0.1cm)をわずかに含む.炭化物粒子を含む.締まり良.
3　暗黄褐色土　均質な層位だが締まり強くボソボソ.
4　暗黄褐色土　黄褐色土が斑状に混じる.締まり良.
5　暗黄褐色土　炭化物粒子を含む.締まり良.
6　黄褐色土　ハードロームブロック(径2cm)をわずかに含む.締まり良.
7　黄褐色土　6層とローム土との漸移的な層位.

SK86
1　褐色土　ローム微粒子とカーボン微粒子を少量含む.締まり良好.
2　暗黄褐色土　多量のローム土から構成される.褐色土粒子をブロック状に含む.締まり有.



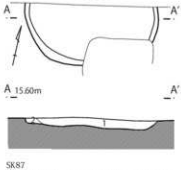


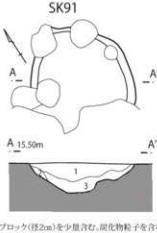


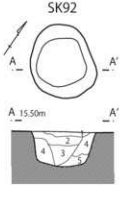


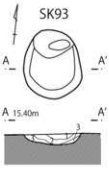
SK88
1　暗黄褐色土　均質な層位.締まり良.
2　暗黄褐色土　ハードロームブロック(径2cm)を少量含む.締まり良.

SK89
1　暗黄褐色土　ローム粒子(径0.1cm以下)をわずかに含む.炭化物粒子を含む.締まり良.
2　暗黄褐色土　1層に比べ炭化物粒子がやや多い.締まり良.









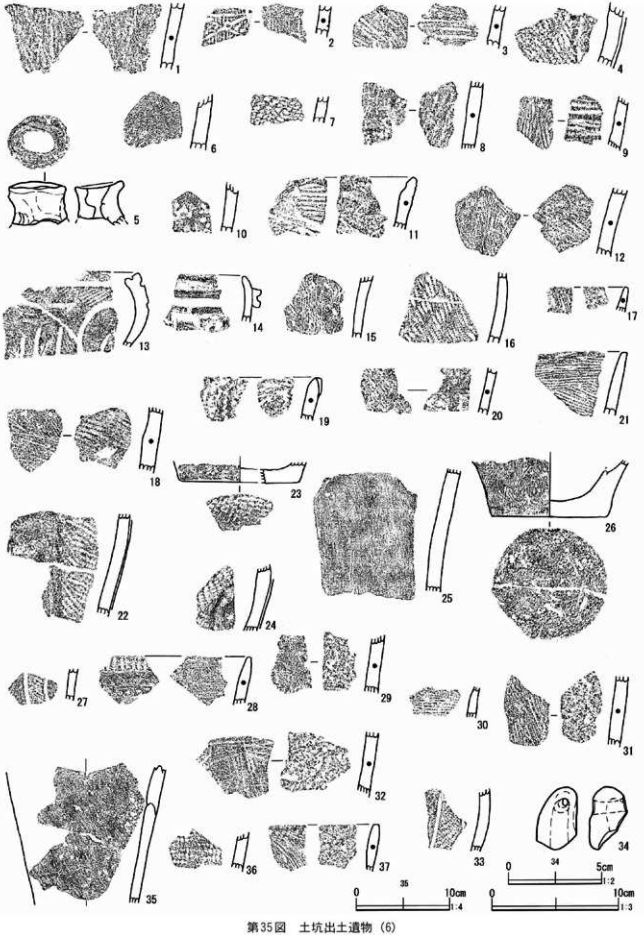
SK87
1　暗黄褐色土　ローム粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む.炭化物粒子を含む.締まり良.
2　暗黄褐色土　炭化材含む.締まり良.

SK91
1　暗茶褐色土　ローム粒子をわずかに含む.ロームブロック(径2cm)を少量含む.炭化物粒子を含む.締まり良.
2　黄褐色土　暗茶褐色のハードロームブロック(径2cm)を含む.締まり良.
3　暗茶褐色土　ロームブロック(径2cm)とローム粒子及び炭化物粒子を多量に含む.締まり良.

SK92
1　褐色土　ローム粒子(径 微～0.1cm)をわずかに含む.締まり弱.ややボソボソ.
2　暗茶褐色土　ロームブロック(径1～2cm)とローム粒子(径 微～0.1cm)を少量含む.締まり良好.
3　暗褐色土　ローム粒子(径0.1～0.2cm)をやや多く含む.ロームブロック(径1～2cm)を斑状に少量含む.焼土粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む.締まり良好.
4　暗黄褐色土　ロームブロック(径1～2cm)を多量に含む.締まり良好.ロームブロック主体の層.
5　暗褐色土　3層に比べ小さめのロームブロック(径1～1.5cm)を斑状に多量に含む.ローム粒子(径 微～0.1cm)を少量含む.締まり良好.

SK93
1　暗褐色土　ロームブロック(径3cm)を多量に含む.締まり良.
2　暗黄褐色土　ロームブロック(径3cm)を多量に含む.締まり良.
3　暗黄褐色土　暗褐色土が斑状に混じる層位.締まり良.

第34図　第82～93号土坑



第35図　土坑出土遺物（6）

出土遺物（第35図）

土器　第35図10は無文の胴部資料である。ところどころに「火撥ね」と思われる潰痕が見られる。

●第87号土坑（第34図）

E4グリッドに位置し、第70号土坑と第4号溝跡に切られる。残存部で長径約2.2m、短径約1.0mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第35図）

土器　第35図11・12はともに表裏に条痕文の施された早期末葉の資料である。前者は口縁部で、内面には指頭で押さえたような沈線状の凹帯が認められる。13は内湾する口縁部資料で、口唇部に1条の沈線が引かれる。口縁部文様帯は、口唇直下の横走沈線の下に下開きの弧線が描かれ単節縄文が充填される。下向き弧線の内部には垂下沈線が引かれるようである。

●第88号土坑（第34図）

E4グリッドに位置し、第56号土坑に切られる。残存部で長径約0.8m、短径約0.7mを測る。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

●第89号土坑（第34図）

E5グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図14はやや内湾する平縁の口縁部資料で、頂部を2条に分ける丈の高い隆帯で口縁部文様帯の上端を区画するものである。15は条線文の施された胴部資料、16は単節縄文を斜位回転させた胴部資料である。

●第90号土坑（第34図）

F5グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図17・18が本址出土資料である。両者とも表裏に条痕文の施された早期末葉の資料で、前者は薄手の口縁部資料である。

●第91号土坑（第34図）

E5グリッドに位置し、第64・65号土坑に切られる。残存部で長径約1.7m、短径約1.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.5mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第35図）

土器　第35図19～23が本址出土資料である。19は口縁部外面に粘土紐隆帯を貼る条痕文の資料、20は表面に無節縄文、内面に条痕施文後撫で消す胴部資料である。ともに花積下層式に該当する。21は口縁部

に横位のその下位に斜位の条線文を施す口縁部資料で諸磯 b3 式に該当する。22は縄文帯と磨消文帯の区画を垂下する微隆帯で行う胴部資料である。23は底面に網代痕を残す平底の底部資料である。

●第92号土坑（第34図）

E6グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.6mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第35図）

土器　第35図24は湾曲する垂下微隆帯で縄文帯と磨消文帯とを区画する胴部資料である。25・26は無文の資料である。後者は平底の底部で、底径9.2cmを測る。

●第93号土坑（第34図）

C6・D6グリッドに位置し、第6号溝跡を切る。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。北寄りに落ち込みが認められる。

●第94号土坑（第36図）

D6グリッドに位置し、第6号溝跡を切る。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図27は2本の沈線で画された縄文帯がやや湾曲しながら垂下する胴部資料である。

●第95号土坑（第36図）

D6グリッドに位置する。平面形は長径約2.3m、短径約2.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図28・29はともに表裏に条痕文の施された早期末葉の資料である。前者は口縁部に絡条体圧痕文の観察される平縁資料である。30は横走する条線文とその間隙に単節縄文が観察される胴部資料である。諸磯 b3 式であろう。

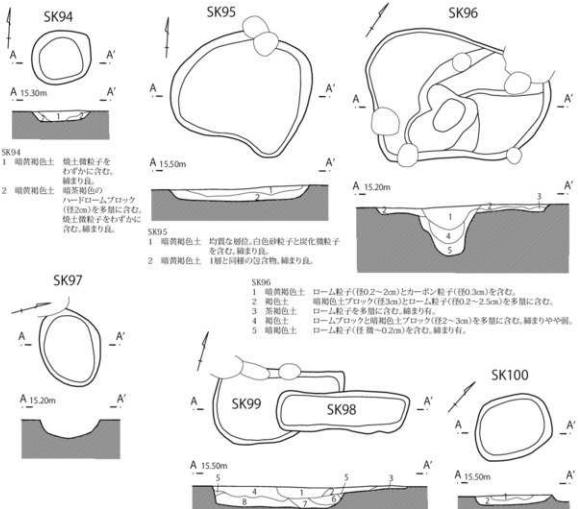
●第96号土坑（第36図）

C5・6・D5・6グリッドに位置し、第78号土坑に切られる。平面形は長径約2.9m、短径約2.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.8mを測り、底面は中央に落ち込みが認められる。

出土遺物（第35図）

土器　第35図31・32はともに表裏に条痕文の施された胴部資料である。33は沈線で画された縄文帯と磨消文帯の観察される胴部資料である。

土製品　34は上部に貫通孔が穿たれる棒状の垂飾品である。最大径2cm、残存長3.5cmを測る。さらに長いものであったものと思われる。



第36図　第94～100号土坑

●第97号土坑（第36図）

C6グリッドに位置し、第72号土坑に切られる。平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

●第98号土坑（第36図）

C5・D5グリッドに位置し、第99号土坑を切る。平面形は長径約2.1m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

出土遺物（第35図）

土器　第35図35は無文の胴下半資料である。残存部最大径は17㎝、残存高は14㎝を測る。

●第99号土坑（第36図）

C5・D5グリッドに位置し、第98号土坑に切られる。平面形は長径約2.0m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第35図）

土器　第35図36は単節縄文の施された胴部資料である。

●第100号土坑（第36図）

D5グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第35図）

土器　第35図37は表裏に条痕文の施される口縁部資料である。口縁部外縁には絡条体圧痕文が観察される。

(4) 炉穴

●第1号炉穴（第37図）

E6グリッドに位置し、第4号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約2.1m、短径約1.8mの不整円形を呈す。長楕円形を組み合わせたような形状で、北寄りの張り出し部と東寄りの張り出し部にそれぞれ直径約0.4mの焼土の広がりが認められる。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面は北寄りが深く窪む。

出土遺物（第38図）

土器　第38図1は表裏に条痕文の施されたのち、撫でを加える胴部小片である。

●第2号炉穴（第37図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.5mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第38図）

土器　第38図2は無文の口縁部資料で、横位の撫で整形痕が残される。3は縦位の条線文の施される胴部資料である。ともに中期加曾利E式土器である。

石器　4は黒曜石製の凹基無茎石鏃である。右脚端をわずかに欠く。周縁部から丁寧な調整加工が加えられた完成品と見られるが、器体中央は厚く残される。

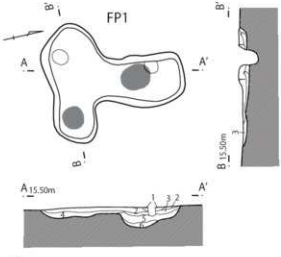
●第3号炉穴（第37図）

B3グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.0mの不整円形を呈す。中央に直径約0.3mの焼土の広がりが認められる。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は中央が浅く窪む。

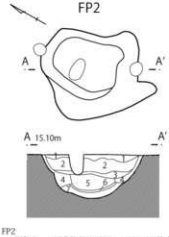
出土遺物（第38図）

土器　第38図6は推定口径28㎝、残存高25㎝を測る資料である。外面は口縁部に斜位の絡条体圧痕を押し以下は斜位から胴部ではほぼ縦位の条痕を密に施す。内面は口縁部付近では横位の胴部では縦位の条痕

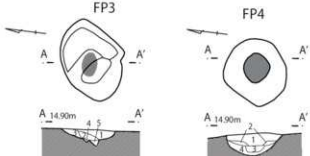
が観察できる。胎土の繊維含有量はそれほど多いものではなく、砂粒を含む。焼成は良好である。7は残存部最大径21㎝ほど、残存高20㎝ほどを測る資料である。外面は縦位の内面は横位の条痕が施されたのち撫でが加えられるようである。



FP1
1 暗褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2㎝)を多量に含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。締まりかなり弱。粘性無。
2 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2㎝)を多量に含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。粘性無。締まり有。
3 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2㎝)をかなり多く含む。
　　焼土ブロック(径1㎝)と炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。粘性無。締まり弱。
4 褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を多量に含む。
　　焼土粒子(径0.1～0.2㎝)を微量に含む。粘性弱。締まり有。
5 明褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2㎝)をかなり多く含む。
　　ローム ブロック(径1～3㎝)と炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を多量に含む。
　　焼土ブロック(径0.5～1㎝)を少量含む。黒色土がブロック状(径2㎝)に少量含まれる。
　　粘性無。締まり有。焼土ブロックとローム ブロック(被熱により硬化)が多量に見られる。
6 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2㎝)と炭化物粒子(径0.1～0.2㎝)を少量含む。
　　ブラックバンドのブロック(径3～4㎝)を数点含む。粘性弱。締まり有。

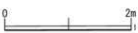


FP2
1 褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.5㎝)と焼土粒子
　　(径0.1～0.5㎝)を少量含む。
　　ローム粒子(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。
　　粘性無。暗褐色土が部分的に混じり締まり弱。
2 褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.5㎝)を多量に含む。
　　ローム粒子(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。
　　焼土粒子(径0.1～0.5㎝)を1㎝ほどの多量に含む。
　　粘性無。締まり有。
3 赤褐色土　焼土粒子(径0.1～0.5㎝)を多量に含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.5㎝)を少量含む。
　　焼土ブロック(径5㎝以上)を数点含む。
　　粘性強い。がある。締まり2層よりは強い。
4 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。
　　焼土ブロック(径2㎝)を含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。
　　粘性弱い。がある。締まり弱。
5 赤褐色土　3層に比べ赤みがかった強い。
　　焼土で占められている。被熱による硬化。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を多量に含む。
　　粘性無。締まり有。
6 黒褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。粘性無。
　　7層よりは強い。が締まり有。
　　被熱を受けているためボソボソ。
7 黒褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。
　　粘性有。締まり有。



FP3
1 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3㎝)とローム粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
2 暗褐色土　遺物が集中して出土した層。焼土粒子(径0.1～0.3㎝)をやや多く含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
3 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。焼土粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
4 赤褐色土　焼土ブロック(径1～2㎝)を多量に含む。粘性無。締まりやや有。
5 暗褐色土　焼土粒子(径0.1～0.2㎝)を少量含む。ローム粒子(径0.1～0.2㎝)
　　を極わずかに含む。粘性ややや有。締まりややや有。

FP4
1 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。
　　焼土ブロック(径1㎝)を含む。炭化物粒子
　　(径0.1～0.3㎝)を微量に含む。粘性有。
　　締まり弱。粒子細かい。
2 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。焼土粒子
　　(径0.1～0.3㎝)と炭化物粒子(径0.1～0.3㎝)
　　を微量に含む。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
3 暗褐色土　焼土ブロック(径5㎝)とローム硬化ブロック(径3㎝)
　　を含む。焼土粒子(径0.1～0.3㎝)をややを多く含む。
　　ローム粒子(径0.1～0.3㎝)を少量含む。粘性有。
　　締まりやや有。粒子やや粗い。
4 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。焼土粒子(径0.1～0.3㎝)
　　を少量含む。ローム硬化ブロック(径1～3㎝)を含む。
　　粘性有。締まり有。粒子細かい。被熱ソフトローム層。



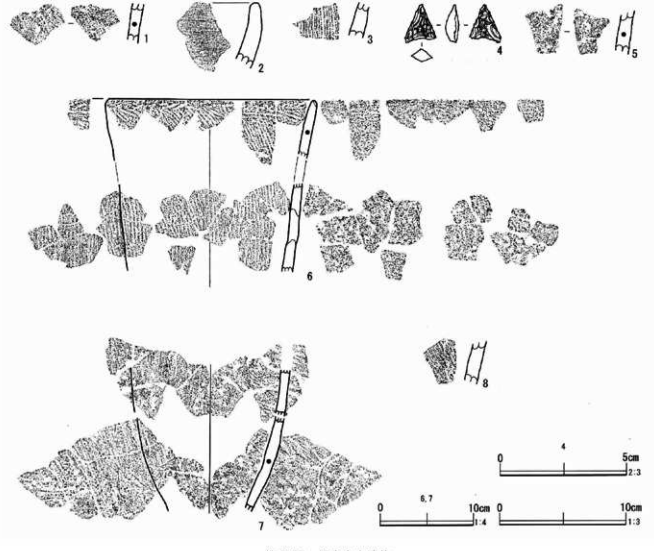
第37図　第1～4号炉穴

●**第4号炉穴**（第37図）

B3・C3グリッドに位置し、第2号溝跡に切られる。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整円形を呈す。中央に直径約0.4mの焼土の広がりが認められる。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第38図）

土器　第38図8は外面に条痕文の観察される胴部資料である。内面は無文であるが、繊維土器であり早期末葉の資料に位置付けられよう。



第38図　炉穴出土遺物

第8表　土坑・炉穴出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
23	2	磨製石斧	緑色岩	(6.3)	(4.1)	3.0	(75.0)	第24号土坑
27	11	2次加工剥片	黒色緻密安山岩	5.3	5.1	0.6	21.3	第29号土坑
29	13	2次加工剥片	チャート	2.3	2.3	0.4	2.2	第51号土坑
29	14	2次加工剥片	チャート	1.8	2.5	0.5	2.4	第51号土坑
29	16	石鏃	チャート	(1.9)	(1.1)	0.3	(0.6)	第52号土坑
29	20	石鏃	チャート	1.5	1.1	0.2	0.3	第53号土坑
29	37	石鏃	チャート	2.1	1.5	0.4	0.9	第62号土坑
32	26	2次加工剥片	黒曜石	1.4	1.8	0.5	1.2	第68号土坑
32	33	使用痕剥片	チャート	4.7	1.4	1.0	5.7	第75号土坑
38	4	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.6	0.5	第2号炉穴

(5) 溝跡

●第1号溝跡（第39・40図）

A1・B1・2・3グリッドに位置し、第2号溝跡に切られる。調査区内を南北方向に長さ約12.5m延伸する。南端は第3号溝跡に合流するようにして消失するが、北側は調査区外へ延びる。西半部は調査区外であるが、検出部分のみで最大幅は約0.8m、確認面からの最大深は約0.2mを測る。

出土遺物（第42図）

土器　第42図1～7が本址出土資料であるが、本址の時期を反映する資料は見いだせなかった。1は縄文施文後条線文を施す資料で諸磯b3式期のものと思われる。2～7は縄文中期加曽利E式及び並行期のものと思われ、2は口縁部に丈の低い隆帯による窓枠状の区画が形成されると思われるもの、3は口縁部の縄文を地文とする沈線区画に紡錘形の連続刺突が施されたもの、4は丈の高い隆帯が左下がりに垂下するものである。5は縄文帯と磨消文帯が交互に垂下する胴部資料、6は集合沈線の地文上に鎖状隆帯が垂下する胴部資料、7は無文となる胴部資料である。

●第2号溝跡（第39・40図）

B3・C3・D3・E3グリッドに位置し、第4号炉穴と第1号溝跡を切り、第32・55号土坑に切られる。調査区内を東西方向に長さ約17.0m延伸する。東端は途切れるが、西側は調査区外へ延びる。平面形は直線的で、最大幅は約1.5m、確認面からの最大深は約0.2mを測る。

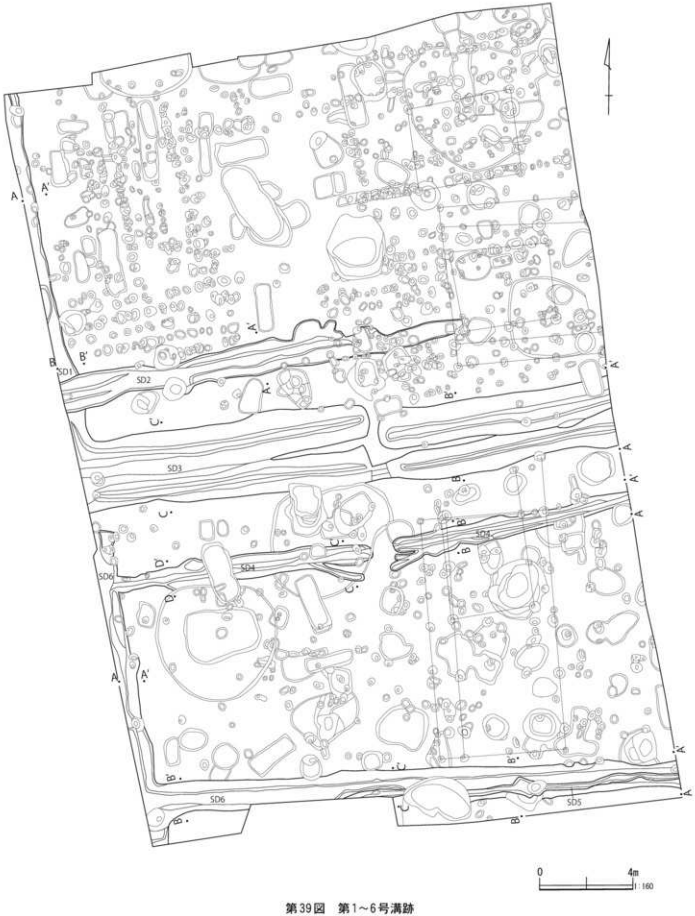
出土遺物（第42図）

土器　第42図8～14が本址出土土器であるが、本址の時期を反映する資料は見いだせなかった。8は表裏に条痕文の施される胴部資料、9は単節縄文の施された口縁部資料で諸磯a式土器である。10～14は中期加曽利E式土器に該当する。10・11は口縁部に横走沈線を持つ平縁土器である。12は口縁部無文帯と以下の縄文帯とを微隆帯で画する平縁資料、13は上開きの2条の沈線で画された弧状の縄文帯が看取される口縁部資料である。14は扁平ながら幅のある隆帯が横走する資料である。

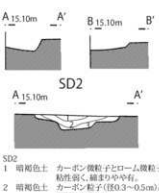
石器　第42図15は台形の平面形を持つもので砥石と思われる。裏面には浅い樋状の使用痕が見られる。

●第3号溝跡（第39・40図）

B3・4・C3・4・D3・4・E3・4・F3・4グリッドに位置し、第30・31・50・53号土坑に切られる。調査区内



第39図　第1～6号溝跡

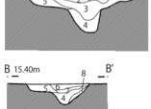


SD2

1　暗褐色土　カーボン微粒子とローム微粒子を含む。粘性弱く、締まりやや有。

2　暗褐色土　カーボン粒子(径0.3～0.5cm)と焼土(弱熱)を含む。

3　褐色土　ローム粒子を多量に含む、締まり有。



SD4

1　暗灰褐色土　ローム粒子(径 微～0.2cm)とカーボン微粒子を含む。
　　ローム粒子の存在によって分層した。

2　暗灰褐色土　1層より色調がロ一っぽい。
　　カーボン微粒子と焼土微粒子を含む。
　　ローム粒子は目立たない。

3　暗灰色土　焼土微粒子とカーボン粒子(径 微～0.2cm)を含む。締まり弱。
　　粘性に欠ける。

4　暗灰茶褐色土　ローム微粒子を含む。
　　全体にややブロック状を呈す。
　　ゴソゴソとした感じを受ける。

5　暗黄褐色土　ローム粒子(径0.2～0.3cm)とカーボン粒子(径0.2cm)及び細砂粒子を含む。締まり無。

6　暗黄色土　ローム土により構成される。締まり無。

7　暗黄褐色土　5層より灰色味が強い。カーボン粒子(径0.2cm)を含む。粘性弱。締まり弱。

8　暗黄色土　6層より褐色が加っている。
　　ボソボソしたホ ロック状を呈する。

9　暗茶褐色土　カーボン微粒子と灰白色砂粒子を少量含む。締まり有。

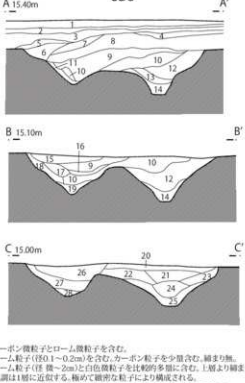
10　暗黄褐色土　7層に色調が近似する。
　　顕著で締まりのあることにより分層。
　　焼土微粒子とカーボン微粒子の混入が目立つ。

11　暗灰褐色土　焼土微粒子を少量含む。締まり有。

12　暗黄褐色土　10層に比べ暗灰色土粒子(径0.3～0.5cm)の混入が目立つ。

13　暗灰褐色土　カーボン粒子(径0.2～0.3cm)を含む。粘性弱。

14　暗灰褐色土　カーボン粒子を含まない。
　　ローム粒子(径0.3cm)を少量含む。



基本土層

1　暗褐色土　カーボン微粒子とローム微粒子を含む。

1　暗灰色土　ローム粒子(径0.1～0.2cm)を含む。カーボン粒子を少量含む。締まり無。

2　暗灰褐色土　ローム粒子(径 微～2cm)と白色微粒子を比較的多量に含む。1層より締まり有。

3　暗灰色土　色調は1層に近似する。極めて顕著な粒子により構成される。
　　ローム微粒子と白色微粒子及びカーボン粒子(径 微～0.3cm)を含む。
　　五片を少量混じる。締まり良好。

4　灰褐色土　2層よりローム粒子の混入が少ない。他層に比べるとローム微粒子を多量に含む。
　　2～3層より締まり強。

5　黄灰褐色土　ローム粒子(径 微～0.5cm)を含む。締まり弱。ボソボソ。

SD3

6　暗灰色土　ローム粒子(径0.2～0.5cm)とカーボン粒子(径0.1～0.2cm)及び焼土微粒子を含む。
　　締まり弱。

7　黄灰褐色土　5層に近似する色調を呈する。5層よりロームのブロック化が顕著。ローム粒子(径0.5～2cm)を含む。微量の焼土微粒子とカーボン微粒子を混じる。締まり有。
　　4層に近似する色調を呈する。ローム微粒子の混入量が少ない。

8　灰褐色土　カーボン粒子(径 微～0.5cm)と白色砂粒子(径 微～0.1cm)及び焼土微粒子を含む。
　　植物の種子と思われる物を多量に含む。締まり弱。

9　暗褐色土　ローム粒子(径 微～0.5cm)を含む。カーボン微粒子を少量含む。締まり弱。ボソボソ。

10　暗黄褐色土　ローム粒子(径 微～2cm)を多量に含む。ロームは一部ブロック状に集中する。締まり有。

11　暗褐色土　9層より茶色味が強い。ローム微粒子を多量に含む。締まり良好。

12　暗褐色土　目立った混入物が少ない。色調の安定した層位。
　　一部にブロック状(径1～2cm)となる部分あり。
　　斜面上方は色調がやや明るい。

13　暗茶褐色土　少量の焼土微粒子とローム微粒子を混じる。色調の安定した層位。締まり良好。

14　茶褐色土　13層に近似した色調、やや明るい色調をもって別層位とした。
　　ローム微粒子を少量含む。締まり良好。

15　暗灰褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.2cm)と灰褐色の粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性やや有。
　　締まり有。

16　暗灰褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む。粘性やや有。締まりやや有。

17　褐色土　ローム ブロック(径0.1～0.2cm)をやや多く含み、ボソボソした感。締まり有。粘性無。
　　粒子がやや粗い。

18　暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.2cm)を少量含む。粘性やや有。締まりやや有。粒子がやや粗い。

19　暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.2cm)を少量含む。ロームブロック(径1～2cm)をわずかに含む。

20　暗褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。
　　ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。
　　締まり有。粒子粗い。

21　褐色土　20層よりローム粒子が多く粒子も粗い。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。
　　粘性有。締まりやや有。

22　褐色土　21層よりローム粒子が多く粒子も粗い。粘性有。締まりやや有。

23　暗褐色土　21層と比べると粒子がかなり細かい。ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。
　　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性有。締まりやや有。

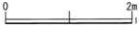
24　暗褐色土　21層より黒色土の混入が多い。ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。
　　21層より粒子が細かい。粘性有。締まりやや有。

25　褐色土　ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。締まり有。粒子細かい。

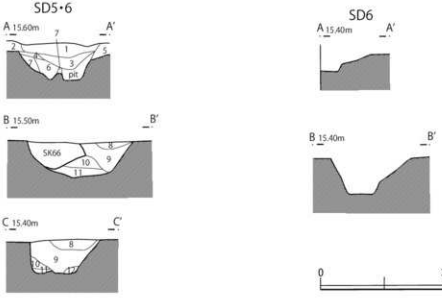
26　暗灰褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.2cm)と灰褐色の粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性やや有。
　　締まり有。

27　暗灰褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む。粘性やや有。締まりやや有。

28　暗褐色土　ローム ブロック(径2cm)を含む。粘性有。締まり弱。粒子粗い。



第40図　第1～4号溝跡



SD5・6
1　褐色土　　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む,焼土粒子(径0.2cm)をわずかに含む,全体に砂を多量に含む,粘性弱,締まり弱.
2　明褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む,焼土粒子(径0.1～0.2cm)を微量に含む,粘性やや有,締まり有.
3　暗褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.2cm)とローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む,焼土粒子(径0.1cm)を微量に含む,粘性無,締まり弱.
4　褐色土　　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む,ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む,焼土粒子(径0.1～0.2cm)をわずかに含む,粘性無,締まり無.
5　明褐色土　ローム粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む,ロームブロック(径0.3～0.5cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む.
　　焼土粒子(径0.1cm)をわずかに含む,全体に少量だが砂を含む,締まり弱(1層より強い).
6　褐色土　　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む,焼土粒子(径0.1～0.2cm)を微量に含む,ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む,粘性無,締まり有.
7　暗褐色土　ロームブロック(径0.5cm)を多量に含む,炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む,黄褐色土が部分的に混入している,粘性無,締まり弱.
8　青白色砂層　青白色から黄白色の砂によって構成され,上層に褐色土層を混じえる,締まり無.
9　暗褐色土　混入物の少ない均質な層位,8層砂粒子を少量混じえる.
10 茶褐色土　ロームブロックを含む,ややボソボソした感じの層位.
11 暗茶褐色土　混入物の少ない均質な層位,緻密で締まり有.
12 暗茶褐色土　ロームブロックをややや多く含む,粘性無,締まり有.

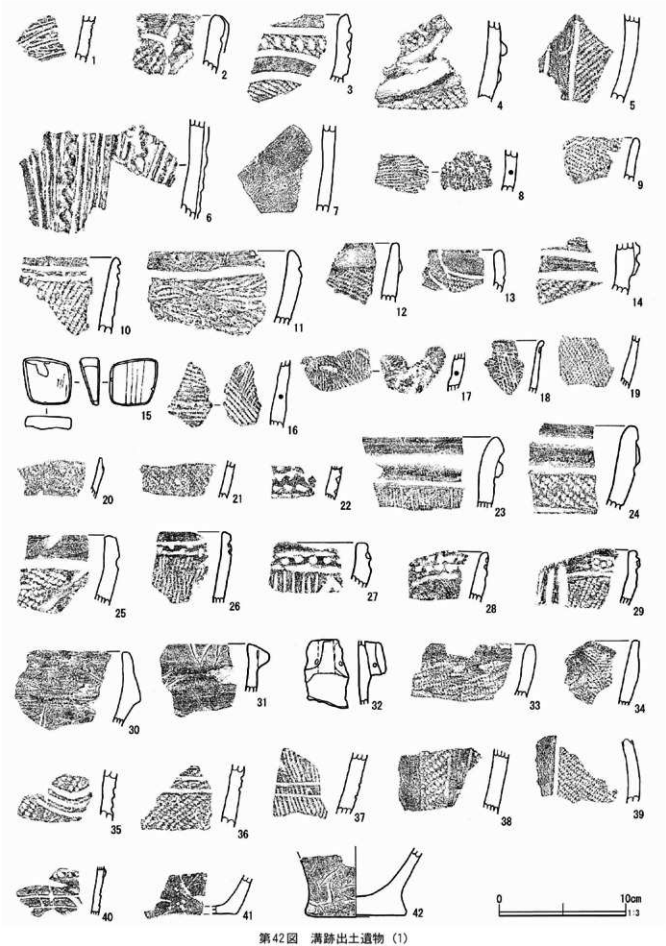
第41図　第5・6号溝跡

を東西方向に長さ約23.0m延伸する。両端は調査区外へ延びる。幅約1.5mの溝跡を南北2条合わせたような形状を呈し、両溝を合わせた幅は約3.0mを測る。土層断面から南北の溝跡の新旧関係は、北側の溝跡が埋まってから南側の溝跡が埋没したようである。確認面からの最大深は約0.8mを測る。北側の溝跡は調査区中央部に土橋状に掘り残した部分が認められる。

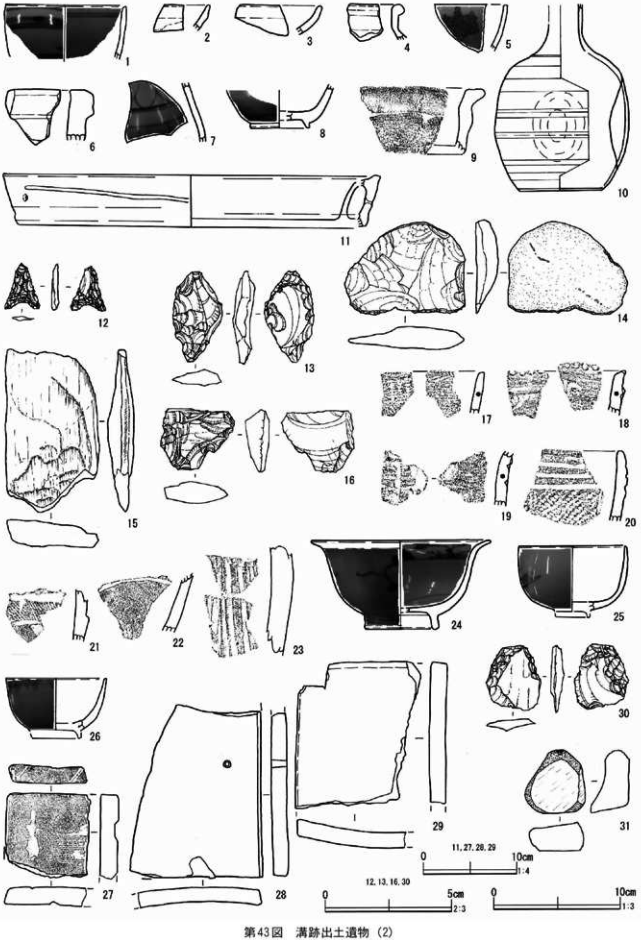
出土遺物（第42・43・49図）

土器　第42図16～42及び第43図1～11が本址出土土器である。16・17は表裏に条痕文の施された胴部資料、18は口縁部にC字状爪形文を持つ平行沈線を引き、以下にレンズ状のモチーフが描出される資料、19～21は節の細かい単節縄文の施された胴部資料である。18を含め諸磯ａ式に該当する。22は変形爪形文の施された浮島式である。23・24は太い隆帯が口縁部を巡る大振りの深鉢と思われ、中期加曽利Ｅ式に該当する。25は口縁部無文帯下端を沈線で区画する資料である。26～29は口縁部に円形の刺突文を持つ一群である。27では縦位の集合沈線の地文上に施された連弧文が窺われる。28・29は緩い波状縁を形成するようである。30・31は無文で口縁部に隆帯を貼り複合口縁を形成するもの、32は筒状の把手が付される資料である。把手には貫通する小孔が穿たれる。33・34は単節縄文の施される口縁部資料、35～37は縄文の施される胴部に横位沈線や弧線が施されるもの、38・39は垂下する磨消文帯と縄文帯とが交互に形成される胴部資料である。40は横位の鎖状隆帯の見られる薄手の土器で後期堀之内式に該当する。41・42は無文の底部資料である。

第43図1は薄麦猪口、2・3は磁器小皿である。4は短頸壺であろうか。5は磁器小碗、6は中世末に遡るが常滑焼の大甕の口縁部、7は瓶型磁器の胴部、8は磁器の小碗底部、10はいわゆるペコカン徳利である。9・11はホウロクである。



第42図　溝跡出土遺物（1）



第43図　溝跡出土遺物（2）

石器　12はチャート製の凹基無茎石鏃である。裏面左側縁の調整加工が施されていないが完成品と思われる。それ以外の部分の調整加工は丁寧なものである。13は2次加工剥片で、削器であろう。横長剥片を素材とし、裏面中央に素材の主剥離を大きく残す。正面左側縁が刃部と思われ、正面からの細かい調整加工が残される。14も削器と思われる2次加工剥片で、転石由来の大型剥片を素材とし、正面下辺に両面からの調整加工を加え、直刃を形成している。裏面には礫表皮を大きく残す。15は緑泥片岩の砥石である。さらに大型の石器の残片を2次利用したものと思われ、正面及び右側縁に研磨痕が残される。16は2次加工剥片である。横長の不整形剥片を素材とし、裏面上部のバルブを除去し、正面右側縁に粗い調整加工を施すものである。

土製品　第49図24はトチンである。不整形で扁平なものである。

●第4号溝跡（第39・40図）

B4・5・C4・5・D4・5・E4・5・F4・5グリッドに位置し、第4・5号掘立柱建物跡と第81・86号土坑に切られ、第5号住居址と第69・87号土坑を切る。調査区内を東西方向に長さ約23.0m延伸する。西端は第6号溝跡に合流するようにして消失するが、東側は調査区外へ延びる。平面形は直線的で、最大幅は約2.0m、確認面からの最大深は約0.6mを測る。第3号溝跡と同様に調査区中央部に土橋状に掘り残した部分が認められる。

出土遺物（第43・49図）

土器　第43図17～19は表裏に条痕文の施された早期末葉の資料である。17では口縁部に絡条体圧痕文が施される。18では内削ぎに整えられた口唇部に刺突が施される。20は平縁となる口縁部に3条の横走沈線が引かれる。中期加曾利E式土器である。21は沈線で区画された縄文帯が横走する胴部資料、22は底部無文帯上端を横走沈線で画す胴部下半の資料、23は縦位の集合沈線の見られる胴部資料である。24～26は磁器の碗である。24は口径14cm、器高7.2cmを測る。27～29は平瓦である。27では横位の条線が看取される。28では焼成前穿孔の小孔が穿たれる。29では隅切りが施される。

石器　30は2次加工剥片である。不整形剥片を素材とするもので、正面に節理面を大きく残し、裏面には主剥離面を残す。裏面右側縁にあったと思われるバルブを削ぎながら、足の長い剥離を加えている。31は砥石兼敲石である。砥石としての使用は両面に及び、側面も使われている。敲石として側縁を使っている。

土製品　第49図23はトチンである。上部が盛り上がり、断面がL字型を呈したものと思われるが、盛り上がった部分が欠損している。

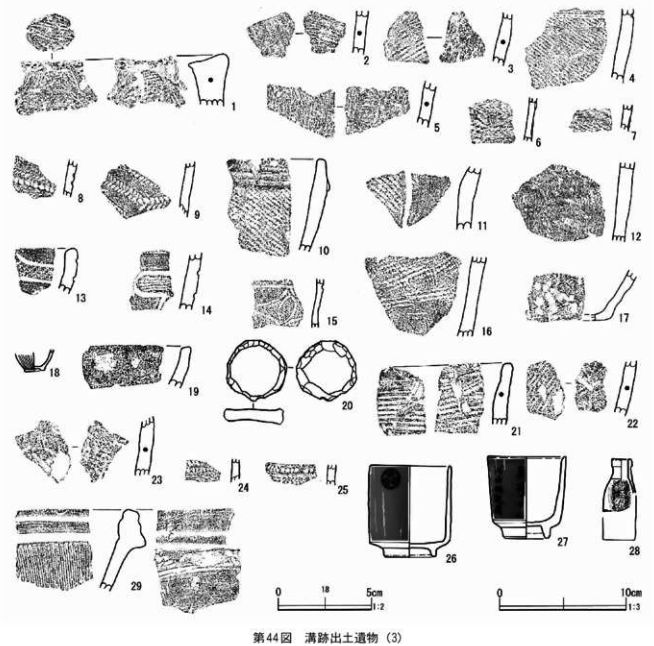
●第5号溝跡（第39・41図）

D6・E6・F6グリッドに位置し、第61・62・66号土坑に切られ、第63・67号土坑を切る。調査区内を東西方向に長さ約15.0m延伸する。西端は第6号溝跡に合流するようにして消失するが、東側は第6号溝跡と合流しながら調査区外へ延びる。平面形は直線的で、最大幅は約1.1m、確認面からの最大深は約0.6mを測る。

出土遺物（第44図）

土器　第44図1～3・5は表裏に条痕文の施された早期末葉の資料である。1では波状縁の波頂部に付された上部が楕円形となる突起が見られる。4は縄文地文上に横位の爪形文の施された細い平行沈線が見られ

る諸磯ａ式土器、6・7は刺し切るような刺突の見られる浮線文系の諸磯ｂ式土器である。8・9は変形爪形文の見られる浮島式土器である。10は口縁部無文帯の下端を微隆帯で閉じる平縁土器で、中期加曾利Ｅ式土器末葉の資料である。11は磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料、12は無文の胴部資料である。13・14は沈線で縁どられた幅の狭い縄文帯が施されたものである。後期称名寺式土器に該当しよう。15は玉抱きの三叉文が描出される胴部資料で、晩期安行Ⅲａ式にあたろう。16は単節縄文の施された胴部資料、17は無文の底部資料である。18は小型の磁器で、縦位に条線風の稜が見られる。19はホウロクである。20は磁器の底部の周縁部に丁寧に剥離を加えたものである。



第44図　溝跡出土遺物（3）

●第6号溝跡（第39・41図）

B4・5・6・C6・D6・E6・F6グリッドに位置し、第93・94号土坑に切られ、第39・63号土坑を切る。B4グリッドを起点に南へ約14.0m延伸し、クランク状に曲折した後、西へ約23.0m延伸して調査区外に到る。最大幅は約1.2m、確認面からの最大深は約0.6mを測る。D6・E6・F6グリッドにおいては第5号溝跡と合流しながら調査区外へ延びる。

出土遺物（第44図）

土器　第44図21～29が本址出土資料である。21～23は表裏に条痕文の施された早期末葉の資料、24・25は変形爪形文の施された浮島式土器である。26・27は磁器の湯呑みである。28はガラス瓶で「紅清□」と読める浮き彫りが施される。29は擂鉢である。

第9表　溝跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
42	15	砥石	砂岩	3.8	3.7	1.1	22.9	第2号溝跡
43	12	石鏃	チャート	1.8	1.4	0.3	0.4	第3号溝跡
43	13	2次加工剥片	チャート	3.7	2.0	0.7	4.8	第3号溝跡
43	14	2次加工剥片	砂岩	7.2	9.2	1.7	139.5	第3号溝跡
43	15	磨石	緑泥片岩	(12.3)	(7.3)	1.9	(268.0)	第3号溝跡
43	16	2次加工剥片	チャート	2.5	2.8	1.0	6.3	第3号溝跡
43	30	2次加工剥片	チャート	2.7	2.2	0.5	2.6	第4号溝跡
43	31	砥石兼敲石	砂岩	(5.0)	(4.4)	2.0	(70.7)	第4号溝跡

(6) 瓦窯跡

●第1号瓦窯跡（第45～47図）

C2グリッドに位置する。だるま窯と呼ばれる燻し瓦を焼く平窯で、両側に焚口と燃焼部（A・B窯体）があり中央に焼成部があったと考えられる。平面形は長径約4.2m、短径約1.7mの楕円形を呈し、3基の付属遺構を伴う。確認面から床面までの深さは約0.4mを測り、底面はA窯体側の南寄りが浅く窪む。

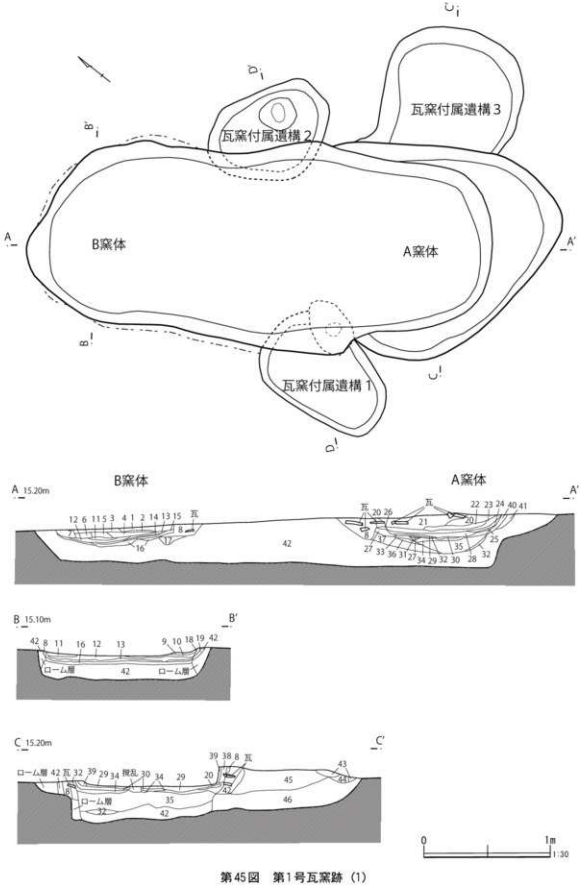
第28・30・33層はA窯体の窯底に関わる層位、第9・13・16層はB窯体の窯底に関わる層位であり、最低でも3回の操業が行われたものと考えられる。

瓦は焼成部のロストルと呼ばれる畦に置かれ、ロストルの間を火が通り焼き上がる。窯底面の被熱範囲と還元範囲の広がりから、本窯では3箇所の通煙孔が設けられ、瓦の出土状況と合わせて、約0.2m幅のロストルが3列設けられたものと考えられる。B窯体の底面には、長径約1.0m、短径約0.4mの炭化物範囲が広がっている。

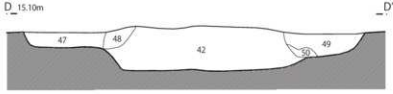
焼成部の両側に瓦窯付属遺構1・2が掘り込まれる。瓦窯付属遺構1は約0.1m、瓦窯付属遺構2は約0.2mの浅い掘り込みであり、焼成作業に伴うものと想定される。A窯体の東側には瓦窯付属遺構3が約0.3mの深さで掘り込まれる。A窯体の焚口付近での作業に伴うものと想定される。

出土遺物（第48・49図）

瓦　第48図1～11は本址出土の平瓦である。断面は「へ」の字に湾曲するものである。いずれも断片であり、製品の正確な大きさは不明であるが、幅は概ね25cm前後であったものと思われる。2では方形に隅切りをしていることがわかる。1は焼き締まりによる無数の亀裂が見られる。



第45図　第1号瓦窯跡（1）



第1号瓦窯跡
1　灰褐色土　焼土粒子(径0.1～0.5cm)を含む。粘土質土をやや多く含む。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
2　灰白色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。締まり有。粒子細かい。
3　灰褐色土　1層より粘土ブロックを多量に含む。焼土粒子が少ない。炭化物(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。締まりやや有。粒子細かい。
4　黒褐色土　炭化物粒子を多量に含む。粘性無。締まり有。粒子細かい。
5　暗赤褐色土　焼土粒子(径0.1～0.5cm)を含み、炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性有。締まり有。粒子細かい。
6　暗灰褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性有。締まり有。粒子粗い。5層よりも被熱弱。
7　黒褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。締まり弱。粒子粗い。
8　灰白色土　酸化の影響によりややみみがかっている。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
9　淡青灰色土　被熱により非常に硬化した還元層。B窯体最後の窯底。
10 黒褐色土　粘性やや有。締まり有。
11 暗赤褐色土　粘性やや有。締まり有。被熱により明褐色の粘土が変色したと思われる。
12 褐褐色土　炭化物粒子(径0.5cm)をわずかに含む。A窯体2の明褐色の35層のようなボソボソした感じは見られない。粘性やや有。締まり有。
13 淡青灰色土　砂質の還元層。締まりやや有。最後の一段階前の窯底。9層のような硬化は見られない。
厚の厚さが非常に薄いのは数回にわたり窯内で掻き出しを行ったためと思われる。
14 灰色土　締まりやや有。砂質の層。被熱の程度により13層ほどに変化しなかったと思われる。
15 黒褐色土　粘性やや有。締まり有。10層と類似した層。被熱の強弱により別した。
16 暗赤褐色土　粘性やや有。締まり有。11層と類似した層。被熱の強弱により分別した。
17 灰白色土　酸化の影響により赤みがかっている。砂質。
18 赤褐色土　焼土ブロック層。被熱によりやや硬化している。
19 暗赤褐色土　被熱によりやや硬化している。
20 灰褐色土　焼土粒子(径0.1～0.5cm)を多量に含む。炭化物粒子(径0.1～0.5cm)を少量含む。窯壁崩壊時の小破片(径0.1～0.3cm)を少量含む。
被熱した粘土ブロック(径1m)を含む。遺物が近になると窯壁の小ブロックが数片入っている。粘性無。締まり有。
21 暗褐色土　窯壁崩落ブロックで占められている。遺物も含む。
22 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性無。締まり弱。
23 黒褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を多量に含む。炭化物ブロック(径1cm)を数片含む。粘性無。締まり弱。
24 褐色土　焼土粒子(径0.1～0.3cm)と炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性無。22層に比べると締まりは有るが弱い。
25 暗赤褐色土　被熱した粘土で占められている。粘性有。締まり有。
26 暗褐色土　窯壁。
27 灰白色土　窯壁。26層と27層はロストルの際の部分で被熱の違いにより分かれた。
28 淡青灰色土　被熱により非常に硬化した還元層。A窯体最後の窯底。
29 黒褐色土　粘性やや有。締まり有。還元層に伴うもの。
30 淡青灰色土　28層より硬化の度合いが弱い。A窯体の最後から一段階前の窯底。
31 黒褐色土　粘性やや有。締まりやや有。還元層に伴うもの。
32 淡青灰色土　砂質の還元層。最後から一段階前の窯底にあたる。B窯体の13層に類する層。
33 淡青灰色土　砂質の還元層。最後から二段階前の窯底にあたる。
34 暗赤褐色土　粘性やや有。締まりやや有。
35 明褐色土　ボソボソとした極軟い粘土層。白色粒子(径0.1～0.5cm)をやや多く含む。最後から二段階前の窯底の上に堆積する層。
36 灰色土　窯体の14層に類似する層。
37 暗赤褐色土　34層に類似する層。粘性有。締まり無。
38 赤褐色土　焼土ブロック層。被熱によりかなり硬化。
39 灰白色土　灰白色の窯壁層。被熱によりかなり硬化。
40 暗褐色土　24層に類似する層。粘性有。締まりやや有。
41 灰白色土　焼土粒子をわずかに含む。
42 灰白色土　粘土層。粘性有。締まり有。粒子細かい。
43 灰褐色土　粘土層。粘性有。締まり弱。粒子粗い。
44 灰褐色土　粘土層ではない。粘性有。締まりは43層より有。粒子細かい。
45 黒褐色土　ローム粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。締まりやや強い。粒子細かい。
46 黒褐色土　44層よりローム粒子を多量に含み、締まりも43層より有。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を少量含む。粘性有。粒子細かい。
47 暗褐色土　ローム粒子(径0.1～0.3cm)と粘土粒子(灰褐色)を多量に含む。炭化物粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。粘性有。締まり弱。粒子細かい。
48 暗褐色土　47層より粘土ブロック(径1cm)を多量に含む。焼土ブロック(径1cm)を含む。ローム粒子は47層より少ない。粘性有。締まりやや有。粒子細かい。
49 黒色土　焼土粒子(径0.1～0.3cm)を微量に含む。窯壁片を含む。灰白色の粘土粒子をやや多く含む。粘性有。締まりやや強い。粒子細かい。
50 黒褐色土　ローム粒子、灰白色の粘土粒子を多量に含む。粘性有。締まりやや強い。粒子粗い。

第46図　第1号瓦窯跡（2）

土器　12は擂鉢片である。13は縄文土器で、湾曲する2条の沈線が窺われる胴部資料である。

土製品　第49図1がブロック状の陶製品である。共土で作られていることから、焼き台の一種であるものと思われる。2・3はいわゆるトチンである。共土で作られ、2では上部がわずかに盛り上がることがわかる。

窯底面

A

A'

粘土範囲
被熱範囲
還元範囲
炭化物範囲

瓦出土状況

A

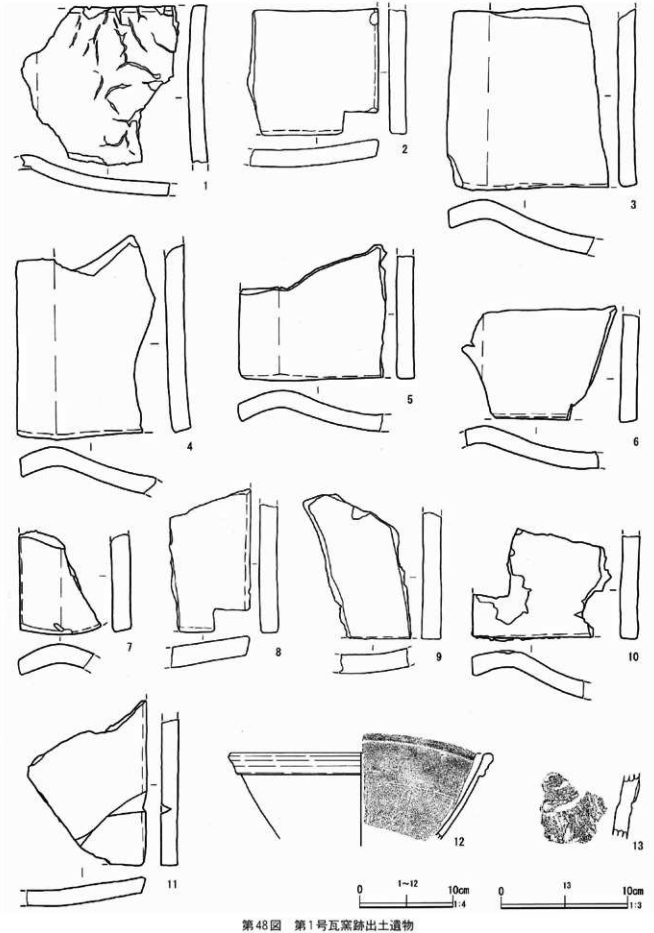
A'

0

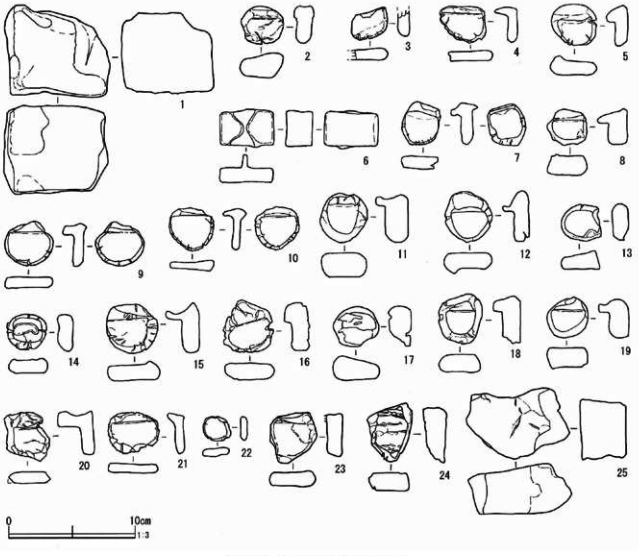
1m

1:30

第47図　第1号瓦窯跡（3）



第48図　第1号瓦窯跡出土遺物

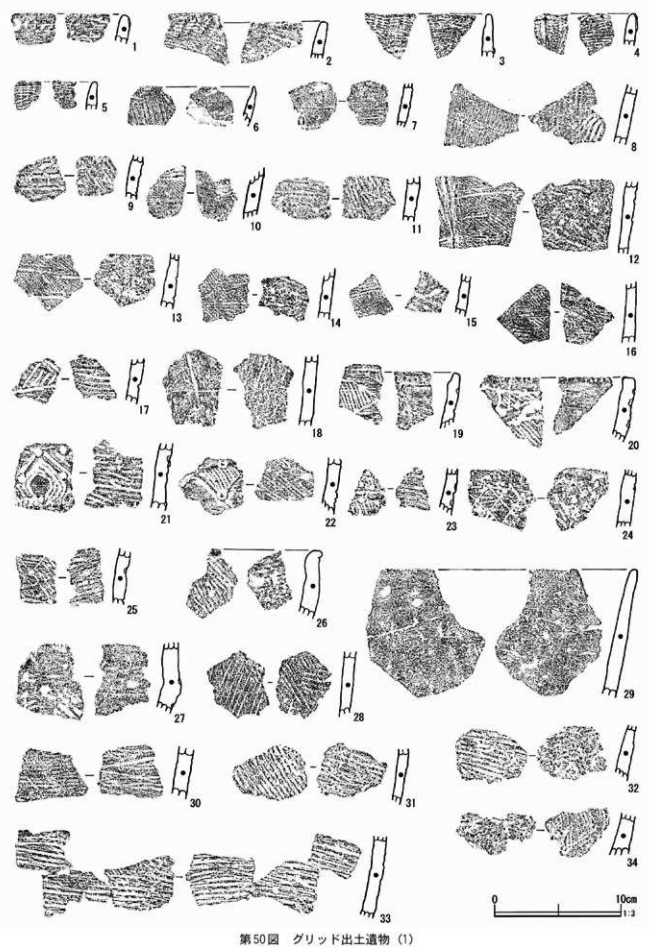


第49図　第1号瓦窯跡関連土製品

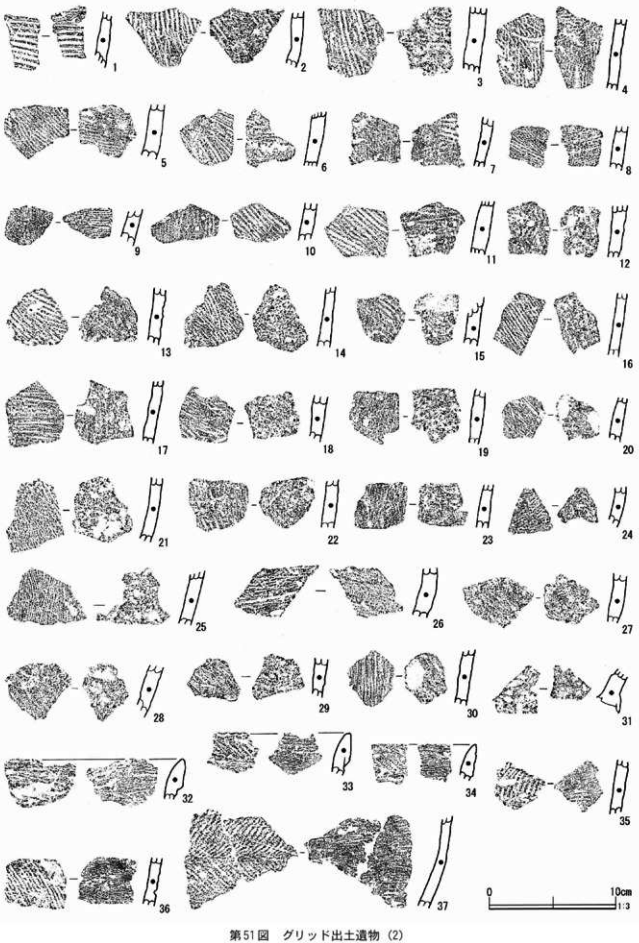
(7) グリッド出土遺物（第50～58図）

土器　第50図1～34、第51図1～31は早期条痕文系土器群である。このうち第50図1～4は口縁部外縁に絡条体圧痕文を施す。特に3・4では細隆起線を伴うことがわかる。5は口縁部外縁に貝殻腹縁による連続刺突を施す。6～13では縦横の細隆起線文が施される。17では沈線区画の中に単沈線が充填される。19～25では沈線や細隆起線による区画が見られ、要所に円形刺突が加えられる。区画内には単沈線が充填される場合が目立つ。27は胴部に屈曲を持つ資料、29は条痕撫で消しの口縁部資料である。第51図31は底部付近の資料である。平底となるものと思われる。32～37は花積下層式土器である。32～34は口唇部の尖る複合口縁土器でいずれも平縁となる。35～37は外面に縄文、内面に条痕が見られる。

第52図1～25は前期後半の諸磯式及び並行期の一群である。1は爪形刺突を伴う平行沈線の引かれた口縁部資料、2～6は単節斜縄文の施されるもので諸磯a式に該当する。7～10は結節羽状縄文の施される一群で、石英と思われる白色砂粒を顕著に含む一群である。甲州釈迦堂Z3群に比定できようか。11～17は諸磯b式土器である。11は沈線文系のもので渦巻状のモチーフの施される口縁部資料、12は浮線文の口



第50図　グリッド出土遺物（1）



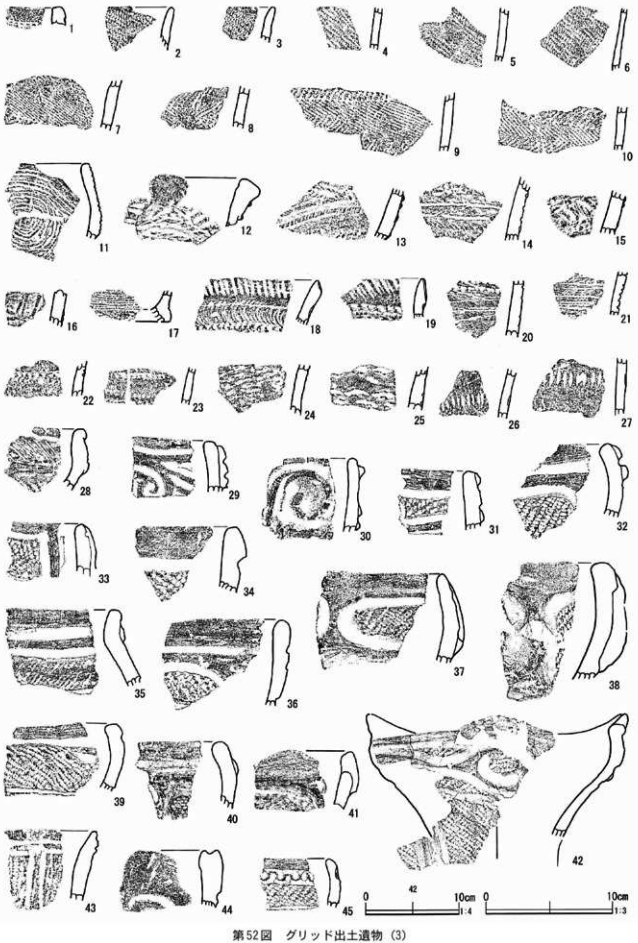
第51図　グリッド出土遺物（2）

縁部資料である。13～16は波浮線文の胴部資料、17は横位の条線文の観察される底部資料である。18～25は浮島式、興津式に該当すると思われる一群である。18は棕櫚状文の施された口縁部、19は貝殻腹縁文の施された口縁部資料である。20・21は横走する沈線の引かれる胴部資料で、前者では破片上部に変形爪形文の一部と思われる刺突列が看取される。22・23は変形爪形文の施されるもの、24・25は竹管をロッキングさせながら引きずるように施文するものである。26・27は中期前半阿玉台式土器の胴部資料である。28～第53図12までは中期後葉加曽利Ｅ式土器である。28は隆帯で枠状区画をなす口縁部資料で、区画内には斜行沈線が充填される。29～42は口縁部に渦巻文や窓枠状区画を持つ深鉢形土器である。29・30は丈の高い隆帯によるしっかりと巻き切った渦巻文が観察される。31・32なども丈の高い隆帯を持つもので、同様のものと思われる。33は丈の高い隆帯はまっすぐ垂下するものである。34・37・38・40～42などは隆帯は低平化し、渦巻も巻き切らず内部に縄文を伴う円形区画が生成されるやや後出な一群である。43は渦巻を持つ口縁部文様帯を持たないもの、44は突起を持つもの、45は口縁部に相互刺突文列を持つものである。

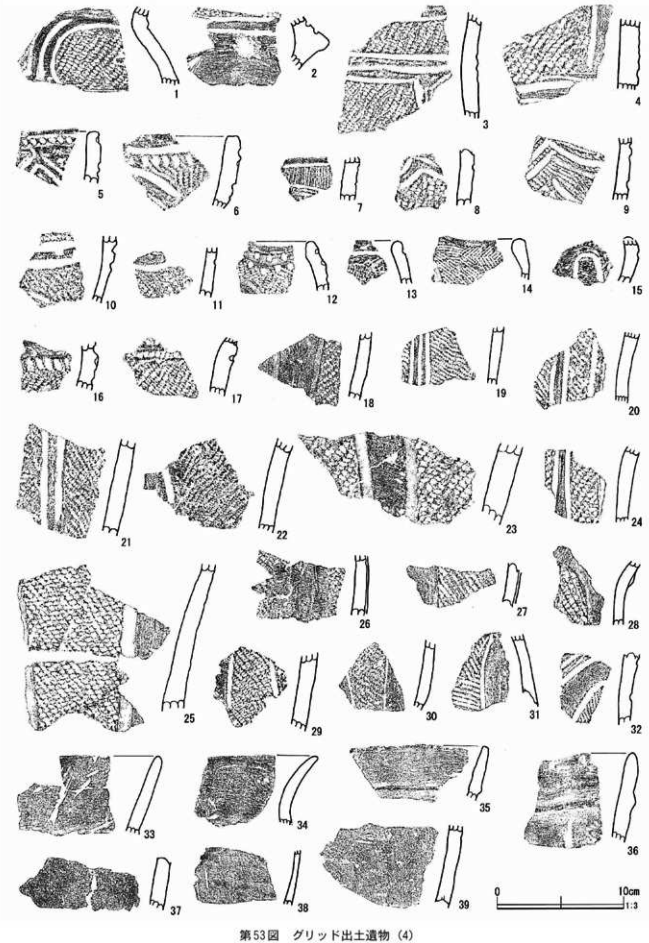
第53図1・2は浅鉢形土器であろう。前者は無文の口縁部が立ち上がるタイプで、両耳壺の可能性もある。後者は算盤玉状に屈曲するタイプであろう。3・4は縦横に沈線文帯や磨消文帯が施される胴部資料である。5～11は連弧文系の一群である。5・6は刺突列を伴う口縁部で連弧文の上部を窺うことができる。7は条線文地文のもので、磨消文帯による波状の連弧文が施されるようである。12～15は内湾傾向のある口縁部資料で、「∩」状沈線の引かれる一群である。16・17は刺突文列の見られる胴部資料である。18～32は沈線や微隆帯で画された磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する胴部資料である。28では括れを持ち胴部上半と下半に分かれるようである。33～39は無文の資料である。34は大きく外反する口縁部、35・36は横走隆帯を伴う口縁部である。

第54図1～5は縦位の集合沈線を地文とする胴部資料である。このうち1～4は曽利式に該当するものであり、2・3では鎖状隆帯が垂下する。6～12は加曽利Ｅ式土器の底部資料を一括した。垂下する沈線や磨消文帯が観察される。推定底径は6が8㎝、7が10㎝、9が9㎝を測る。13・14は後期称名寺式に該当すると思われるものである。前者は沈線で縁どられた横走する縄文帯が観察される口縁部資料、後者はアルファベット状となる磨消文帯が看取される胴部資料である。15～19は後期堀之内式に該当するものである。15は口縁部に環状浮文が付される緩波状縁の土器である。16・17は口縁部に1条の沈線を引くもので、後者は右下がりの沈線帯とこれに接する弧状の沈線帯が見られる。18は口縁内面に凹線を持つ薄手の土器で、口縁外面に横走する鎖状隆帯が付される。19は沈線で区画された縄文帯で菱形や三角形などの幾何学模様を描出するタイプのものである。20～22は晩期安行式Ⅲａ式に該当するものである。20は口縁部に刻みを持つ丈の高い貼瘤、胴部には双刺瘤を持つ平縁深鉢、21は帯縄文の口縁下の磨消文帯に三叉文の末端が看取されるもの、22はレンズ状となる磨消文帯が看取されるものである。23～29は縄文後期以降のものと思われる底部資料を一括した。いずれも無文で比較的よく撫でられている。推定径は23で7㎝、24で7.5㎝、27が8㎝、28が7.5㎝、29が11㎝である。

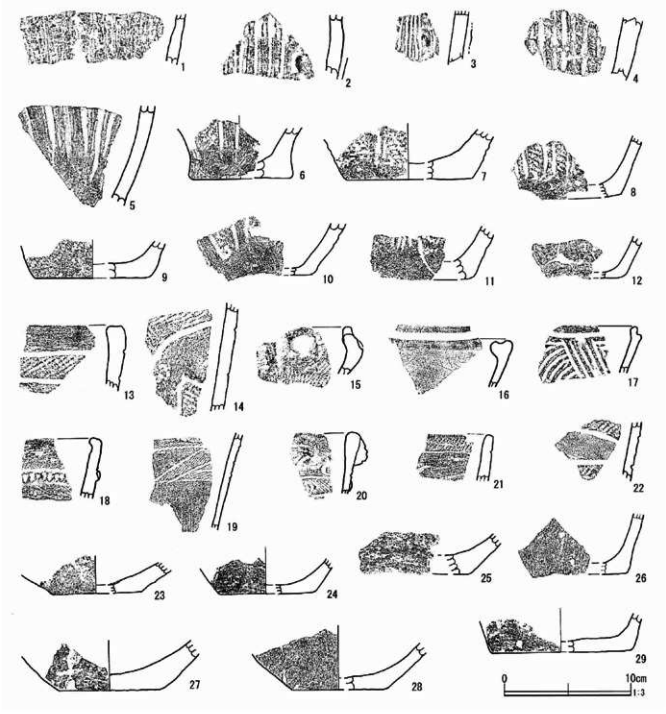
第55図は調査区出土の陶磁器、ガラス製品などを一括したものである。1～3は常滑焼の擂鉢の口縁部資料である。4・5は瀬戸美濃産陶器の胴部資料である。後者は自然釉のかかる壺型となる資料であろう。6は常滑焼の甕の肩部資料である。7・8はホウロクである。10は磁器製の猪口、11は壺型陶器の胴部、12は瀬戸美濃産口折皿で、口径20.8㎝、器高5.2㎝を測る。灰釉は施され見込みには目跡と思われる径2㎝



第52図　グリッド出土遺物（3）



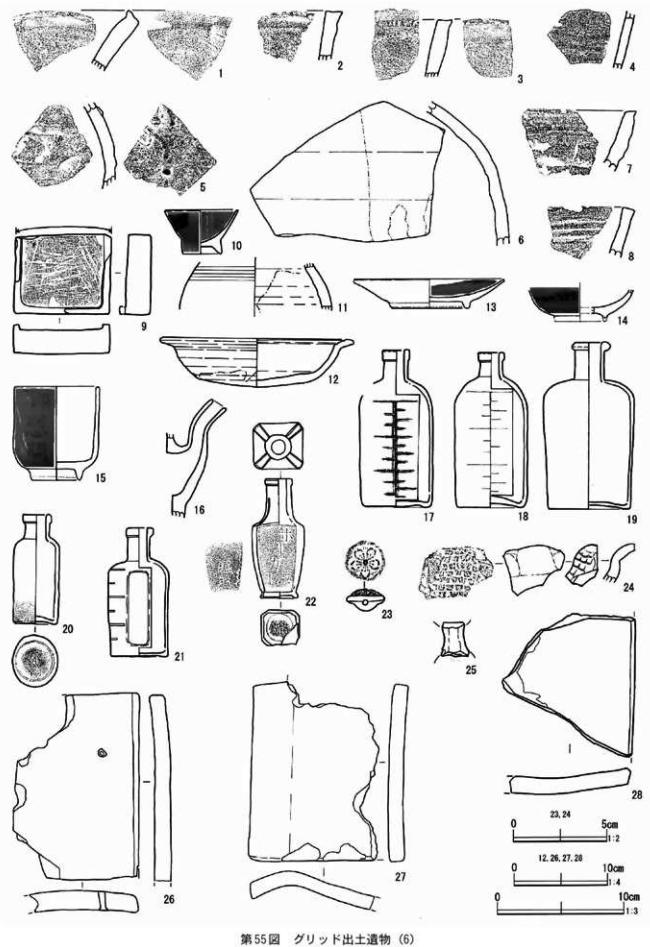
第53図　グリッド出土遺物（4）



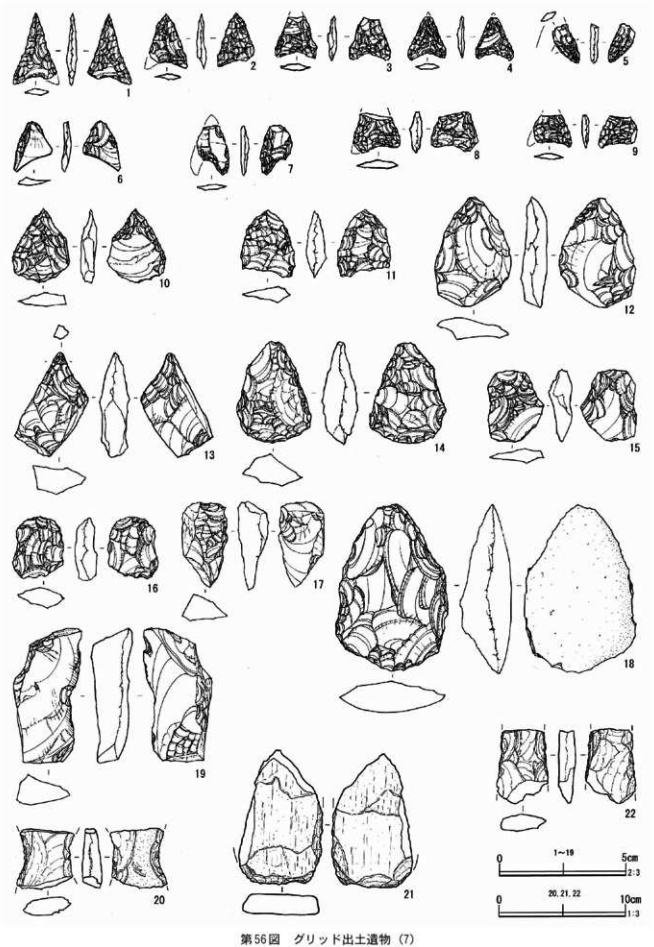
第54図　グリッド出土遺物（5）

ほどの痕跡が残される。13は磁器小皿で口径12cmを測る。14は磁器小碗である。15は湯呑み、16は水瓶の注口部である。17～22はガラス製品で、17～21は薬瓶、22は「ホーカー液」と陽刻される小瓶である。「ホーカー液」は堀越二八堂が制作していた「白色剤」であるといい、化粧水の一種であると思われる。

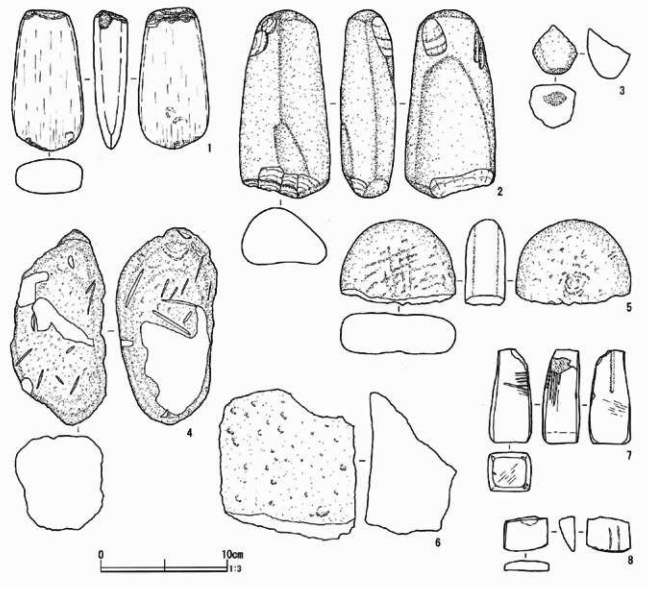
土製品　9は比較的軟質の陶器製の硯を転用した砥石である。23は陶製の学生服のボタンである。桜の模様が描かれる。24は陶製の人形の一部と思われる。うろこ状の模様が描かれる。25は面取りのある棒状の陶器である。上下を欠損するため詳細は不明である。第49図25はブロック状の陶製品である。第1号瓦窯に付随する窯道具の一部であろうか。



第55図　グリッド出土遺物（6）



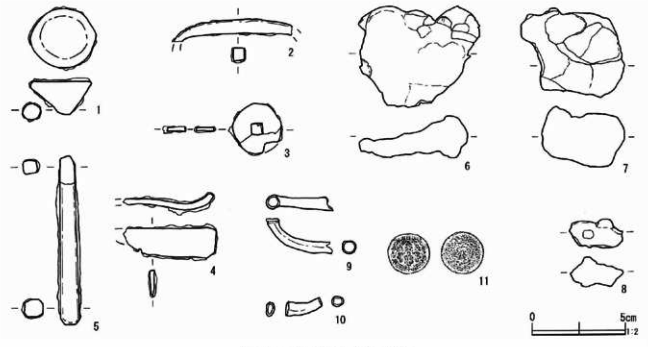
第56図　グリッド出土遺物（7）



第57図　グリッド出土遺物（8）

瓦　26～28は平瓦である。第1号瓦窯に付随するものと思われる。26では焼成前穿孔の小孔が穿たれる。

石器　第56図1～11は石鏃あるいは石鏃の未製品である。1は右脚端を欠くものの整った凹基無茎石鏃である。両側縁からの調整加工も規則的で丁寧である。2は左脚端を欠く凹基無茎石鏃である。薄く仕上げられる。両側縁の調整加工は不規則ながら丁寧なものである。3は先端部を欠く凹基無茎石鏃である。正面左側縁の調整加工は不十分であるいは制作途上での欠損品であるかもしれない。4は先端部をわずかに欠く。薄く仕上げられているが、裏面中央には素材剥片の主剥離と思われる大きな剥離面が残される。5は大型で、基部の抉り込みの深い石鏃の脚部残欠である。非常に丁寧な押圧剥離で作られる。6は剥片素材の石鏃未製品と思われる。正面に素材の主剥離を大きく残す。7は剥片素材の石鏃で、先端部と左脚部を欠く。表裏に素材剥片の主剥離を残す。8は抉りの浅い凹基無茎石鏃である。器体中程から先端部を欠く。脚部のバランスもあまり良くない。9は正三角形に近い形状の凹基無茎石鏃で、先端部と左脚端を欠く。10・11は未製品である。12は2次加工剥片である。厚みも厚く器長も長いが、大型石鏃のブランクの可能



第58図　第5地点出土金属製品

性もある。13は石錐である。14は掻器である。両側縁に粗いが丁寧な加工を施し、刃部は円刃に整形している。15～17は2次加工剥片である。18は箆状石器である。黒色緻密安山岩の転石を素材とし、裏面には礫表皮を残す。成形加工及び調整加工は裏面からの加撃によるもので、丁寧な階段状剥離ののち、細かな調整加工が施される。19は使用痕剥片である。横長の不整形剥片を素材とするもので正面右側縁に細かな刃こぼれが観察される。20～22は打製石斧である。20は分銅形を呈するが、基部刃部とも欠損する。21は緑泥片岩製のもので左側縁から基部を欠く。22は撥形のもので基部及び刃部を欠く。

第57図1は磨製石斧である。定角式で、基部は欠損後敲打再生したものと思われる。2は敲石である。3は小型の敲石で、敲打部残欠である。4は軽石製品である。使用によると思われるスリット状の傷が多数観察される。5は石鋸状に整形された磨石で、約半分ほどの残存率である。6は石皿残欠、7・8は砥石である。

金属製品　第58図には第5地点から出土した金属製品を一括して掲載した。1～5が鉄製品、6～8が鉄滓、9～11は銅製品である。1は第16号土坑から出土した鋳鉄製のベーゴマである。高さ1.8㎝、最大径3.4㎝、重量38.7g を測る。2は第25号土坑から出土した棒状鉄製品で鎹の可能性も考えられる。残存長6.2㎝、最大幅0.7㎝、最大厚0.6㎝、重量15.3g を測る。3は第4号溝跡から出土した鉄銭である。2片に割れ、下部を欠損する。重量3.3g を測る。4はD2グリッドのピット1から出土した刃物で鉄鎌の刃部と考えられる。側面基部が湾曲する。残存長4.9㎝、最大幅1.7㎝、最大厚0.3㎝、重量7.2g を測る。5は表土から出土した棒状鉄製品で工具の一種の可能性がある。重量感がある。全長8.9㎝、最大幅1.0㎝、最大厚1.0㎝、重量37.8g を測る。6は第59号土坑から出土した鍛錬鍛冶滓で全長5.2㎝、最大幅6.3㎝、最大厚2.2㎝、重量70.4g を測る。磁着度は3である。7は第6号溝跡から出土した鍛錬鍛冶滓で全長4.3㎝、最大幅5.0㎝、最大厚3.2㎝、重量101.7g を測る。磁着度は3である。8は表土から出土した炉内滓で全長1.5㎝、最大幅2.8㎝、

最大厚1.6㎝、重量2.8gを測る。磁着度は1である。9は煙管の雁首である。残存長3.5㎝、火皿径0.7㎝、羅宇径0.6㎝、重量2.2gを測る。10は煙管の吸口である。残存長2.0㎝、羅宇径0.7㎝、吸口径0.6㎝、重量2.2gを測る。11は桐一銭銅貨である。「大正十三年」が読める。

第10表　グリッド出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重さ(g)	備考
56	1	石鏃	チャート	2.9	(1.7)	0.4	(1.1)	調査区
56	2	石鏃	チャート	2.2	1.4	0.3	0.8	E5
56	3	石鏃	チャート	(1.3)	1.6	0.3	(0.7)	D1
56	4	石鏃	チャート	(1.7)	1.5	0.3	(0.5)	D1
56	5	石鏃脚部	黒曜石	(1.5)	(0.8)	0.3	(0.4)	E2
56	6	石鏃未成品	チャート	2.0	1.4	0.3	0.7	E1
56	7	石鏃未成品	黒曜石	(2.0)	(1.2)	0.3	(0.5)	D3
56	8	石鏃	チャート	(1.6)	(1.9)	0.5	(1.3)	C6
56	9	石鏃	チャート	(1.3)	(1.4)	0.3	(0.5)	D2　P89
56	10	石鏃未成品	チャート	2.9	2.3	0.6	4.0	E3
56	11	石鏃未成品	黒色緻密安山岩	2.7	2.1	0.7	3.8	C6
56	12	2次加工剥片	ホルンフェルス	4.4	3.0	1.0	11.6	調査区
56	13	石錐	チャート	4.2	2.3	1.2	10.4	調査区
56	14	掻器	赤チャート	4.0	3.0	1.4	11.9	D3　P20
56	15	2次加工剥片	チャート	2.8	2.1	0.9	4.6	調査区
56	16	2次加工剥片	チャート	2.5	2.0	0.9	4.3	調査区
56	17	2次加工剥片	チャート	3.5	1.8	1.2	6.1	C5
56	18	筒状石器	黒色緻密安山岩	6.7	4.3	2.1	54.7	調査区
56	19	使用痕剥片	チャート	5.4	2.6	1.5	17.2	試掘
56	20	分銅形打製石斧	ホルンフェルス	(4.8)	3.7	1.4	(44.0)	調査区
56	21	打製石斧	緑泥片岩	(10.7)	(6.0)	1.6	(188.3)	調査区
56	22	撥形打製石斧	ホルンフェルス	(5.9)	3.5	1.4	(38.9)	調査区
57	1	磨製石斧	緑色岩	11.2	5.5	2.6	320.0	E6
57	2	敲石	硬砂岩	(15.0)	7.1	4.5	(698.0)	E6
57	3	敲石	硬砂岩	(3.9)	(4.5)	(3.4)	(46.3)	E3 P57
57	4	不明	安山岩	15.4	7.6	7.4	502.0	調査区
57	5	磨石	安山岩	(6.7)	9.2	3.3	(275.0)	調査区
57	6	石皿残欠	安山岩	(10.7)	(11.2)	(6.9)	(1,150.0)	E2　P70
57	7	砥石	砂岩	(7.4)	3.1	2.9	(118.8)	調査区
57	8	砥石	砂岩	2.6	3.4	1.1	13.4	調査区

3　第11地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第6号住居跡（第60・61図）

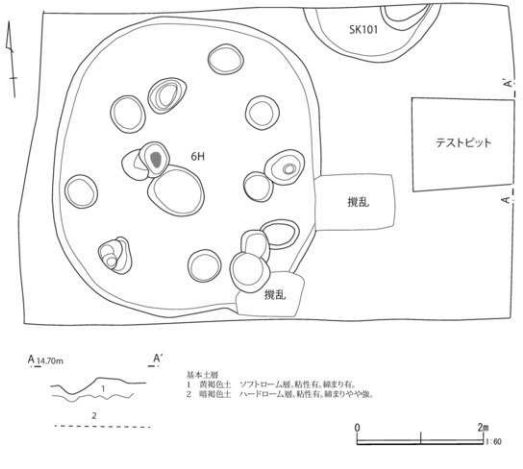
調査区中央やや西寄りに位置し、一部を撹乱で切られる。平面形は長径約4.7m、短径約4.2mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。住居跡に伴うピットは15基検出した。

炉跡は住居跡の中央やや北寄りで検出した。炉の平面形は長径約0.6m、短径約0.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は北寄りが浅く窪む。炉跡の中央に直径約0.3mの焼土の広がりが認められた。

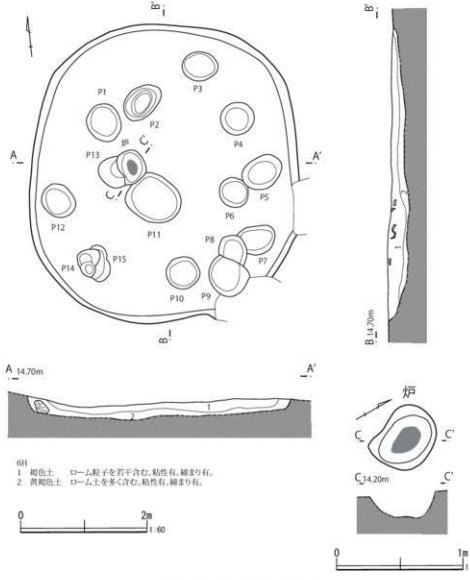
住居跡内で万遍なく縄文土器の大破片が出土しており、接合して全形を窺い知れるものが多かった。

出土遺物（第62～66図）

第62図1～4は表裏に条痕文の観察される早期末葉の一群である。1では口唇部に刺突が施されることがわかる。5～13は丈の高いしっかりとした隆帯とこれに沿う沈線とで、口縁部に渦巻文や窓枠状区画文などを連ねる文様帯を形成する一群である。5では口縁部文様帯の下に頸部無文帯が形成されるようである。7は窓枠状の区画内に円形刺突文を充填するもの、8は口唇部につき出るようにヘアピン状の隆帯に



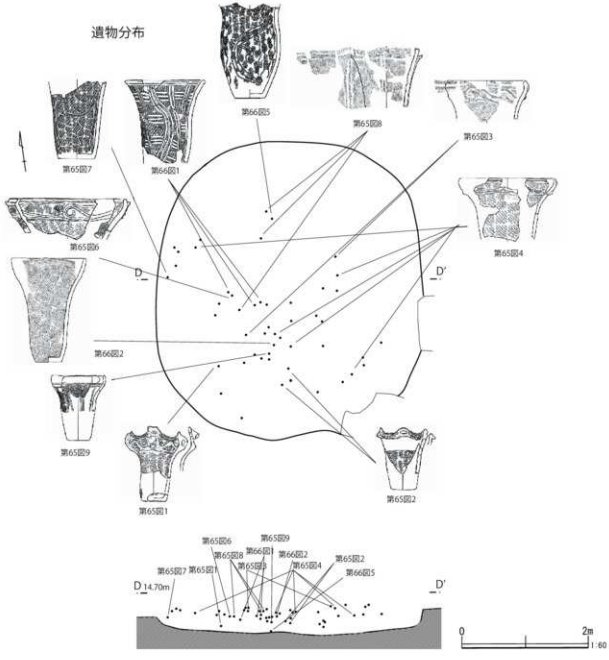
第59図　第11地点全測図



第60図　第6号住居跡（1）

よる突起を付すもの、9は渦巻文の一端が大きく張り出すように成形されたもの、11は地文を撚糸文とするもの、12は屈曲する口縁部に相互刺突文列を配するもの、13は三角形を基調とする窓枠状区画を形成するものである。14～17は口縁部に横走隆帯を付す平縁深鉢である。14は丈の高い隆帯を横走させる無文の資料、15は撚糸文を地文とするもの、16は隆帯上まで単節縄文を施すもの、17は隆帯上に刺突を施すものである。18・22は縄文の施された口縁部資料、19は丈の高い隆帯と沈線による渦巻文の一端が窺える資料である。20・21は口縁部がわずかに開く深鉢形を呈し、渦巻文や枠状区画などの文様帯を持たないものである。前者は口縁部にやや幅の広い無文帯を持ち、無文帯下端を2条の沈線で締め以下に垂下沈線を配するもの、後者は外削状の口唇部に彫りの深い沈線を引き、以下に3条の隆帯を垂下させるものである。23～26・28・31～33は口縁部文様帯下端を隆帯で画すものである。23・25・31～33では以下に頸部無文帯を持つ。27は沈線による渦巻文が観察される胴部資料、29は円形刺突を施す資料である。

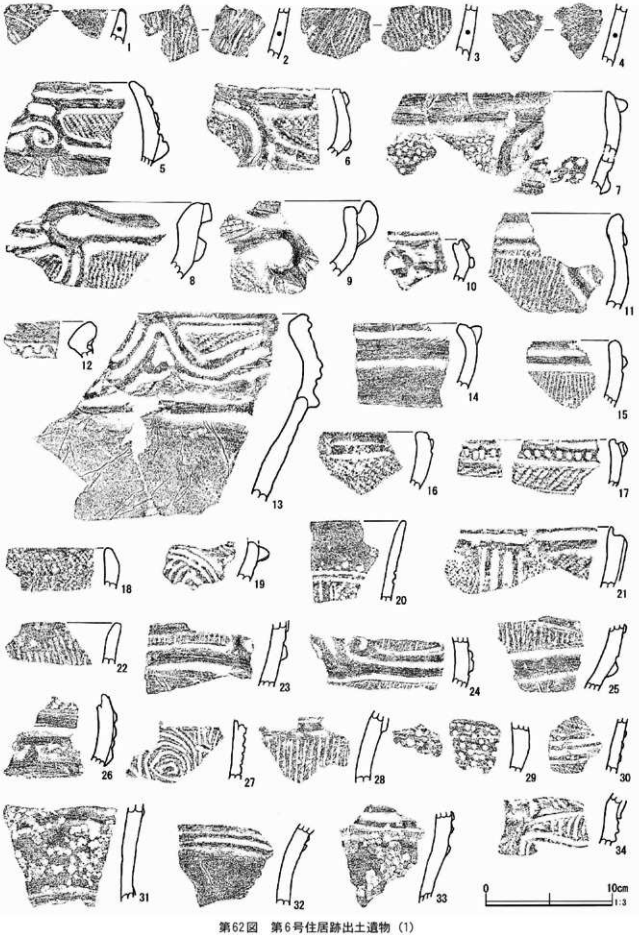
第63図1・2は頸部無文帯と胴部縄文帯との区画を横走する2条の沈線で行うものである。胴部には同様に2条1組の沈線が垂下するようである。3・4は胴部に隆帯が垂下するもの、5・6は蛇行沈線が垂下する



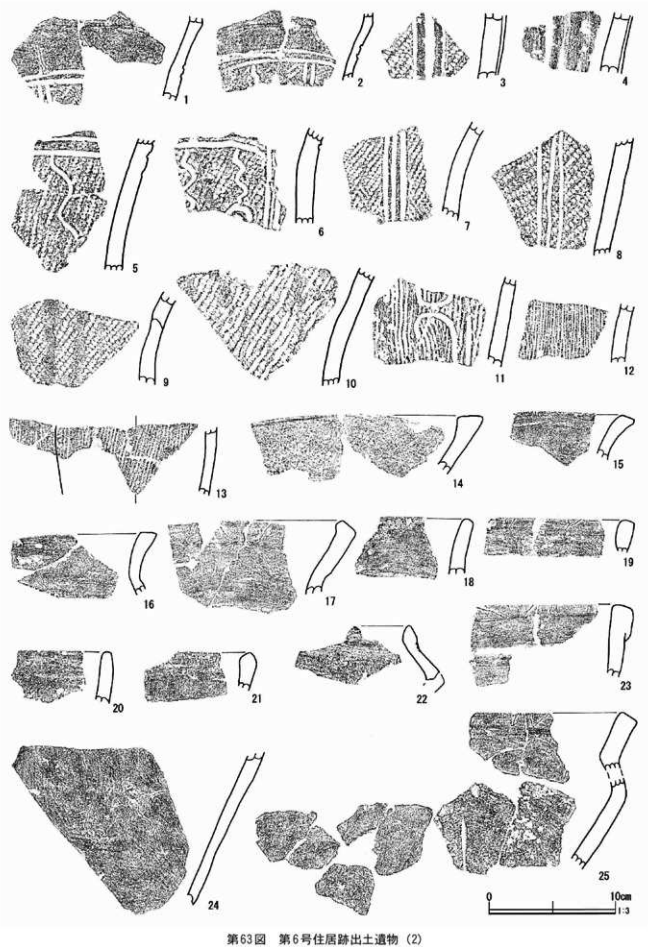
第61図　第6号住居跡（2）

もの、7・8は3本の沈線が垂下するものである。9は指頭によると思われる撫で3条が垂下することがわかる。10は単節縄文が施された胴部資料、11・12は条線文を地文とするもので、前者は蕨手状の沈線が描かれる。13は条線文を地文とする深鉢形土器の胴部資料で、残存部最大径13cmを測る。14～25・第64図1は無文の口縁部資料である。14～17は外反する口縁部を持つ浅鉢形土器であろう。16・17・25では頸部で屈曲するものであることがわかる。18・19～21・23は口縁部が直立するもの、22は「く」の字に内折するもので、口縁部下端に押し引きの刺突文列が見られる。

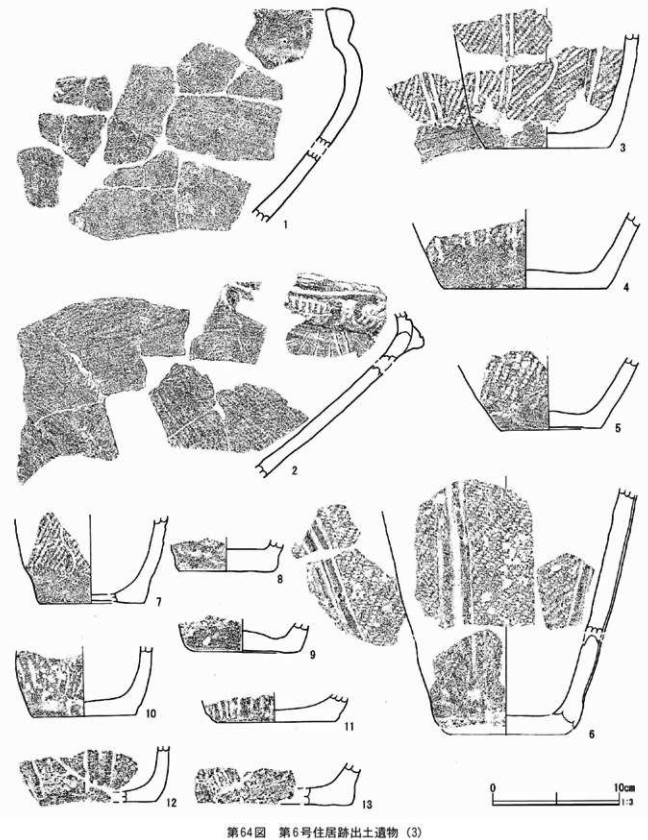
第64図1は外反しながら立ち上がり肩部で内湾、口縁部は逆三角形に整形し外面では外反、内面では内傾する浅鉢形土器である。2も浅鉢形土器である。肩部に長楕円形の隆帯を貼り短沈線を充填する区画文を配するようである。3～13は本址出土の胴下半から底部の資料である。3では単節縄文の地文上に2条1



第62図　第6号住居跡出土遺物（1）



第63図　第6号住居跡出土遺物（2）

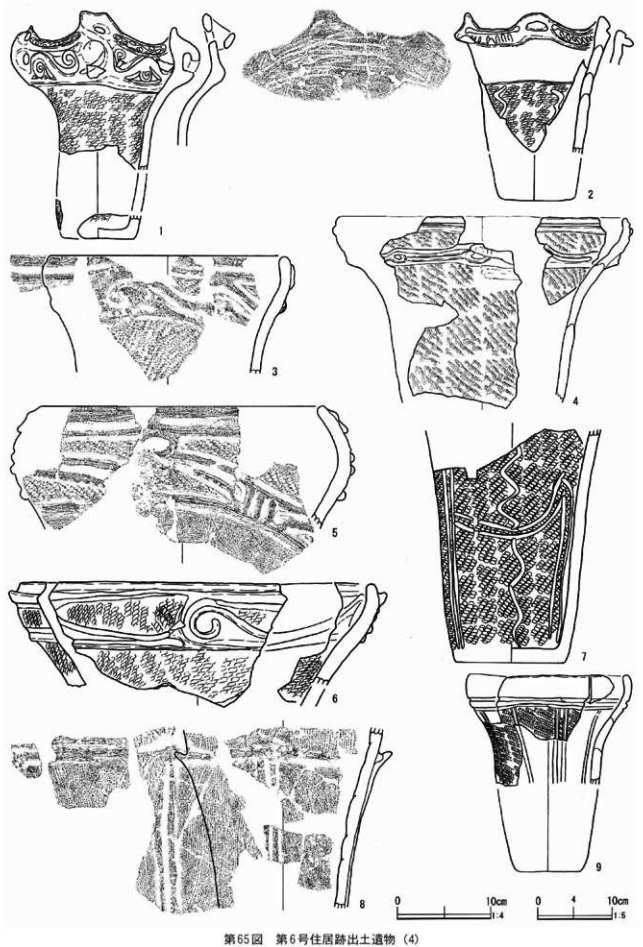


第64図　第6号住居跡出土遺物（3）

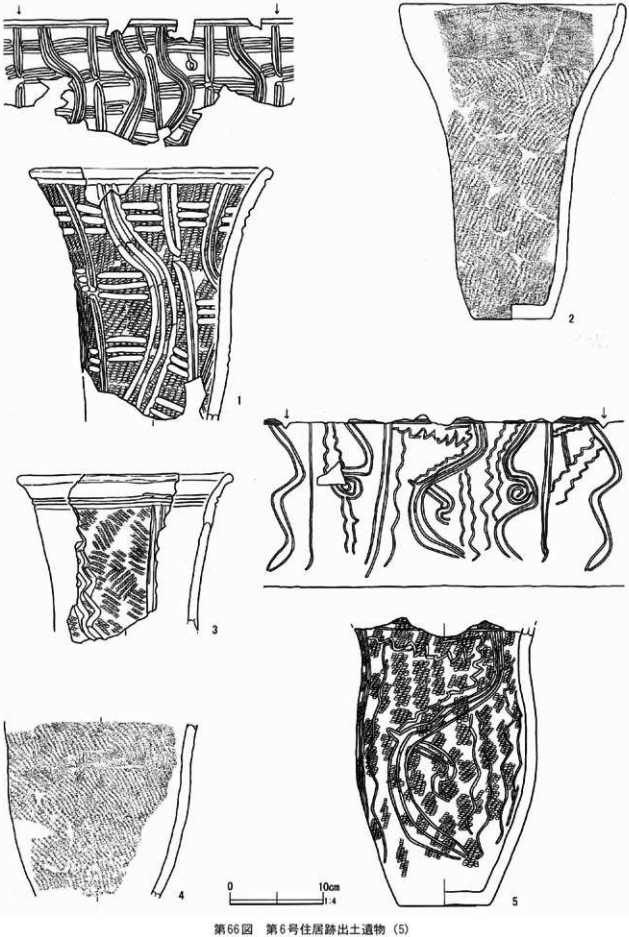
組の沈線と蛇行沈線が垂下するものである。底面周囲は横位の篦削りが施される。底径10㎝を測る。4は太目の撚糸地文、5は単節縄文を地文とする。底径はそれぞれ13㎝、8㎝である。6は胴部中位から底部にかけての資料で、単節縄文の地文上に沈線で縁どられた2条の隆帯が垂下するものである。底面を欠くが、推定底径は10㎝、残存高は20㎝を測る。7は縄文地文上に蛇行沈線が垂下することがわかる。底部周囲は細く絞られたように篦削りされる。8・9は無文、10～12は沈線が垂下するようである。13は縄文が施されるようである。

第65図1は口縁部に装飾突起を持つキャリパー形深鉢である。突起は4単位で器面を巡り、上からやや外側を向く臼状のもので中央を貫通させている。臼の周囲を巡るように隆帯を斜めに垂下させ、これも橋状把手風に横方向に貫通孔を持ち文様帯下端区画までつないでいる。突起間には相互刺突の施された長楕円区画が配される。口縁部文様帯は三角形を組み合わせる区画を形成し、区画隆帯と連結した渦巻文を配する。口縁部文様帯下端区画以下は単節RL縄文を縦位施文する。頸部無文帯は持たず、胴部に垂下沈線等も配さない。口縁部内面には横位の条痕風の整形痕が顕著に残される。突起を含めた最大径は20.0㎝、器高24.0㎝を測る。2は口縁部に中央の窪む小突起を4単位持つ深鉢形土器で、突起間を沈線で区画された長楕円区画でつなぐ。長楕円区画の内部は縦位の短沈線が充填される。この文様帯は、鍔状に外側へ張り出す。頸部には無文帯が形成され、上端を横走沈線で画された胴部縄文帯には、単節RL縄文を縦位回転させ、その上から棒状施文具による蛇行沈線が引かれる。肉厚で輪積痕が顕著である。口縁部最大径は16.5㎝、推定高20㎝を測る。3は口縁部に横S字状隆帯を描くキャリパー形深鉢である。渦の巻き方は強くない。口縁部区画内、胴部ともに単節RL縄文を縦位に施文する。推定口径26.5㎝、残存高14㎝を測る。4は口縁部に長楕円横位区画を設ける平縁のキャリパー形深鉢である。おそらく楕円区画同士の接点には渦巻文が配置されたものと思われるが失われている。文様帯下端区画の隆帯も要所で小さな渦を巻く様子が捉えられる。口縁部区画内、胴部縄文帯には無節縄文が施される。推定口径40㎝、残存高25.5㎝を測る。5は口縁部最大径36㎝ほどと推定される平縁キャリパー形深鉢の口縁部付近の資料である。口縁部文様帯には隆帯によるしっかりと巻かれた渦巻とそこから派生し斜行する2条1組の隆帯が観察される。口縁部文様帯の下端も丈の高い隆帯で締め、以下頸部無文帯を形成するようである。6は推定口径40㎝、残存高13㎝を測る平縁のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。鍔状にせり出す丈の高い隆帯を口縁直下に巡らせ口縁部文様帯の上端区画としている。区画内には、隆帯による渦巻文が形成され、この末端が文様帯内を斜めに区分して隣接する渦巻と合流するようである。地文は、区画内及び頸部以下も単節RL縄文で、縦位から斜位に回転させる。7は残存部最大径19㎝、残存高25㎝、底径11.5㎝を測る深鉢形土器の胴部から底部にかけての資料である。単節RL縄文を縦位に施文し、この上から2条1組の沈線や蛇行沈線を垂下させる。また、胴部中位で2条1組の沈線を弧状に横位展開させ、そこから派生させた垂下沈線につなげている。8は条線文を地文とする深鉢形土器の頸部から胴下半部にかけての資料である。頸部に丈の高い隆帯を巡らせ、4単位で鍔状に突出させるようである。鍔状突出部の最大径は23㎝、残存高20㎝ほどを測る。内面には輪積痕を顕著に残す。9は口縁部に無文帯を形成し胴部縄文帯上端区画を2条1組の沈線で行う深鉢形土器である。胴部には2条1組の沈線が数単位垂下するようである。推定口径は17.5㎝、残存高11.5㎝を測る。

第66図1は口縁部に1条太めの沈線を引き、以下に単節RL縄文を従位施文する地文を施した上から太めの沈線2条1組の垂下沈線と3条1組とした蛇行沈線を交互に施すものである。口縁部文様帯を省略する



第65図　第6号住居跡出土遺物（4）



第66図　第6号住居跡出土遺物（5）

タイプの深鉢形土器である。口縁部直下から施された垂下沈線は、底部まで一貫するものではなく、胴中位で一度切られることがわかるが、正面図に示した位置では区切られる位置が他の3本より口縁部寄りであることがわかる。また、これらの垂下する沈線帯は、3条1組の単沈線を用いて横位に連結される。展開図を見るとこの横位の連結帯から,ぶら下がるように環状のモチーフが施される部分があることもわかる。口径は26cm、残存高は27cmを測る。2は口縁部の開く平縁深鉢である。口縁部外縁には横位の撫で整形が施された幅の広い無文帯が置かれる。本来であれば、渦巻文や窓枠状文で装飾される口縁部文様帯、または頸部無文帯に相当する部分である。口縁部無文帯の下位には単節縄文が施される。無文帯との区画描線は設けられないが、無文帯直下は縄文を2指幅で2帯横位施文し、その下部から斜位に近い従位施文としている。口径24cm、器高33.5cm、底径8cmを測る。3は口縁部が外反する平縁深鉢である。口唇外縁を肥厚させ玉縁状に成形する。幅の狭い無文帯を置きその下端を2条の沈線で画す。胴部は単節RL縄文を用いて施文するが、施文方向は一定ではない。地文上に2ないし3条1組とする垂下沈線及び蛇行沈線を施すことがわかる。本資料も口縁部文様帯を省略するタイプと受け止められる。推定口径は23cm、残存高は18cmである。4は単節RL縄文を施す胴部資料である。胴部上位では横位施文、底部に移行する胴下位では従位施文としている。残存部最大径20.5cm、残存高18.5cmを測る。5は単節RL縄文従位施文した地文上に、棒状施文具を用いた沈線で複雑な文様が描出される深鉢型土器の胴部資料である。胴部文様帯の上端区画線以下が残される。残存部の遺存状態が比較的良いことに反し、本址出土資料中に同一個体とみられる口縁部資料が全く見いだせなかったことから、あるいは一部欠損した口縁部を除去し、頸部以下だけとして使用した可能性もある。胴部文様帯の施文には、明確な規則性は把握できないが、2条1組で垂下する2単位の沈線間を1単位文様とする2面構造と把握できる。それぞれのパネルに蛇行沈線と連結する渦巻文が配され、加飾する鋸歯状沈線などが配置されるようである。残存部最大径は19cm、残存高は31cmを測る。

(2) 土坑

●第101号土坑（第67図）

調査区北端に位置し、北半部は調査区外である。検出部分のみで長径約2.2m、短径約0.8mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は東寄りに掘り込みが認められる。

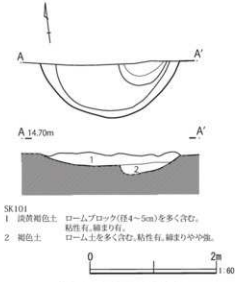
出土遺物（第68図）

土器　第68図1は単節縄文が施された底部資料である。3は単節縄文の施された縄文帯と両側を撫でられた隆帯が観察される胴部資料である。

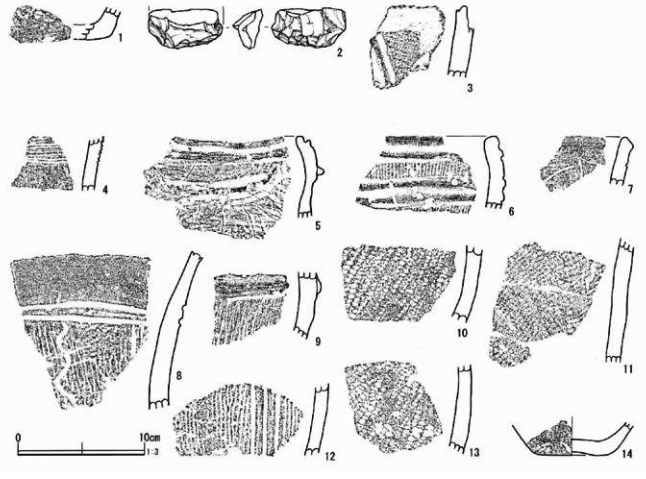
石器　2は打製石斧の刃部残欠である。比較的厚みのある素材を用いたものと思われる。

(3) 調査区出土遺物（第68図）

土器　第68図4は細い半截竹管による平行沈線を重畳させた下に従位の撚糸文を施す資料である。前期諸磯a式期に比定できよう。5は口縁部に弧状隆帯を連ね、連結部に渦巻文を配すると思われるキャリパー形深鉢の口縁部資料である。区画内外に地文は見られない。6は口縁部に太い横走沈線による区画を設け要所に渦巻文を配すると思われる資料である。区画内には従位の撚糸文が充填される。7は口唇部が外削状となる無文平縁の資料である。8はキャリパー形深鉢の頸部無文帯から胴部にかけての資料と思われる。



第67図 第101号土坑

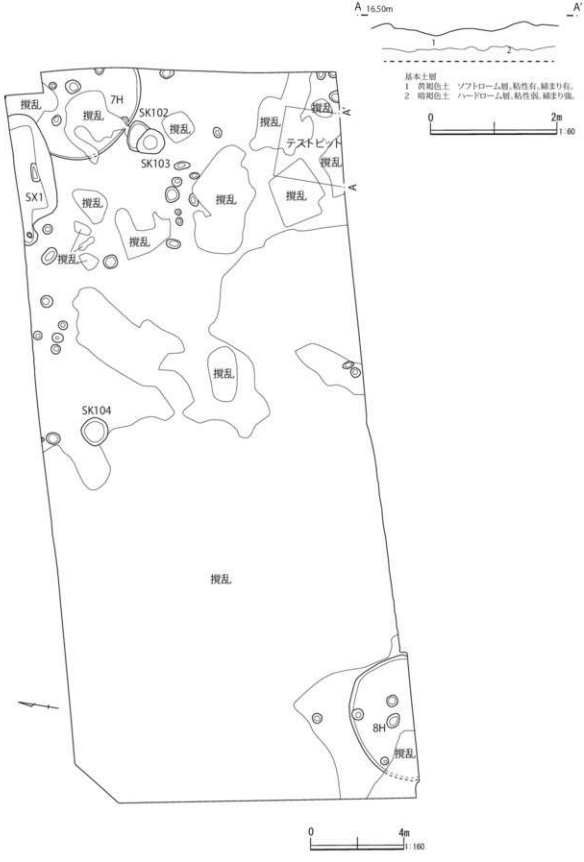


第68図 土坑・調査区出土遺物

胴部文様帯上端を2条の横走沈線で画し、地文に条線文を施した上から2条1組の垂下沈線及び蛇行沈線が施される。9は条線文を地文とする胴部資料で上部に横走隆帯が見られる。10・11・13は単節縄文の施された胴部資料である。12は条線文の地文上に垂下する3本の沈線が見られるものである。14は無文の底部資料で、底面は上げ底となる。底径は6cmほどを測る。

第11表　第11号地点出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
68	2	打製石斧　刃部	ホルンフェルス	(3.2)	5.8	2.1	(35.2)	第101号土坑



第69図 第18地点全測図

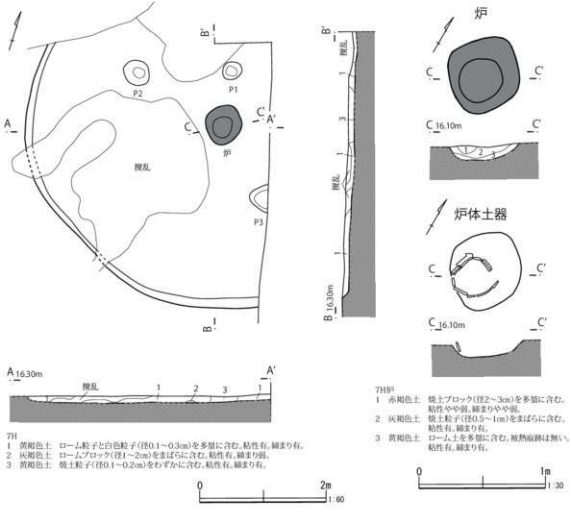
4　第18地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

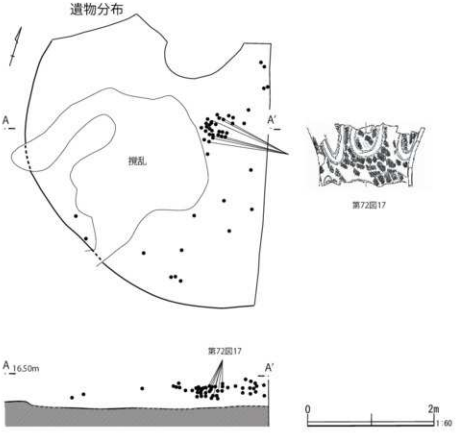
●第7号住居跡（第70・71図）

調査区北東端に位置し、東半部は調査区外である。第1号不明遺構と攪乱に切られる。検出部分のみで長径約4.2m、短径約3.9mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。住居跡に伴うピットは3基検出した。

炉跡と炉体土器を住居跡の中央やや東寄りで検出した。炉跡の平面形は長径約0.6m、短径約0.5mの不整円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.1mを測り、底面は中央が浅く窪む。埋設される炉体土器の直径は約0.3mを測り、口縁部から胴部上半までが認められ、口縁部を上に正置した状態で出土した。炉体土器は炉の底面からは約0.1m浮いた状態で出土した。



第70図　第7号住居跡（1）

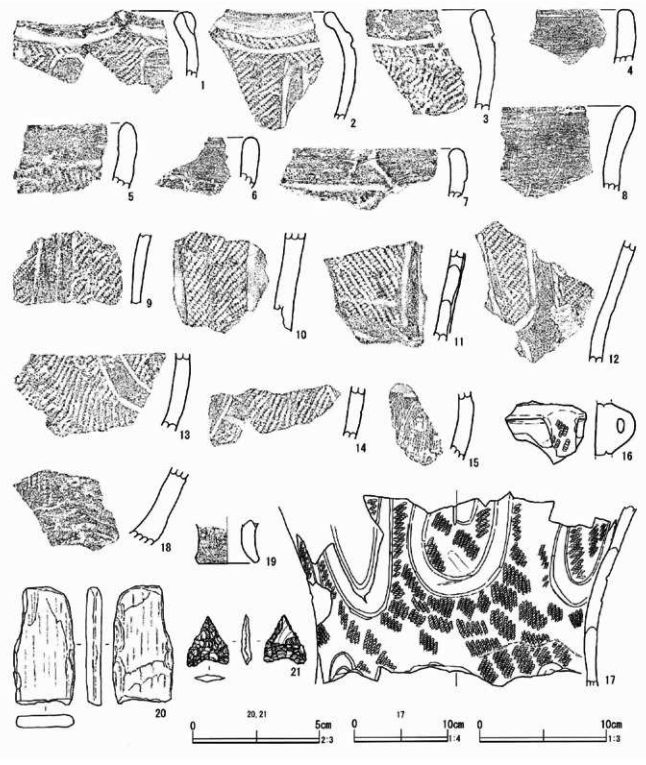


第71図　第7号住居跡（2）

出土遺物（第72図）

土器　第72図1～3は加曾利ＥⅣ式期に伴う波状縁のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。これらはいずれも内湾する口縁部に1条の沈線で画した無文帯を持ち、以下に縄文を配するものである。1・2では「∩」の磨消文帯が施される。また、1では波頂部を外側に突出させるように貼瘤が付される。2では隆帯上にも縄文が施される。4・6・8は無文の口縁部資料、5・7は口縁部無文帯の下端区画に横走沈線を用いるもので5では以下に条線文が施されることがわかる。9～14は単節縄文の施される縄文帯と磨消文帯を看取することのできる胴部資料である。9～11は磨消文帯が2条の沈線に縁どられ垂下するもの、12は「H」状の磨消文帯が形成されるもの、13・14は磨消文帯が曲線を描くものである。15は条線文を地文とするもの、16は小型の橋状把手、18は単節縄文の施される底部付近の資料で、外面に赤色塗彩の痕跡が見られるものである。19は小型の脚台部の資料で底径5.5㎝を測る。17は本址の炉体土器である。単節RL縄文を乱雑に施した上から、括れ上部には磨り消しによって、大型の緩い渦巻文となると思われるモチーフが数単位巡るようである。括れ部の下位にも「∩」状となるような磨消文帯が残されている。残存部最大径は38㎝、残存高は約20㎝を測る。

石器　20は扁平な緑泥片岩で被熱している。下端部を欠くもので性格は不明である。21は凹基無茎石鏃である。裏面上部に素材剥片の主剥離を残すが、両面とも丁寧な押圧剥離で仕上げられている。特に基部の抉りは規則的で丁寧な剥離が行われている。



第72図　第7号住居跡出土遺物

第12表　第7号住居跡出土石器計測表

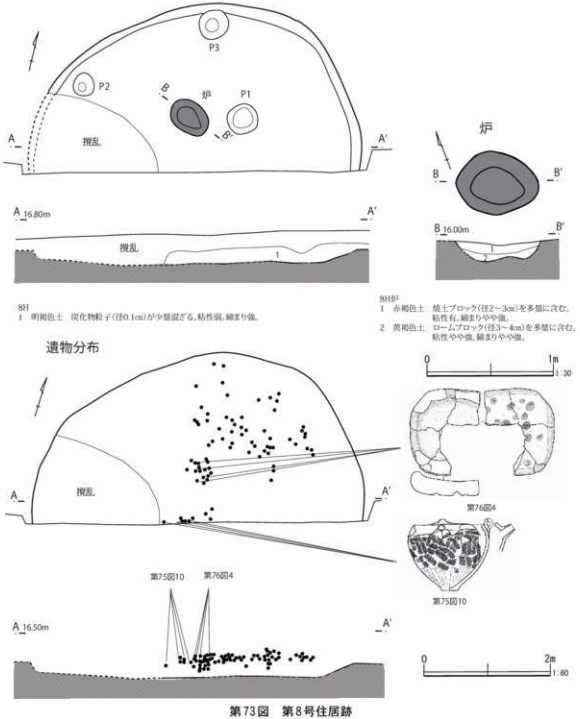
図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
72	20	板状石製品	緑泥片岩	(4.8)	(2.4)	0.6	(10.9)	被熱
72	21	石鏃	黒曜石	2.0	1.7	0.4	0.8	

●第8号住居跡（第73図）

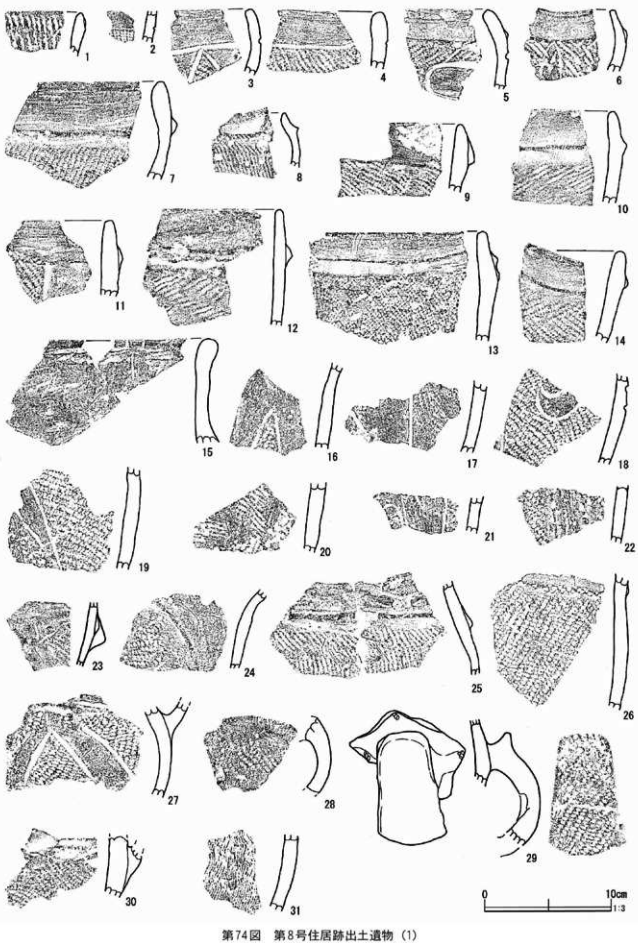
調査区南西端に位置し、南半部は調査区外である。撹乱に切られる。検出部分のみで長径約5.3m、短径約2.7mを測る。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mで、上層は撹乱を受けていた。住居跡に伴うピットは3基検出した。

炉跡を住居跡の中央やや北寄りで検出した。炉跡の平面形は長径約0.7m、短径約0.5mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは約0.2mを測り、底面は西寄りが浅く窪む。

住居跡内では、北寄りで縄文土器片が散在している状況が認められた。



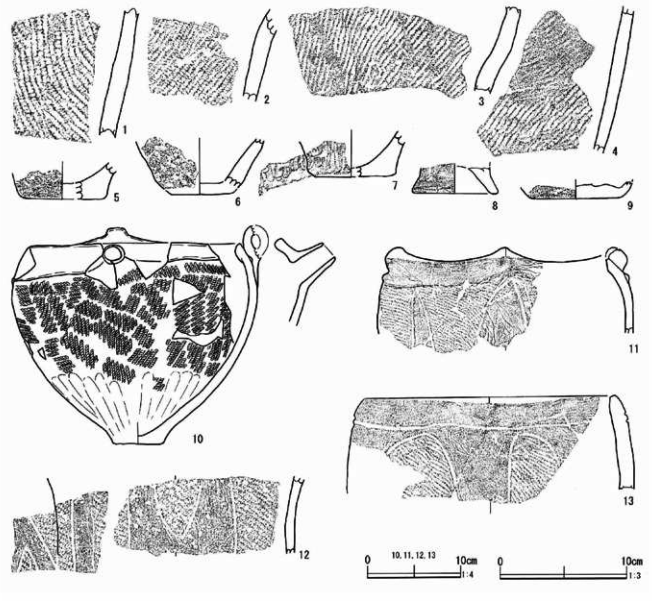
第73図　第8号住居跡



第74図　第8号住居跡出土遺物（1）

出土遺物（第74～76図）

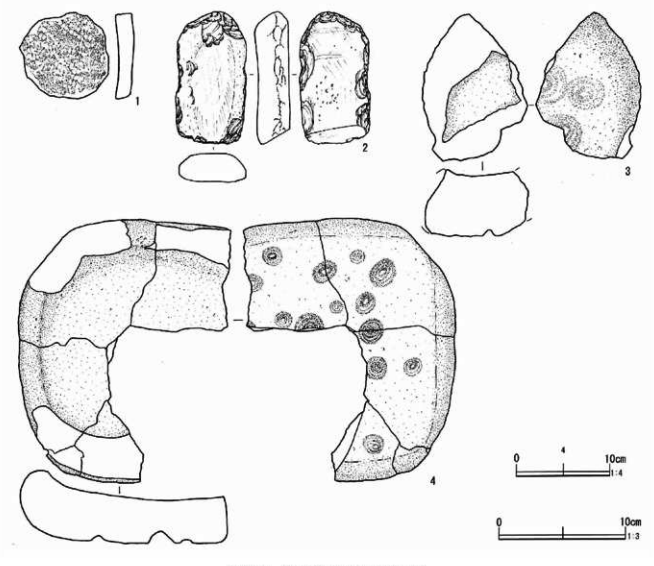
土器　第74図1・2は貝殻腹縁を用いた連続刺突を持つもので、前期浮島式から興津式にあたろうか。3～14は口縁部に数cmの幅の狭い無文帯を持つ口縁部資料である。口縁部無文帯と以下の縄文帯とを沈線で画するものと微隆帯で画するものがある。3や6では縄文帯に貫入するような剣先状の磨消文帯が観察される。5では「⊂」字状の磨消文帯が見られる。11では比較的幅の広い磨消文帯が垂下するようである。15は無文の口縁部資料である。16は丁寧に撫でられた器面に剣先状の縄文帯が施されたもの、17～21は単節縄文の施された器面に剣先状や弧を描く磨消文帯が描出された胴部資料である。22は垂下する磨消文帯を微隆帯で画するもの、23は微隆帯端部に三角形の貼瘤を持つものである。24は楕円区画となる縄文帯を微隆帯で縁どるように画するものである。25・26は無文帯と縄文帯とを横走する微隆帯で画するもので、後者では隆帯上にも縄文が施される。27～30は橋状把手の付される口縁部付近の資料または橋状把手自



第75図　第8号住居跡出土遺物（2）

体である。27では把手の下方に二股に分かれて垂下する磨消文帯が見られる。28・29は単節縄文の施された把手部分、30は橋状把手下端から両側へ延びる微隆帯が観察できる。31は蛇行条線の見られる胴部資料である。

第75図1～4は単節縄文の施された胴部資料である。5～9は本址出土の底部資料である。7は従位の集合沈線が観察されるもの、8は脚台部である。10は注口付きの鉢形土器である。内湾する口縁部無文帯を持ち、下端を微隆帯で閉じる。口縁部無文帯の幅は注口部を挟み左右で異なることがわかる。基本的に平縁であるが、注口部の対局に突起風に橋状把手を配する。胴部はなだらかな曲線を描く球胴を呈し、単節RL縄文が施されるが、施文方向は定まらない。胴下半から底部にかけては従位の箆削りが施される。胴部はやや楕円形をなすが、最大径は26㎝ほど、突起を含めた器高は22.5㎝を測る。底径は5.5㎝である。11は緩波状縁を呈するキャリパー形深鉢の口縁部資料である。口縁部に幅の狭い無文帯を設け、下端を微隆帯で区画する。波頂部には微隆帯から続く摘まみ上げたような突起を配する。波頂部及び波底部には剣先状の磨消文帯が配されることから、胴部上半には大振幅の鋸歯文が描かれるものと思われる。地文は、



第76図　第8号住居跡出土遺物（3）

単節 RL 縄文の従位施文である。推定最大径は27.5㎝、残存高10㎝である。12は「H」状磨消の見られる胴部資料である。同一個体と思われる別破片では鋸歯が入り組む部分もあるようである。地文は単節 RL 縄文従位施文である。推定最大径は27㎝、残存高は8㎝である。13は口縁部に幅の狭い無文帯を形成する内湾傾向を示す平縁の深鉢型土器である。口縁部無文帯の下部に展開するのは、無文地に施された「∩」状の縄文帯である。下半を欠くためこのまま垂下するのか、大振幅の波状または長楕円区画となるのかは不明である。充填される縄文は単節 RL 縄文である。推定最大径は30.5㎝、残存高は10㎝である。

土製品　第76図1は土製円盤である。単節縄文を施す胴部破片を素材とし、周囲を丁寧に打ち欠いて円形に整えている。

石器　2は砥石と思われる。正面、裏面及び裏面下端の小口部分を使用面とする。使用は進んでおり、下端部はかなり丹念に使用されている。両側縁及び基部には剥離痕が見られるが石斧とは思われない。3・4は石皿残欠である。4の最も大きな破片は本址の炉跡出土の資料で、石囲炉の炉枠として用いられたものと思われるが、他の破片は住居跡内に散在していたものが接合し、その結果隅丸長方形の、底の比較的平坦な石皿であることがわかった事例である。裏面には凹みが多数穿たれるようである。

第13表　第8号住居跡出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
76	2	砥石？	石材不詳	10.5	5.5	2.5	229.0	
76	3	石皿	安山岩	(11.4)	(8.2)	4.7	(460.0)	
76	4	石皿	安山岩	(22.0)	28.1	4.9	(3,820.0)	

(2) 土坑

●第102号土坑（第77図）

調査区北東に位置し、第103号土坑に切られる。残存部で長径約1.2m、短径約0.8mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は中央が浅く窪む。

出土遺物（第79図）

土器　第79図1は単節縄文の施された胴部破片、2は高台風の脚を持つ底部資料である。脚部底径7.5㎝を測る。

●第103号土坑（第77図）

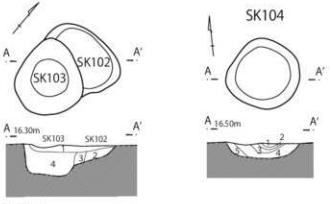
調査区北東に位置し、第102号土坑を切る。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.5mを測り、底面は東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第79図）

土器　第79図3は外反傾向を示す無文の口縁部資料である。4は単節縄文の施された胴部資料、5は従位の成形痕を残す無文の胴部資料、6は外反傾向の強い無文の底部資料である。

●第104号土坑（第77図）

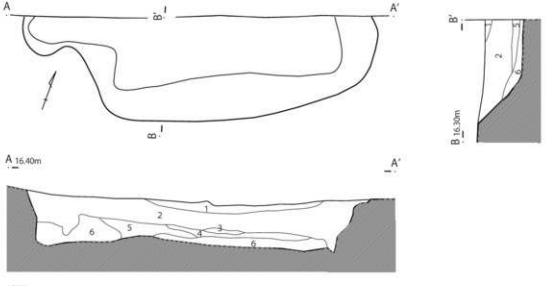
調査区中央北寄りに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。



SK102・103
1　暗褐色土　　ローム粒子と炭化物粒子(径0.2～0.5cm)をまばらに含む,粘性有,締まりやや弱.
2　黄褐色土　　ローム土を多量に含む,粘性有,締まり有.
3　茶褐色土　　ロームブロック(径1～2cm)をまばらに含む,粘性有,締まり有.
4　茶褐色土　　ロームブロック(径3～4cm)を多量に含む,粘性有,締まりやや強.
SK104
1　黒褐色土　　焼土ブロック(径2～3cm)をまばらに含む,粘性弱,締まり有.
2　赤褐色土　　焼土,粘性弱,締まり強.
3　赤茶褐色土　焼土とローム土の漸移層,炭化物粒子をまばらに含む,粘性弱,締まり有.
4　黄褐色土　　ローム土を多量に含む,焼土粒子を少量含む,粘性有,締まりやや有.
5　黄褐色土　　ローム土を多量に含む,粘性有,締まり強.

0　2m
1:60

第77図　第102～104号土坑



SX1
1　茶褐色土　炭化物ブロックと焼土ブロックをまばらに含む,粘性弱,締まり強.
2　茶褐色土　炭入物と炭化物粒子(径0.5cm)を少量含む,客土,粘性弱,締まり弱.
3　黒褐色土　炭化物ブロック(径1～3cm)をまばらに含む,粘性弱,締まり有.
4　茶褐色土　炭化物粒子をまばらに含む,粘性弱,締まり弱.
5　明褐色土　炭化物粒子(径0.1～0.3cm)とローム粒子を微量に含む,粘性弱,締まり有.
6　茶褐色土　ローム粒子をまばらに含む,粘性弱,締まり弱.

0　2m
1:60

第78図　第1号不明遺構

出土遺物（第79図）

土器　第79図7は無文の底部資料である。

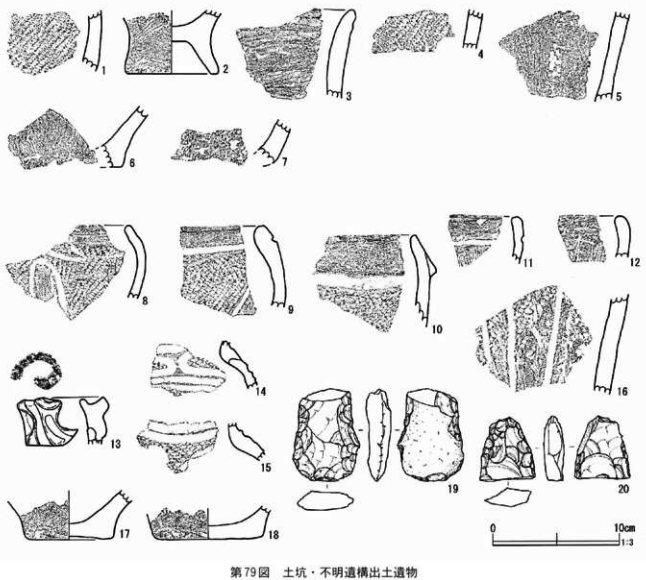
(3) 不明遺構

●第1号不明遺構（第78図）

調査区北東端に位置し、北半部は調査区外である。第7号住居跡を切る。検出部分のみで長径約5.5m、短径約1.6mを測る。確認面から床面までの深さは約0.8mを測り、東西両端が浅く窪む。西側に張り出し部をもち、近世以降の地下式坑に似たような形状であるが、北半部の状況も不明確であるため、不明遺構とした。

出土遺物（第79図）

土器　第79図8～12は本址出土の口縁部資料である。8は口縁部無文帯下端を微隆帯で画し、微隆帯上まで縄文を施すものである。微隆帯下端に1条の沈線が引かれるとともに、「∩」条の沈線が観察される。9



第79図　土坑・不明遺構出土遺物

は幅の狭い口縁部無文帯下端を1条の沈線で画す内湾平縁深鉢である。単節縄文の地文上に斜行する磨消文帯が観察される。10は口縁部無文帯下端を断面三角形の微隆帯で画すもので、平縁深鉢となる。区画隆帯下は単節縄文を施す。11は口縁部無文帯下端に横走沈線を引き以下に条線文を施す小振りの平縁土器である。12は内湾傾向を示す平縁土器で、口縁部に無文帯を持つが明確な区画描線を持たず、地文の条線帯へと移行するものである。13は波状縁深鉢の口縁部装飾突起と思われる。口縁部文様帯から続く隆帯を捻転させながら立ち上げ、上端面には渦巻文を形成する。14・15は同一個体と思われるもので、横走沈線で縁どる横位の楕円区画を持つ小型の壺型土器と思われ、楕円区画内には単節縄文が充填される。17・18は無文の底部資料である。前者は大きく外反しながら立ち上がるもので、わずかに上げ底風となる。底径7㎝を測る。後者は直線的に立ち上がるもので、底径8.5㎝を測る。

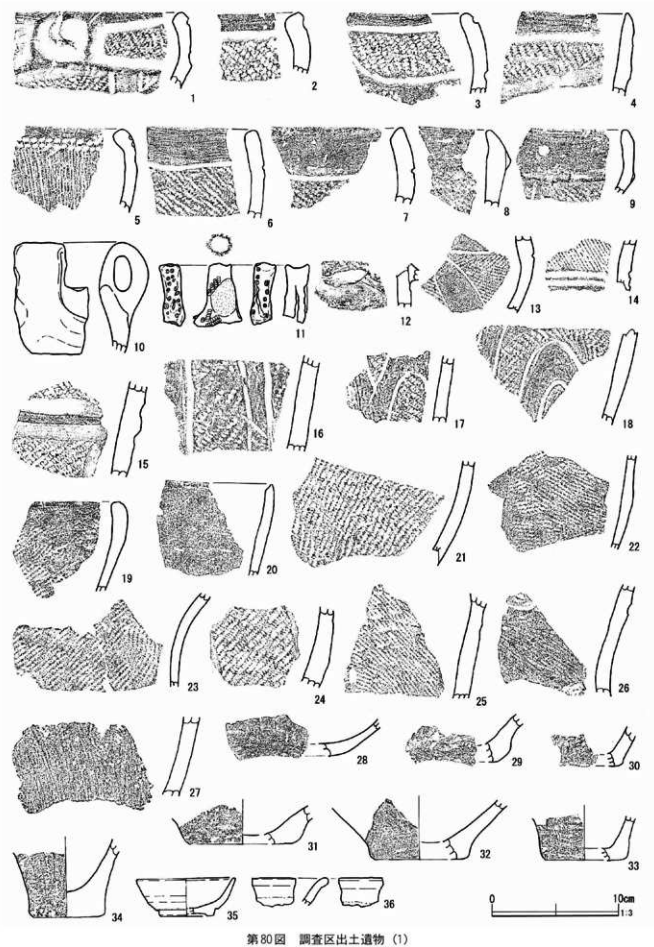
石器　19は硬砂岩製の打製石斧である。基部を欠く。転石由来の大型剥片を素材とし、正面に素材剥片の主剥離を、裏面に礫表皮を残す。両側縁の成形は主に裏面側からの丁寧なもので、最終的に表裏両面から調整加工を施して仕上げている。20はホルンフェルス製の打製石斧の基部残欠である。転石素材の剥片を素材としており裏面に素材剥片の主剥離を、側縁に礫表皮が残される。両側縁の成形加工は主に裏面からの加撃で行われる。

第14表　第1号不明遺構出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
79	19	打製石斧	硬砂岩	(8.4)	5.2	1.8	(823.0)	
79	20	打製石斧　基部	ホルンフェルス	(5.1)	(4.4)	1.6	(35.0)	

(4) 調査区出土遺物（第80・81図）

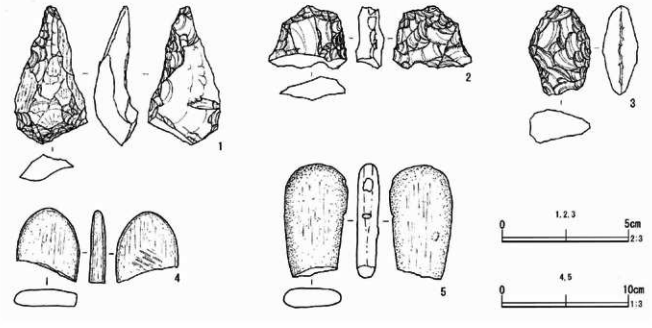
土器　第80図1～3は平縁となるキャリパー形深鉢の口縁部資料である。いずれも浅い沈線で横位の楕円区画を形成するもので、加曽利ＥⅢ式期に比定される。このうち1では楕円区画間に巻の緩い渦巻文が描かれる。4も浅い沈線で楕円区画を設けるものであるが、外反しながら開く口縁部が特徴的である。5は内湾傾向を示す平縁の口縁部資料で、口縁部外面に2列の刺突列を持ち以下は櫛状工具による条線文が施される。6・7は口縁部に無文帯をもちその下端を1条の沈線で区画している。区画描線以下は単節縄文である。8・9は口縁部無文帯下端を微隆帯で区画したものである。後者では縄文地文上に垂下沈線が見られる。10は平縁深鉢の口縁部資料で、大型の橋状把手をもつものである。把手周辺は無文である。11は口縁波頂部に付された装飾突起と思われる。両脇には2列の刺突、表側には縄が施文されている。上端面は中央を窪め坏状を呈す。また、表裏から板状粘土を合わせて成形されたものと思われ、突起の芯に空洞が見られる。12は両耳壺の胴部と思われ、橋状把手の上部付け根が残される。13はキャリパー形深鉢の口縁部付近の破片資料である。口縁部を欠くが、口縁部無文帯下端の沈線と、斜行する磨消文帯が観察される。地文は単節RL縄文で、口縁部無文帯区画描線直下は横位施文、以下は縦位施文である。14・15は横走する2条の太い沈線が観察される胴部資料である。後者ではこれを起点として垂下する沈線も看取される。16は2条の沈線に挟まれた磨消文帯と縄文帯とが交互に垂下する深鉢形土器の胴部資料である。17・18は「∩」状の縄文帯、磨消文帯の見られる胴部資料である。19は口縁部に無文帯を持つ平縁の深鉢形土器である。無文帯と以下の縄文帯とを画す描線は認められない。地文は単節RL縄文である。20は無文の平縁口縁部資料である。21～26は縄文の施される胴部資料である。このうち23は上部が大きく外反す



第80図　調査区出土遺物（1）

るもので、キャリパー形深鉢頸部付近と思われる。24は両端に垂下沈線の痕跡を認める。26は上下両端に太目の沈線の痕跡を認める。27は無文の胴部資料である。28～34は底部資料である。28は大きく開くもの、30は単節縄文の施されたもの、34は底面の厚いものである。35は黒色の釉薬の塗られた推定口径4.8cm程の浅鉢である。36は志野焼の口縁部である。

石器　第81図1・2は2次加工剥片である。1は角礫由来の横長の不整形剥片を素材とし、裏面に素材剥片の主剥離面を残す。正面には節理面を残す。正面には基部と左側縁上部を中心とする丁寧な剥離が繰り返し施される。裏面では左側縁に丁寧な剥離を加え、先端部を尖らせようとしている。石錐を意図していたものと思われるが、使用の痕跡は認められない。2は横長の剥片を素材とするものと思われ、正面に素材剥片の主剥離面を残す。上部を中心に表裏から繰り返し剥離を加えている。3はフリント製の火打石と思われるもので、縦断面は紡錘形、横断面は楔型を呈する。ところどころ赤い錆が付着しており、鉄製品との擦過痕と思われる。4は砂岩製の磨石である。下半を欠くが、扁平な楕円系に整形され、使用面は表裏両面に及ぶ。裏面中央には、数条の右下がりの深い擦痕が残される。5は磨石兼敲石である。下端がすぼまるような扁平な円礫を素材とし、表裏両面を磨石として使用している。また、側縁及び上端部に敲打痕が残される。



第81図　調査区出土遺物（2）

第15表　調査区出土石器計測表

図	No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
81	1	2次加工剥片	赤チャート	5.5	2.9	1.8	15.3	
81	2	2次加工剥片	赤チャート	2.5	3.1	1.0	7.5	
81	3	火打石？	フリント	3.6	2.4	1.4	11.1	
81	4	磨石	砂岩	(4.8)	4.9	1.3	(44.9)	
81	5	磨石兼敲石	閃緑岩	(8.6)	4.6	1.4	(121.3)	

Ⅳ 考　　察

1　瓦窯跡の操業年代と瓦生産

第5地点で検出した第1号瓦窯跡の構造については第Ⅲ章で触れたとおりであるが、「だるま窯」と呼ばれる燻し瓦を焼く平窯跡を調査する機会を得た。だるま窯は16世紀の初頭から認められ、江戸時代以降、盛んに築かれようになる。昭和30年代までは、だるま窯の操業は各地で日常的に認められる。昭和40年代になると燃料となる松材や松葉の確保が困難となり、大量生産による瓦工場とのコスト差や煙による公害問題などが生じたために、ほとんどのだるま窯が全国から姿を消すこととなる。

白岡町史編さん時の屋号調査によれば、白岡市域で瓦屋に関わる屋号は2軒認められる（白岡町教育委員会編 1978）。1軒は寺塚の戸張欽一家で、もともと瓦屋を生業としており、魔除けのために昔当家で焼いた瓦の鍾馗様の像が保存されているという。もう1軒が白岡の山地区に所在する井上徳次家で、「西山の瓦屋」という通称で呼ばれ、先祖の喜右ヱ門という人が、明治初期頃まで瓦の製造販売を生業としていたようである。山遺跡内での位置関係から推し量ると、この「西山の瓦屋」で操業していた瓦窯跡を、第5地点において調査した可能性が非常に高く、第1号瓦窯跡の操業年代は明治時代前期までと考えられる。

埼玉県内の瓦生産業者を集成した『埼玉のかわら』（埼玉県立民俗文化センター編 1986）によれば、明治8年の瓦生産者取調に掲載された白岡市域の瓦生産者は、明治2年創業の篠津村の鈴木忠次郎のみである。山地区の井上家が含まれていない点が気にかかるが、この取調は県北方面や西部地域の生産者が全く含まれていないなど、県内全域をくまなく網羅したものとは言い難いようである。日本瓦業総覧による大正15年の市域の瓦生産業者は、高岩の井上忠次郎、寺塚の白張善次郎（「戸張」の誤記か）、野牛の鈴木七五郎、白岡の鈴木又蔵があげられる。井上家は含まれておらず、屋号調査のとおり、明治時代以降は廃業したものと考えられる。昭和16年に埼玉県瓦工業組合連合会組合員として市域で名を連ねているのは、篠津の土屋徳蔵、千駄野の鈴木市郎、高岩の井上忠次郎、寺塚の戸張善吉の4名である。

大正・昭和期においては、井上家による瓦生産の記録は認められず、山地区の井上家による瓦生産はほぼ明治期までに限られるようである。山地区における瓦生産がいつから始められたのかは定かではないが、だるま窯の多くは、築造後数年毎に構築を繰り返すことが多く、修築を繰り返しながら長期間使用する事例は稀なようである（関西大学文学部考古学研究室 1998）。第1号瓦窯跡も少なくとも3回の操業が行われたようであるが、周辺で同様の瓦窯跡は現在のところ認められていない。遺構部分の計測となるが、第1号窯跡の総長が4.2m、最大幅が1.7mという比較的小振りな規模である点も考え合わせると、井上家による瓦生産は明治期における比較的短期間のものであった可能性が考えられよう。いずれにしても、地域の近代化を考える上で、貴重な産業遺産であることには間違いない。

引用文献

関西大学文学部考古学研究室　1998　「愛知県高浜市田戸町所在近代達磨窯 高橋榮・秋人瓦窯実測調査報告」『関西大学博物館紀要』第4号　関西大学博物館

埼玉県立民俗文化センター編　1987　『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告書第4集

白岡町教育委員会編　1978　『白岡町の文化財』第3集

写　真　図　版

掘削作業状況（1）

掘削作業状況（2）

実測作業状況（1）

実測作業状況（2）

図版2

第5地点調査区北半部全景

第5地点調査区南半部全景

第1号住居跡

第2号住居跡

第3号住居跡

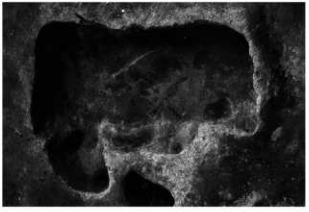
図版4

第4号住居跡

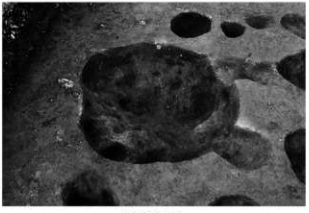
第5号住居跡

第1号掘立柱建物跡

第1号土坑

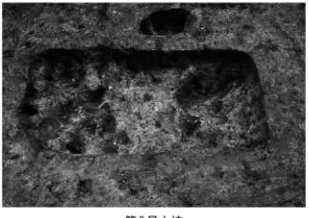


第3号土坑

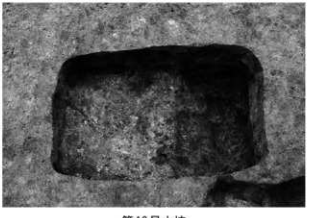


第7号土坑

第8号土坑



第9号土坑

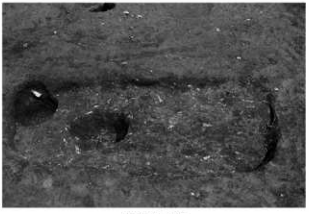


第16号土坑

図版6

第21号土坑

第22号土坑

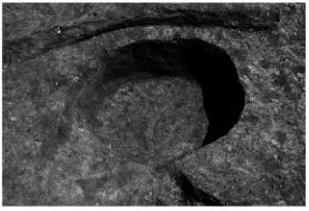


第26号土坑

第27号土坑

第30号土坑

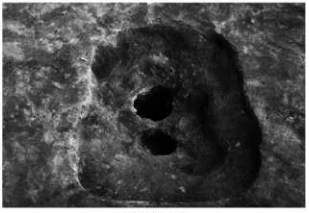
第46号土坑



第51号土坑

第56号土坑

第61・62号土坑



第71号土坑

第76号土坑

第79号土坑

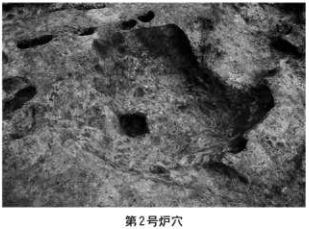
図版8

第81号土坑

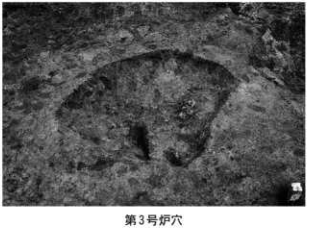
第82号土坑

第87号土坑

第90号土坑



第2号炉穴



第3号炉穴

第3号溝跡

第4号溝跡

第5号溝跡

第6号溝跡

図版10

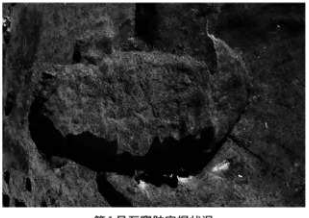
第1号瓦窯跡遺物出土状況

第1号瓦窯跡 A 窯体瓦出土状況

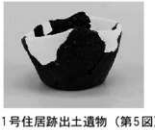
第1号瓦窯跡 B 窯体瓦出土状況

第1号瓦窯跡 A 窯体土層断面

第1号瓦窯跡底面検出状況



第1号瓦窯跡完掘状況



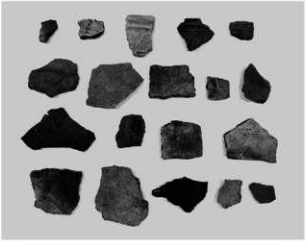
第1号住居跡出土遺物（第5図）

第2号住居跡出土遺物（1）（第7図）

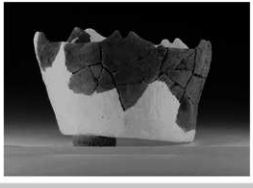
第2号住居跡出土遺物（2）（第8図）

図版12

第3号住居跡出土遺物（1）（第10図）



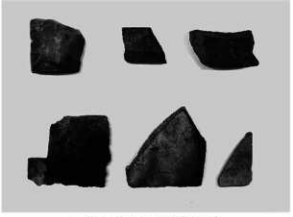
第3号住居跡出土遺物（2）（第11図）



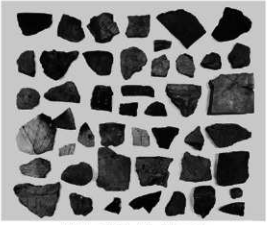
第5号住居跡出土遺物（第15図）

第4号住居跡出土遺物（第13図）

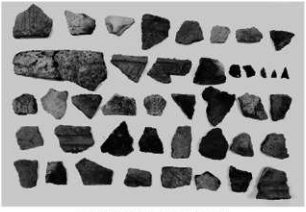
土坑出土遺物（1）（第23図）



土坑出土遺物（2）（第25図）

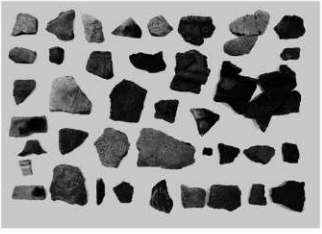


土坑出土遺物（3）（第27図）

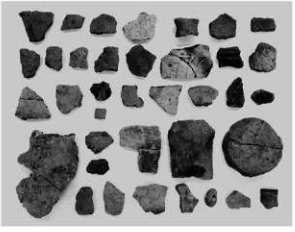


土坑出土遺物（4）（第29図）

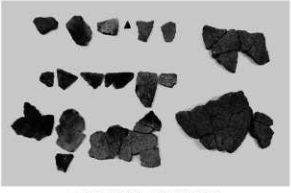
図版14



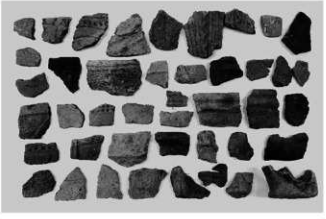
土坑出土遺物（5）（第32図）



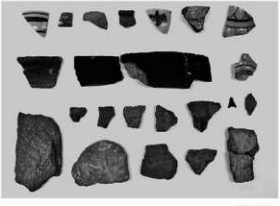
炉穴出土遺物（第38図）



土坑出土遺物（6）（第35図）

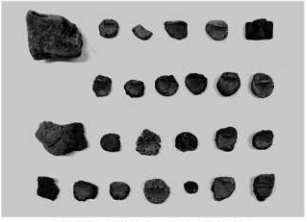


溝跡出土遺物（1）（第42図）



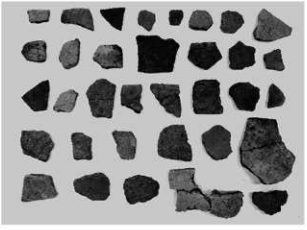
溝跡出土遺物（2）（第43図）

溝跡出土遺物（3）（第44図）

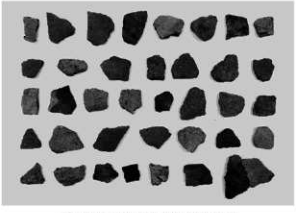


第1号瓦窯跡関連土製品（第49図）

第1号瓦窯跡出土遺物（第48図）

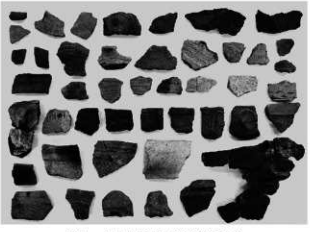


グリッド出土遺物（1）（第50図）



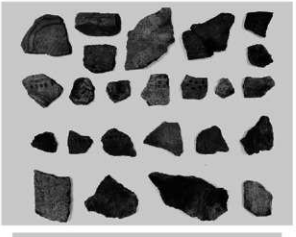
グリッド出土遺物（2）（第51図）

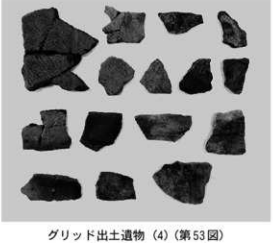
図版16



グリッド出土遺物（3）（第52図）

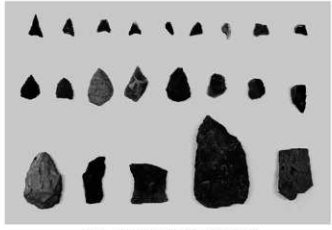
グリッド出土遺物（5）（第54図）





グリッド出土遺物（4）（第53図）

グリッド出土遺物（6）（第55図）



グリッド出土遺物（7）（第56図）

グリッド出土遺物（8）（第57図）

第5地点出土金属製品（第58図）

図版18

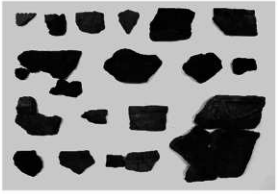
第11地点調査区全景

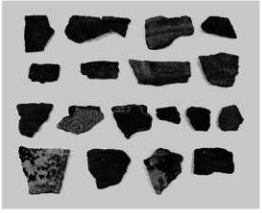
第6号住居跡

第6号住居跡遺物出土状況（1）

第6号住居跡遺物出土状況（2）

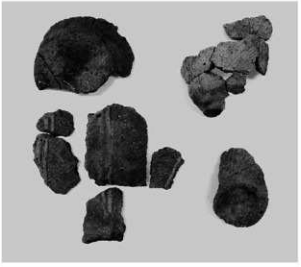
第101号土坑



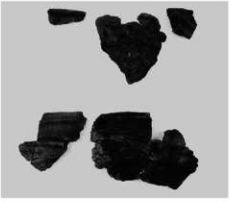


第6号住居跡出土遺物（1）（第62図）

第6号住居跡出土遺物（2）（第63図）

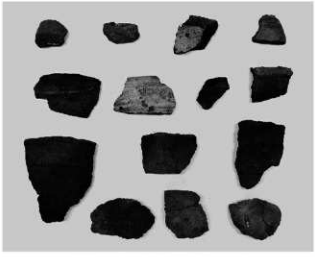


第6号住居跡出土遺物（3）（第64図）



第6号住居跡出土遺物（4）（第65図）

第6号住居跡出土遺物（5）（第66図）



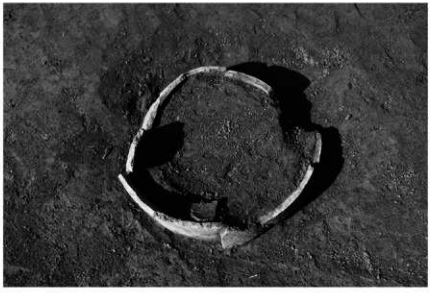
土坑・調査区出土遺物（第68図）

第18地点調査区東半部全景

第18地点調査区西半部全景

図版24

第7号住居跡



第7号住居跡炉体土器

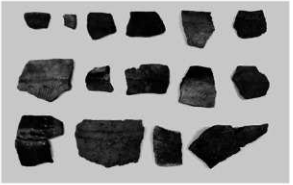
第8号住居跡

第102・103号土坑

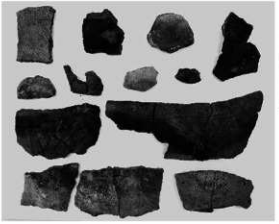
第104号土坑

第1号不明遺構

第7号住居跡出土遺物（第72図）

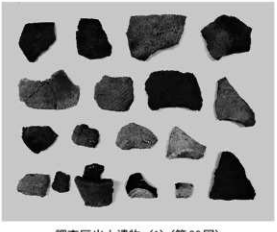


第8号住居跡出土遺物（1）（第74図）

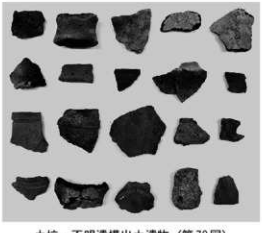


第8号住居跡出土遺物（2）（第75図）

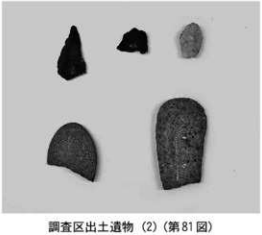
第8号住居跡出土遺物（3）（第76図）



調査区出土遺物（1）（第80図）



土坑・不明遺構出土遺物（第79図）



調査区出土遺物（2）（第81図）

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ヤマイセキ(ダイゴ・ジュウイチ・ジュウハチチテン)
書 名	山遺跡(第5・11・18地点)
副 書 名	市内遺跡群発掘調査報告書XXXI
シ リ ー ズ 名	白岡市埋蔵文化財調査報告書第33集
編 著 者 名	杉山 和徳　奥野 麦生　田中 優起
編 集 機 関	白岡市教育委員会
所 在 地	〒349-0292　埼玉県白岡市千駄野432　　TEL　0480－92－1111
発 行 年 月 日	2024(令和6) 年3月31日

所収遺跡(フリガナ)	所在地(フリガナ)	コード 市町村	コード 遺跡	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
山遺跡(ヤマイセキ)	第5地点 白岡(シラオカ)790-3、-10、791-1 第11地点 白岡(シラオカ)819-1 第18地点 白岡(シラオカ)746-2、-8	11445	014	36° 00′ 45″	139° 39′ 30″	第5地点 19990405 ～ 19990531 第11地点 20130805 ～ 20130809 第18地点 20220901 ～ 20221025	第5地点 1,049.38 第11地点 100 第18地点 512	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山遺跡	集落	縄文時代中期 中・近世 近代	住居跡8軒 掘立柱建物跡5棟 土坑104基 炉穴4基 溝跡6条 瓦窯跡1基 不明遺構1基	縄文土器・陶器・磁器・土製品・瓦・石器・金属製品	明治時代の瓦窯跡を検出した。

遺跡の概要
縄文時代中期の住居跡を8軒検出した。住居跡には埋設土器を伴うものが多く認められた。

白岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

山遺跡（第5・11・18地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXXI

令和6年3月28日　印刷

令和6年3月31日　発行

発行　白岡市教育委員会

印刷　朝日印刷工業株式会社